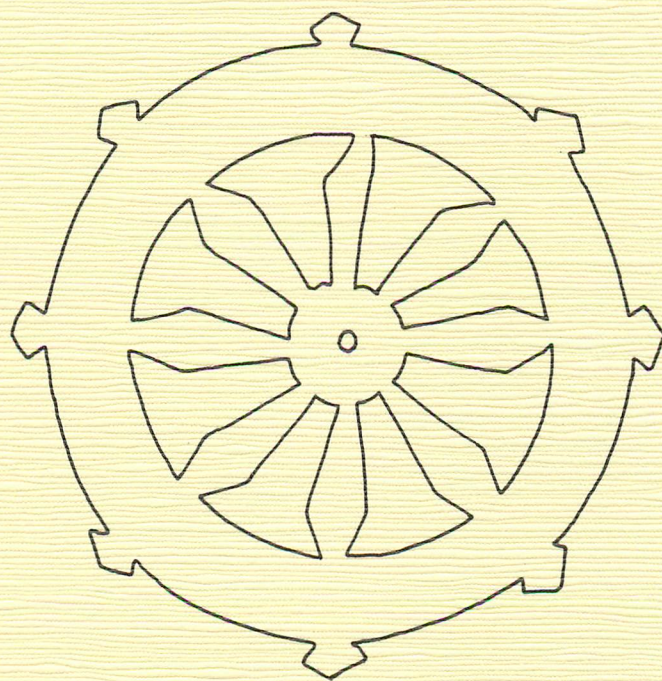


山梨県指定史跡

甲府城跡 VII



1997. 3

山梨県教育委員会

山梨県土木部

山梨県指定史跡

甲 府 城 跡 VII

1 9 9 7 . 3

山 梨 県 教 育 委 員 会

山 梨 県 土 木 部

序

本報告書は、平成2年度より山梨県土木部が10年計画で行っている舞鶴城公園（県指定史跡甲府城跡）整備事業に伴って、96年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものであります。

本年度で7年を経過したため、石垣の修復工事も本丸北側及び稲荷曲輪周辺を残すのみとなりました。今までに修復が完了した石垣は5000平方メートルを越えております。修復工事と並行して行って参りました石垣石材調査も試行錯誤を繰り返しながら、穴太積み技法の解明の一助となるであろうデータの蓄積が進んでおります。

本年度は本丸及び西側に位置する銅門、稲荷櫓台及び南側に延びる腰石垣の調査を行いました。銅門跡では、享保12年の大火の痕跡を検出し、本丸中央部の調査では、金箔瓦を含む瓦溜めを確認いたしました。稲荷櫓台の調査では、昨年度末に引き続いて礎石の下から輪宝が4枚が出土して合計5枚となりました。

甲府城跡調査検討委員会では、昨年度同様に石垣調査検討会を開催し、佐賀県・広島県・鳥取県から城郭調査担当者をお招きし、石垣調査と整備について西日本の実例を発表していただき、多くの課題がある石垣修復についての調査方法を中心に、議論を深めてまいりました。こうした意味からも本報告書が多くの方々に活用され、研究の一助となれば幸いに存じます。

末筆ながら、本年度の調査にご指導、ご助言をいただきました調査検討委員会の先生方をはじめ、山梨県土木部都市整備課・甲府土木事務所、文化財保存計画協会、現場でご協力をいただいた工事関係者、直接発掘調査に携わっていただいた皆様に心より感謝申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

目 次

第1章 歴史的・地理的環境	1
第2章 調査の経緯	
第1節 本年度の調査経緯	3
第2節 調査検討委員会の経過	5
第3章 発掘調査	
第1節 稲荷櫓台	15
第2節 稲荷曲輪腰石垣	21
第3節 本丸	25
第4節 銅門周辺	28
第4章 石材調査	31
第5章 出土遺物	55
第6章 山梨県内出土の地鎮具	64
第7章 石垣調査検討会	66
北部九州の近世初期城郭石垣をめぐる諸問題	67
広島県山県郡東部地域の石垣について	68
史跡富田城跡歴史概要	70

例 言

1. 本書は1996年度に実施した山梨県指定史跡甲府城跡の整備事業に伴う発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 発掘調査は、山梨県土木部から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 整備事業は甲府土木事務所都市整備課が担当し、設計管理等は(株)文化財保存計画協会が受託した。
4. 本城には、甲斐府中城・錦城・赤石城・舞鶴城などの別称があるが、本書では史跡の指定名称である甲府城跡を採用した。なお、都市公園としての名称は舞鶴城公園である。
5. 本年度の調査では、次の方々に貴重なご助言を賜った。記して感謝申し上げます。
深沢徳明・田中哲雄・服部英雄・中村博司・吉村 稔・今泉俊文・上野晴朗・加藤充彦・森島康雄
木戸雅彦・土山公仁・塚田順正・大島慎一・朴 永周・数野雅彦・宮武正澄・竹中 哲・木村信幸・林陽一郎
6. 本年度の調査では、次の方々及び機関にご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。
島根県広瀬町教育委員会・佐賀県立名護屋城博物館・広島県教育委員会
山梨県土木部都市整備課・甲府土木事務所・山梨県立青少年科学センター・株式会社文化財保存計画協会・株式会社甲斐コーポレーション・斉藤建設株式会社・大同建設工業株式会社・藤造園株式会社・有限会社金井農場・株式会社共立緑地・山梨県史編纂室
7. 本書の作成にあたり、次の方々に貴重な資料を提供していただいた。記して感謝の意を表します。
大和郡山城史跡柳沢文庫保存会・坂田邦夫・露木弘光（敬称略）
8. 本年度の調査担当者及び参加者は次のとおりである。
調査担当者 八巻與志夫・崎田 哲
調査員 弦間千鶴
整理員 柏木まつ江
調査作業員（順不同、敬称略）
村田勝利・保坂甲次・須賀富雄・保坂 睦・岡部 和・志村 悟・飯島良雄・篠原勝男
森下 豊・小林早苗・保坂太美保・守屋敏子・羽中田弘・神沢正孝・久保健司・工藤忠誠
深沢太郎・降矢哲男・中込敦士・森本通久・井戸 明・柴田昭仁・清水重雄
10. 本年度の石垣修復工事に従事した方々は次のとおりである。
宮島秀夫・今井良治・福重幸治・関口 忠・金沢政憲・高桑淳三・本田幸三・鴨志田尚志・秋本幸治・小林 保
11. 本報告書の執筆は八巻與志夫が第2章第2節・第3章第4節・第4章・第5章・第7章を、崎田哲が第2章第1節・第3章1節～第3節を、柏木まつ江が第1章を、降矢哲夫が第6章を行った。
12. 本報告書に掲載した図面の実測・トレースは弦間千鶴・柏木まつ江が、レイアウトは弦間千鶴が行った。
13. 本報告書に掲載した写真・図面などの資料は山梨県埋蔵文化財センター内に保管してある。

第1章 歴史的・地理的環境

甲府盆地を眼下に見下ろし、愛宕山に連なる甲斐の連山を背にした甲府城跡は、かつての領主が権威の象徴として築いた高石垣だけを今に残している。城跡は明治37年に舞鶴公園として開放され、さらには昭和42年に総合調査が行われ、翌年には県指定史跡として公示された。この城は、一条小山と称された安山岩質の丘陵を利用して築城された平山城である。

城域である一条小山は、12世紀末には甲斐源氏である一条忠頼の居館が置かれていたが、源頼朝の疑心を受けた忠頼の死に伴いその後尼寺として、また一条時信の時、二世遊行上人他阿真教への帰依により正和元年（1312）僧寺に改められ、時宗稲久山一蓮寺として庵を結んだ。その後武田氏時代、信玄の時世には連歌の会が催されるなど戦国時代を通じて武田氏の厚い保護を受けたが、時代の趨勢は天下統一へと向かい、天正10年織田・徳川の両軍の前に武田氏が滅び去ると寺の様相も一変した。甲斐における支配体制も中世的秩序を破壊する新しい局面を迎え、武田氏から支配者を信長に、さらに6月の本能寺の変後空白となった甲斐に領土を求めた法条氏と徳川氏との甲斐領有を巡る戦い（天正壬午の乱）が起こり、武田遺臣の懐柔策に成功した徳川氏が入国を果たした。家康は三河・遠江・駿河に加えた甲斐・信濃5カ国を領有することとなり、同12年の小牧・長久手の戦いでは豊臣秀吉と対等の立場を確実にしていった。これらを含め、一蓮寺の移転とその跡に築城された甲府城の様子について等々が、甲斐志料集成4『稲久山一蓮寺及び甲府城旧記』で次のように記している。

「一 神祖御入国の刻古府に於いて仮御殿建て、天正十八年数次に及び御按行ありて、此御殿に御逗留なし給ふ。其頃一倏小山に今の府城を築かれ御結構あり繩張を命せらると云ふ。

一 府中城（又稱甲府）古の巨摩郡青沼郷の域なり。後山梨郡に属し北山筋の内、一條の庄にして、則ち一條忠頼之旧墟なり。変じて佛區として其胤時信の輩加飾して田園を棄て追福として一條道場一蓮寺號日（即ち夢山の尾崎にて又小山名所なり）文禄慶長の間一蓮寺、及び湯田の民戸、住吉明神（城地の鎮守地）社寺を今の地に遷し、復城郭としてなり。・・・」

猶、この旧記では一蓮寺の地を「本具（唐金輪胴并錠形）を発見せる場所は、甲府旧城内屋形曲輪と唱ふる所にして、地下を発掘する事凡貳丈餘の土中より、発見するものなり。」云々としている。家康の領国として一条小山が築城のために選地されて縄張りが行われたと言われているが、一蓮寺は加藤遠江守の時新府中城下町の端、倉田村（現在の太田町）に1万坪の替地で転移を余儀なくされたのである。

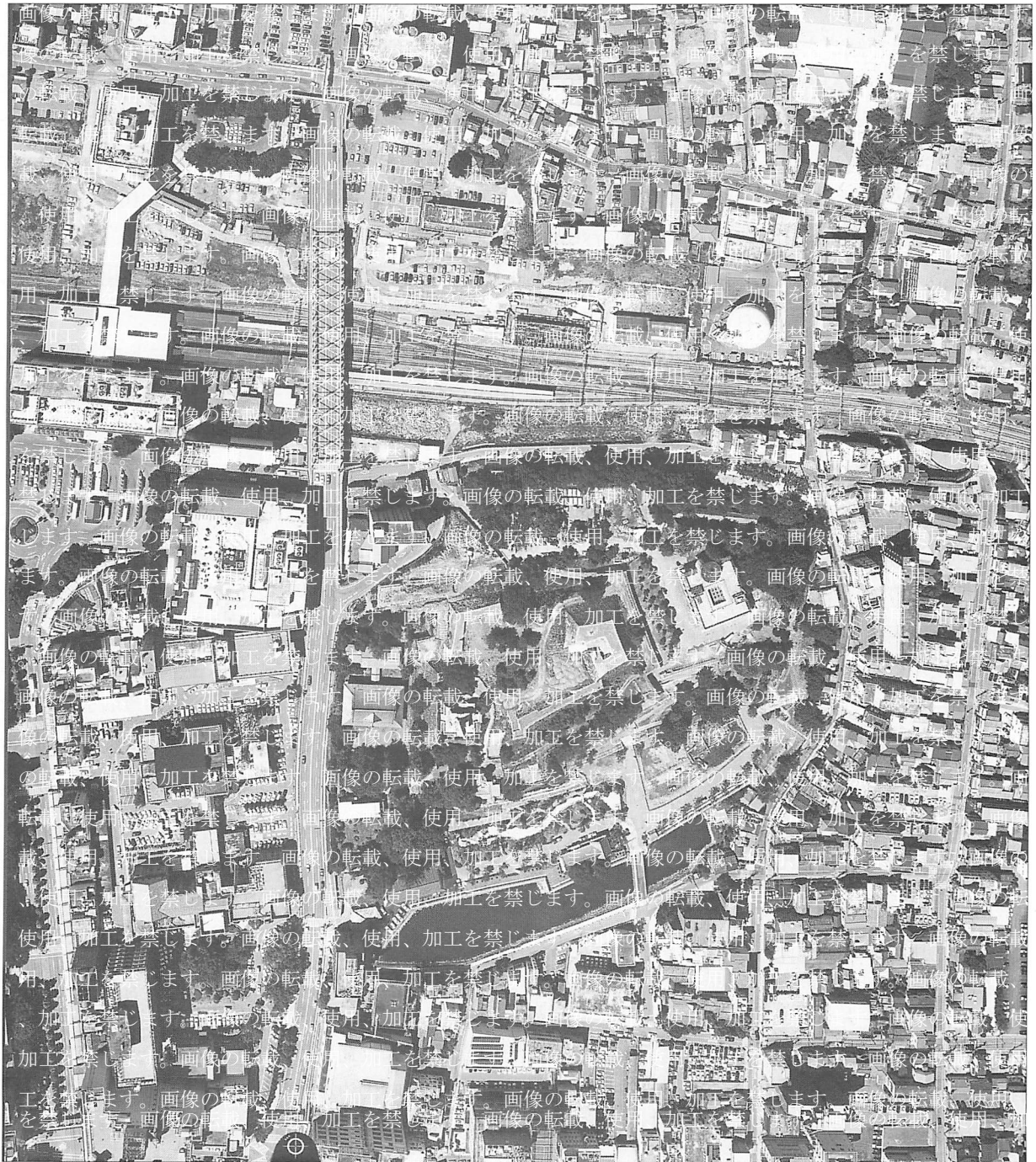
甲府城の築城は、徳川家康による一蓮寺の移転の目論見の中で縄張りがされた。天正18年の小田原の役後は事実上天下統一を果たした秀吉政権下で家康の関八州移封とこれを包囲する形で東海道筋・東山道筋十甲州筋といった防衛ライン上の秀吉による大幅な領主の配置転換が断行された。家康を意識した東の要としての甲府城築城の重要性が生じていた。事実、同年羽柴少将秀勝が24万石で入甲して築城のために桶屋等に文書発給を行った。翌年には加藤遠江守光泰がこれを引き継ぎ、文禄2年光泰は朝鮮出兵中から光政・光吉への書状で「その国普請、土手、ひがしの丸、石かき出来候や」『大洲加藤家文書』と進捗状況を尋ねるが、帰国を果たさずして病没した。その後は五奉行の一人浅野長政の支配となり、文禄3年浅野長吉による「国中之大鋸引式拾六人、当城普請請召使候之中者、諸役令免除者也」『新編甲州古文書』、また慶長3年幸長の書状「小山普請之義、其方に在之侍そうり（草履）取まで、申付被候由尤候、油断無様に肝煎被可事」『山梨県史近世資料編』・『大日本古文書わけ浅野家文書』等が記すように、豊臣政権下において築城を急ピッチな工事で完成に持ち込んだ。発掘調査からも豊臣政権を誇示するような金箔を押した五三・五七の桐門瓦や浅野家家紋瓦などが検出されている。

甲府城は寛文年間の綱重・綱豊統治の甲府藩時代の修築、柳沢氏時代約20年間の統治による大規模な修築をみても、築城の当初の目的とは掛け離れた徳川政権下における政治的、経済的な要素の下に位置付けられていった。享保9年の勤番制移行と、同12年の甲府大火は城内の殆どを焼失し、財政逼迫の幕府では再建築は思うに任せず、敵を防ぐための、加えて権威の象徴といった城の意味合いは徳川終末期を迎えずして消え去っていた。

城の役目も幕末の動乱期には城代が再び置かれて復活するが、大政奉還による明治政府の樹立と同元年の鎮撫

府から甲府県への移行、そして同5年には山梨県となり、県庁が楽屋曲輪に、清水曲輪には中央線が開通し近代都市の中心部となった。同年の廃城令は全国に亙って近世城郭の取壊しの政府通達であったが、漸く残された内郭もその機能の喪失から城郭が挟まれ、大正15年には内堀の一部も埋められた。3分の1と縮小された甲府城も村松甚蔵氏のご尽力の下に県民の公園として、又桜の名所として親しまれ、平成2年からは10年計画で孕んだ石垣の保存のための平成の大修復工事とそれに伴う発掘調査が本格的に行われている。

北



第1図 甲府城及び周辺空中写真

第2章 調査の経緯

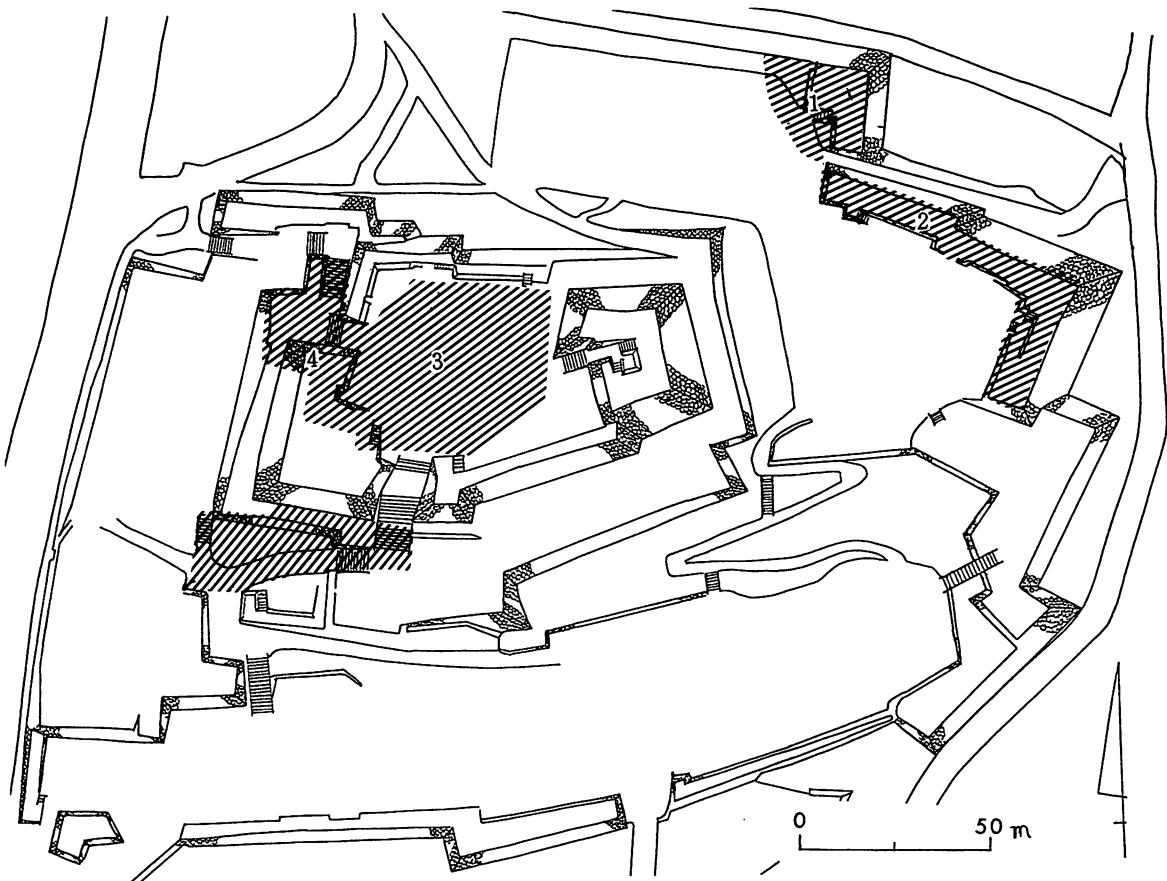
第1節 本年度の調査経緯

4月12日～4月24日	帯曲輪西面石垣解体調査
4月15日～4月24日	稲荷櫓台天端遺構確認調査
4月25日～5月16日	稲荷櫓台西面石垣解体調査
5月17日～2月26日	本丸中央部遺構確認調査
5月28日～5月29日	稲荷櫓台南面石垣解体調査
6月7日～9月27日	本丸銅門南遺構確認調査
7月3日～7月12日	本丸櫓台階段確認調査
7月18日～12月20日	稲荷曲輪東腰石垣天端遺構確認調査
7月29日～8月5日	鉄門階段解体調査
8月5日～10月30日	中ノ門跡及び周辺遺構確認調査
10月11日	鍛冶曲輪門完成
11月15日	第1回調査検討委員会（於舞鶴城公園管理事務所）
11月17日	現場見学会
12月2日～12月10日	内松陰門及び周辺遺構確認調査
12月10日～12月11日	柵門跡及び周辺遺構確認調査
12月24日～1月9日	稲荷曲輪東腰石垣解体調査
1月10日～1月31日	本丸銅門南腰石垣解体調査
1月14日～1月23日	稲荷曲輪北腰石垣解体調査
1月22日	第2回調査検討委員会（於舞鶴会館）
1月30日～3月24日	天守曲輪南腰石垣付近遺構確認調査
2月6日～2月24日	二ノ丸北腰石垣解体調査
2月24日～3月25日	鉄門階段西（帯曲輪東端）石垣解体調査
3月5日～3月7日	資料調査（於広島市立中央図書館）
3月12日	石垣検討委員会
	第3回調査検討委員会（於恩賜林記念館）
3月25日～3月26日	資料調査（於広島市立中央図書館）

本年度の調査経緯は、以上に示したとおりである。

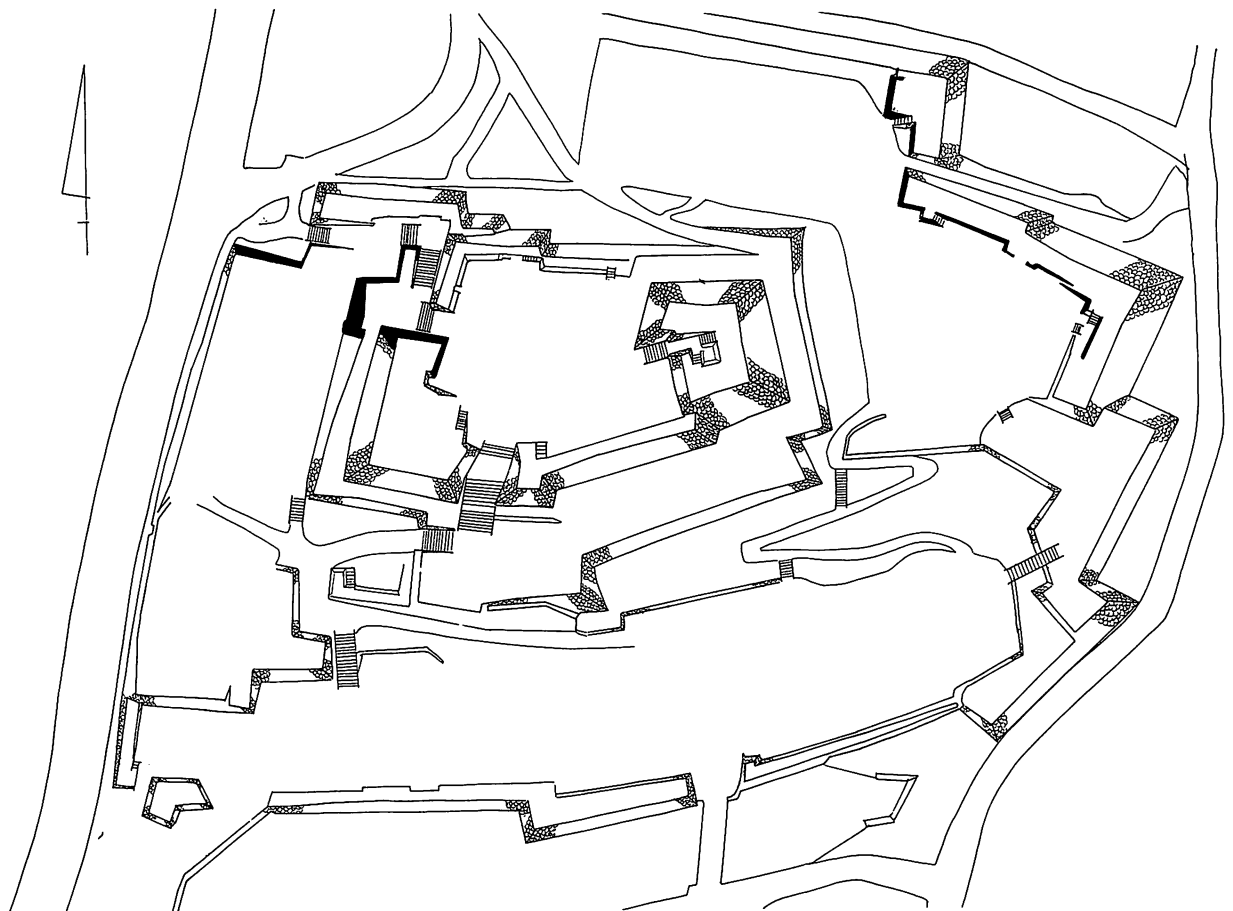
発掘調査の詳細は第3章において述べるが、本年度は稲荷櫓台で密教法具である輪宝が検出されたのを始め、稲荷曲輪北腰石垣にみられる築城から間もなくの縄張り変更の痕跡や、これを例証するかのよう検出された本丸直下の岩盤と瓦溜めの状況など、甲府城の築城期に関わる発見が相次いだ。雨天などによって中断・中止を余儀なくされる場合もあったが、このような場合には瓦を始めとする出土遺物の洗浄・註記などの整理作業を行い、発掘の成果を確認しながら調査の合理化を図った。

また、発掘調査の円滑な進行を期して、例年のとおり、毎月2回（隔週）木曜日に甲府土木事務所・公園整備事業関係業者・文化財保存計画協会・文化財建築保存協会などと発掘調査担当者との間で工程会議を開催した。



1 稻荷櫓台 2 稻荷曲輪腰石垣 3 本丸 4 銅門南

第2図 本年度調査位置図



第3図 本年度石垣修復範囲（黒塗部分）

第2節 調査検討委員会の経過の経過

整備工事に先立って1990年7月から発掘調査に着手したが、通常の調査ではなく、調査成果を整備事業に反映させることが前提である。そのため、調査方法及び整備内容について、考古学・建築史学・造園学・文献史学の各分野の専門家で構成する「山梨県指定史跡甲府城跡調査検討委員会」を設置した。年間3回程度の委員会を開き、調査方法や調査の中間報告を行うとともに必要な指導を受け、また整備内容を協議している。

山梨県指定史跡甲府城跡調査検討委員会名簿

委 員	磯 貝 正 義	山梨大学名誉教授
	佐 藤 八 郎	前山梨県文化財保護審議会委員
	野 沢 昌 康	山梨県考古学協会名誉会長
	谷 口 一 夫	山梨県考古学協会会長
	萩 原 三 雄	帝京大学山梨文化財研究所研究部長
	十 菱 駿 武	山梨学院大学教授
	服 部 英 雄	九州大学教授
	田 畑 貞 寿	千葉大学名誉教授
	安 達 満	山梨郷土研究会理事
	北 垣 聡一郎	奈良県立橿原考古学研究所研究員
関 口 欣 也	横浜国立大学教授	
事業主体	小 俣 文 吉	山梨県土木部都市整備課課長
	三 井 時 男	山梨県土木部都市整備課課長補佐
	酒 井 秀 視	山梨県土木部都市整備課公園担当
	手 塚 武 久	山梨県土木部都市整備課公園担当
	野 口 努	山梨県土木部都市整備課公園担当
	若 林 洋	山梨県土木部甲府土木事務所都市整備課課長
	志 村 武 男	山梨県土木部甲府土木事務所都市整備課公園担当
	岩 間 昭 憲	山梨県土木部甲府土木事務所都市整備課公園担当
設計監理	川 上 敏 朗	株式会社文化財計画協会
史跡管理	小 池 光 夫	山梨県教育委員会学術文化課課長
	加 藤 正 彦	山梨県教育委員会学術文化課課長補佐
	竹 井 保 久	山梨県教育委員会学術文化課文化財担当
	出 月 洋 文	山梨県教育委員会学術文化課文化財担当
	中 山 誠 二	山梨県教育委員会学術文化課文化財担当
事務局	大 塚 初 重	山梨県埋蔵文化財センター所長
	森 和 敏	山梨県埋蔵文化財センター埋蔵文化財指導幹
	八 卷 與志夫	山梨県埋蔵文化財センター調査研究第1課第三担当
	崎 田 哲	山梨県埋蔵文化財センター調査研究第1課第三担当

平成 8 年度第 1 回調査検討委員会会議録

I 日 時 1996年11月15日 午後 1 : 30 ~ 5 : 00

II 会 場 舞鶴城公園管理事務所会議室

III 会議内容

今年度調査概要・今後の予定

☆本丸で出土した陶器類と瓦とは別時期のものではないのか。

§ 瓦を埋める際掘り返した土の中に陶器が含まれていて、瓦を埋めた後に陶器の含まれた土を埋め戻したのではないかと考えています。

☆金箔瓦は相当数にのぼるのか。

§ それなりの数になります。

☆トレンチは将来広げるのか。

§ その予定です。

☆鉄門・銅門について、床屋の軒下にある石は甲府城に關係する礎石か。

§ 甲府城に關係する礎石であると思われるが、理髮店の位置から地理的に最も近い場所にあったものとして梅林門の礎石ではないのか？。

☆山の手門の位置は。

§ 現在の山梨文化会館の辺りです。

☆理髮店の北側には大正年間までは堀があった。

§ 堀は理髮店の辺りから北に折れて延びていた模様です。

☆出土遺物は殆ど陶器、瀬戸・美濃・常滑などか。青磁・染付等はないのか。

§ 15世紀頃の青磁が過去に1点、数寄屋曲輪西石垣裏の盛土のなかより出土した。本丸は本来生活の場所ではありませんので生活色の強い遺物の出土は期待できない。むしろ山交デパートや県庁のある所の方が可能性が高いと思います。

☆16世紀のものだとされるが、築城期とは関係ないのか。又一蓮寺とは関係あるのか。

§ 陶器のような品物は伝世するので一概にそうは考えられません。

☆輪宝出土地区画が道場の中心であったと考えられないか。

§ 輪宝は稲荷櫓のものである。一蓮寺については本丸西側の石垣裏などから五輪塔などが出土している。それに対して本丸東側からは寺院に關係するようなものは出ません。そのことから一蓮寺は甲府城西南の位置にあったと考えられます。

☆他に金箔瓦はどこから出土したか。

§ 初年度に人質曲輪と同北腰石垣直下から出土した。その後は天守曲輪、稲荷曲輪、鍛冶曲輪などで数に多少はあるものの出土しています。

今年度整備事業・今後の予定

☆復元予定の建物は櫓と小さな門だが、城郭としては多聞櫓がないのは不思議である。

§ 柳沢時代の絵図によると多聞櫓はない。発掘調査によって礎石は確認されているが、17世紀末からの絵図には描かれていません。

☆占有住宅のある場所は堀だったのか。復元予定はあるのか。

§ 土手だった。堀は現在の道路東側にあり、道路の西側については植栽を計画しています。

☆年少の頃桜町道路は既にあり、堀は道路の東側にあった。

§あの道路を通したのは藤村県令の時代だったそうです。

☆今後柳沢なら柳沢時代で復元時期設定を明確にしたほうがよいのではないか。

§城郭には様々な時代のものが一時期に密集している例が多く、石垣は織豊期の穴太積みで、建物を新しい時代に限定するのは矛盾すると思います。

☆平成12年までに本丸櫓を造るのか。何層か。

§二層です。

☆荻生徂徠は三層と言っている。三層ならば天守と同じで、スペースには無理がある。

§実際の本丸櫓はもう少し東側にずれます。

☆稲荷曲輪北直下の道路とJR身延線跡地を交換できないか。

§それは出来ないと思う。身延線跡地に遊歩道的なものを造る計画はある。青少年科学センターは平成10年3月に移転するのでそれ以降に解体される。その他の石碑類の移転は現在までにほぼ完了し、現在残っているものは現状維持である。現在までに占有住宅はほぼ半数が立ち退き、或いは話がすすんでいます。

☆謝恩塔は移転しないのか。

§現在の計画の中には、ありません。

☆門が復元されてくると、計画・立案の時点でイメージしていた景観と大きく異なってくるので、謝恩塔のことは近い将来議論すべきである。謝恩塔の議論があってその先に本丸櫓の建設がある。

☆より適地に移築ならば問題も少ないのではないか。

☆県民の一人として問題があるように思う。

☆樹木の伐採をもっと進めるべきである。ギリシャのアクロポリス的なものが城郭である。

☆公園構想を聞かせて欲しい。城郭を復元するのか、公園として楽しむのか、その明確な目的はあるのか。

§5つのゾーンからなり主に鍛冶曲輪を公園、稲荷曲輪を遊び場、天守曲輪から上の空間が歴史復元ゾーンです。

☆山梨県のモニュメントとしての性格が強くなっている。この方向を進めるべきで変更も有り得る。

§舞鶴城公園再整備検討委員会で成立した経緯がある。この委員会は3年間に亘って開かれ、整備事業10年間の骨子を定めました。それ以上は事実上事業の実施段階で調査の状況に応じた議論を調査検討委員会で決定することになっています。基本方針は既にご確認頂いているが、再度ご検討頂き第2回の調査検討委員会で今後の方向を含めた検討を頂きたい。

☆本丸櫓の話が出てくると、全ての事柄が絡み一度議論をする必要がある。

☆県庁舎移転問題も絡んでくると思うが、県庁内ではどのように考えているのか。

§県庁舎検討懇話会の答申を踏まえて庁内にワーキンググループを設置して現在検討中である。当然埋蔵文化財の調査についても議論の中に出ています。

☆この2つの移転問題は謝恩塔や県庁移転の話題も出ているということを県庁内委員会などに伝えてくれないか。

平成8年度第2回調査検討委員会会議録

日 時 1997年1月22日(木) 14:00~16:30

場 所 舞鶴会館一階会議室

会議内容

本丸の一条小山の岩盤について

☆資料には「出土している瓦の年代から築城直後に本丸内部に穴を掘り地山の安山岩を切り出し、その穴に大量の瓦を廃棄して」とあるが、石を切り出して瓦を廃棄したのは築城直後なのか。

§築城期の瓦が捨てられています。また天守台の石垣に使用されている石材に見られる矢穴とほぼ同じ大きさで大体4~5寸近くある矢穴が岩盤でも見られます。ここから浅野氏の時代の瓦が検出されますので築城期に近

い一時期、石を割るのと同じ時期に穴を掘って瓦を埋めたと思えます。

☆本丸は築城してすぐに壊したり、浅野氏の時期、或いは加藤光泰から浅野父子に替わる時、または築城している途中に壊したり整地などをしているわけなのか。

§ 前回の検討委員会で大きい朱が出たということ報告し、これが建物の部材ではないかとの指摘を受けました。漆器の場合2～3重の上塗りを丁寧に行うが極めて薄いもので何回も塗布されたものではないため、建物の部材に漆を塗布したものの木質部が腐って漆のみが残ったという様に考えられます。現場の担当として考えると、ある時期に本丸に建物があってその部材や瓦が廃棄された時期があるのではないかとと思えます。

☆織豊政権10年間で造ったり壊したりというような事が行われたのなら、自然に倒壊した訳でなく極めて故意的であると考えなくてはならない。

§ 正確な時期は分からないが、少なくとも江戸中期ではないと考えています。

☆江戸前期だと思う。少なくとも1600年前徳川氏が対豊臣として平岩氏を置いた時期の前後だと考えていた。浅野氏が自ら出て行く時に廃棄したのか、平岩氏が壊したのか分からないが、もう少し存在したのだろうと思っていたが、この資料から考えると浅野氏自身が数年間に繰り返した可能性があるといえる。築城する際にこのような行為をしたとすれば、極めて政治的意図があったとしか考えられない。そういう意味合いの事を考えていっているのか。

§ いつかと特定しているわけではなく築城期に極めて近い時期、おそくとも元和という意味で申しました。

☆築城期の瓦という表現があったが、築城期の瓦と元和年間の瓦の違いは分かるのか。

§ 元和の瓦を特定することは無理ですが、築城期のもので寛文年間のものならその違いは分かります。

☆それは金箔が施されているか否かという点ではなく、その違いがわかるのか。

§ 胎土が違います。

☆寛文年間のものまで時代が下がると違いが分かるが、それ以前のものとは築城期の瓦との区別はできないか。

§ 浅野氏の時代の瓦と金箔や朱が施されている瓦とでは胎土が似ているので築城期のもので分析しています。その後平岩氏が改修した場合にはどのような瓦を使用したかまでは分かりません。

☆浅野・加藤という豊臣サイド大名が使用した瓦は1600年以降の平岩氏が入って来るまで継続しないという事か。

§ 極めて近い時期に廃棄したもので、平岩氏の時期であってもよいと考えています。何かの建物を壊して穴を掘って瓦を埋め込んでいるということが現在分かっている事実です。

☆10年足らずで壊したということによいか。どの時期か分からないが本丸という非常に重要な部分が織豊期若しくは平岩城代期の比較的早い時期に壊されたという解釈なのか。

§ そうです。金箔瓦の層より下方で検出する瓦は築城期の浅野氏の時代と同じものです。その上に瓦があるかという万遍なく検出されるわけではなく瓦が検出される層は岩盤の直上です。そこから何層か瓦を含まない層が重なっており、金箔瓦については3層に集中、その他の層では点在しています。

☆集中して検出される浅野氏の時代の瓦というのはその瓦の種類等により一棟の建物か数棟なのか特定できないか。

§ 分かりません。但しこの部分で検出される瓦は相対的に大きいものです。丸瓦でも円弧の部分が5寸以上のものも含まれております。

☆含まれているというのは小さいものもあるということか。

§ 破片で検出される瓦も多数ありますので大きさを推定できないものもあります。そういう意味では全部該当するとはいえませんが、丸瓦で見ると大きいものが検出されています。

☆この瓦を分析して一棟或いは数棟の建物の瓦なのかということ調べて貰いたい。本丸のものと思うが何棟壊したのか。10年程で壊してしまったのだからこの時期に火災に遭ったことはないか。

§ 遭っていません。赤くなっている瓦は岩盤の上に廃棄されていたため雨水の浸透により酸化したものです。

☆やはり意識的に壊していると考えられる、是非調べて貰いたい。瓦の分析で全体像が把握できないか。

- § 瓦の形・大きさ・数等で屋根の数が分かるのか。大屋根には大きさ瓦を使用する等といったことはありますが、むずかしいと思います。
- § 他の屋根などでも櫓などで瓦を何度も使用するという記録があり、現状でも他の修理報告書を見ると櫓の解体修理時に雨の当たる軒先などの瓦は新しいものに替えて、雨が当たらない壁際は江戸初期のものを使用する例は沢山ある。当時建物を廃棄したものが現実にその総量を示すとは言えず、壊れたものだけを廃棄したという考え方もあり、総量が分からないという状況で建物の規模を想定することは出来ないでしょう。
- § 瓦の2～3次使用も考えられ、廃棄された瓦が全てではないということです。
- § この場合どこかの寺院の瓦を2次使用していることもあり得るので特定は難しい。
- ☆建物を推定するのに瓦は非常に重要な要素を占めると思う。2～3次使用されているにしても使用過程を表している訳だからこの要素・特質などを考えながら本丸にあった建物を推定する方法を検討して貰いたい。
- § 現在これらの瓦は全て別に収納しておりますので、出土したものの数量などの把握は出来ます。
- ☆出土している瓦の年代を築城直後としているが、この場合どこまでを指しているのか。
- ☆築城直後とは浅野氏の頃のことであり、浅野氏が築城している最中に壊すはずはないだろう。浅野氏が出て行く時に壊したのではないか。
- ☆浅野氏が違い鷹の羽紋を有する瓦が載っている建物を壊したと考えられるのか。
- ☆浅野氏の時代の瓦が検出されたと判断したのなら、それを今回の資料に書けばよい。
- ☆ここで問題なのは築城直後に穴を掘って埋めたという行為である。いつ行ったのか、浅野・平岩両氏の築城直後に穴を掘って埋める行為自体が理解出来ない。
- § 実際に安山岩を切り出すために穴を掘って、そこに瓦を捨てていることは間違いないと思っています。
- ☆その時期はいつなのか。
- § 岩盤に残されている矢穴の形・大きさなどから判断して極めて1600年代初期に近づくものと考えています。
- ☆織豊政権の大名が城を去るとき壊していったという事は上田・小諸・深志等でも言われているが実証されていない。甲府城で証明できるなら今までに例のない事。慎重に調査すべき内容である。
- § 城が完成した後で大量の石材の搬入が困難なため、穴を掘って本丸の安山岩を切り出し、その石材は比較的近距离の修築等に使用したものではないかと推測している。年代を特定できる資料が現時点ではありません。

銅門石垣調査について

- ☆礎石の黒い部分は柱跡か。柱の直径は。石垣も築城期のものか。
- § 柱の直径は7寸角。新しいもので検出した石段の石材にある矢穴が1寸5部～3寸弱。このことから考えて江戸中期のものと思う。築城期のものとは考えられません。
- ☆石垣とその階段とは同時期のものか。建物も同時期のものではないのか。
- § その可能性は高いと思う。柳沢氏が宝永2年に修築した際に痛んだ石垣を直したと想定すると、その後20数年が経過して甲府勤番支配の時代になり3年目の享保12年に焼失したものであろうと考えています。火災の痕跡が認められたのは初めてです。

稻荷曲輪北腰石垣について

- ☆江戸初期の絵図には既に虎口がない。平入の虎口ではないと思う。左に折れ曲がる虎口であったとすれば直進を封鎖する石垣がなくてはならないが、そのような石垣はないか、櫓台の石垣も部分的に積み直しではないか。
- § 櫓台の階段南に西面した石垣は今回解体した部分とよく似たもので、元々一直線で繋がっていました。同じ時期のものと思う。櫓台の石垣については積み直しという様な痕跡は調査では確認されていません。
- ☆中世の馬出しではないのだから、対になる石垣がなくてはおかしい。
- § 今回解体した石垣の根石の面が逆ではないのかと根石部分を掘り下げたが、1m下っても変わりません。

☆このままでは門は建たない。反対側に石垣はないのか。虎口変更の意味は。甲府城の鬼門だが。

§ 入り口を変える原因は曲輪内の建物の改築と関係があるかもしれない。1つには鬼門だから虎口を塞いだという考えもでき、稲荷曲輪北東下には堀が、その北東には花畑屋敷がある。花畑とは山里や数寄屋などの曲輪名と同じで風流を楽しむ場所であったようです。山里曲輪というのは織豊期によく見られ、今回埋め殺されている石垣が虎口と関係するなら、この花畑屋敷へは最短距離である。ここへは現存の絵図だと直接出入りする通路がない。徳川期になって埋め殺されたものと思われ、又甲府城への出入口は大手・柳・山の手の3つの門であり稲荷曲輪の出入口はどの絵図にも明記されていません。

内松陰門の調査について

☆内松陰門の様子が分かる絵図はあるのか。

§ 坂田家蔵絵図（元文4年）という、享保9年に柳沢移封の際に町年寄として立ち会った絵図があります。

☆復元は可能か。

§ 可能です。元文4年の絵図では享保12年の火災で門が焼失した後の資料であり、梁間・桁行の数値は確認されていない。この絵図と調査によって確認された礎石の元位置などから規模も分かるので復元することが可能であると判断しています。

☆内松陰門は復元計画の対象か。焼失したのは調査によって確認されたのか。

§ 対象です。確認されていません。

☆本当に焼けたのか。

§ 確認されていないが、裏見寒話という資料にはあります。資料の図にある石列は礎石が転用されているので新しいものです。この部分はすぐ西に階段があり地山が傾斜している。土留めの意味合いもあって後世埋設されたものであると思います。

☆内松陰門周辺のエレベーション図を掲載して欲しかった。

今後の整備事業について

§ 当初の計画では基本的に柳沢期を基準にして復元しているので、今回検出された旧石垣（虎口付近）はまた埋め殺さなくてはならない。検出された旧石垣の状態も良好で縄張り変更の痕跡を見る貴重な例で、このまま埋め殺してしまうのは惜しいと考える。現場サイドでは根石の高さまで土を盛って芝生を植え説明看板等を設けて検出された旧石垣は塞がないというのは如何かと考えています。

☆石垣についての問題もあるが、大きい意味で縄張りの変更がある良い例だと思う。看板を設け石垣の変更、縄張りの変更についての意図を変遷特徴とともに問い復元すべきである。古い例を見せることは大切なこと。これは銅門でも同様であろう。銅門も3度ほどの変遷があるはずだが甲府城の石垣の編年を考えて看板で説明しないとどういう意図で石垣復元を行ったかが分からなくなってしまう。甲府城は石垣が重要だからこれらを説明しながら復元して欲しい。石垣が厳密に変遷しているのではないか。石垣の編年を追うことは可能であろう。

§ 石材の加工方法などから石垣の編年は可能で加工の仕方・材料の選び方などで分類していけばと思います。

☆それが承認されてデータとしてしっかりすればそういったことも看板に出して貰いたい。

☆今回解体した石垣面と内側から出て来た旧石垣の年代差は殆どないのであろう。埋め殺された石垣の使用年代は10年程度、それに対して解体した石垣面は300~400年を経過したものである。後の時代に埋め殺したのなら話は別だが解体前のように埋め殺して中に旧石垣が埋まっているとの説明があれば良いのではないか。学問は発展するという点から考えれば、何年か経過した後、今回の石垣についての評価も変わる可能性もあるのではないだろうか。その時になって今回解体した石垣は既に存在していないというのはあまり宜しくない。

☆稲荷曲輪腰石垣を崩して現在の通路ができたのはいつか。

§ 正確には分からないが大正時代中期に謝恩碑を建造する際のこのようです。

- ☆2度目を見ていると粗雑であるようだ。大正時代に通路をつけたという事も説明に明記すればよい。
- ☆通路に面する石垣は新しいものであったが修復は新しい形とするのか。柳沢期に戻すなら通路を塞ぐのが道理。
§ 出来ないです。基本計画の中で現在の公園の通路は現況で確保するという事になっているので、これを塞いでしまうことは大変な問題になります。
- ☆柳沢期に戻すと塞ぐのが筋であるが、塞がないとするならばその時代の石垣は既に壊されている訳だから推定して石垣を積まなくてはならない。現実的に難しい問題を孕んでいる。
- § 検出された西南石垣を生かし説明看板を設け、虎口の変遷・縄張りの変遷を説明するような形が採れればと思っております。
- ☆復元整備は舞鶴城公園整備予定図のようになるのか。
§ 大体においてその通りです。
- ☆柳沢期に見られる形は既に存在していない。この形でやるのがよいのではないか。
§ 旧石垣と大正時代の石垣のどちらを生かすか決めて柳沢期の絵図も掲げて説明したらどうでしょう。柳沢期の石垣を生かすのは基本方針ですが、この石垣面を生かすなら通路は塞がなくてはなりません。
- § 今回検出された旧石垣が、江戸期―大正期―現在のような状態になったという説明ができる形で旧石垣は生かしたほうがよいのではないのでしょうか。
- ☆石垣を少し積んだほうがよいと思う。根石だけを残すのはおかしい。説明板を設けるにしても以前の状況がどうなっていたかをわかるようにすべきである。
§ 1 m程の段差をつけて行います。
- ☆石垣を積み、本来通路は石垣によって遮断されたのだということが分かる形にはならないか。
§ 例えば石段の蹴上がりに関しても絵図の寸法をそのまま踏襲すると1段の段差が35cmなどという場所も出て来てしまい、全面的に絵図通りに復元するというのは難しいように思います。ある程度絵図をアレンジせざるを得ないという一面もあります。
- ☆先程の旧石垣が検出されたところでも、どのような施設があって本来どうなっていないかという説明がないと旧石垣を見せたときの意味がなくなってしまう。
§ それは土木の担当者に看板の関係も含めてご相談させていただきます。今回解体した石垣の根石部分から若干石垣を立ち上げた状態で旧石垣を生かすという方向でご承認頂きたいと思います。同じ稲荷曲輪北腰石垣から検出した旧合坂については検出された状況のまま手を加えない状態で置く方法と元来使用していたものなので復元か埋め殺しという3つの方法が考えられるが、虎口方も見せるという事であれば旧合坂の方も生かす考え方が妥当かと思えます。資料に近い状態は危険なのでもう少し安定させた状態にして、特に階段を復元したり再び埋め殺してしまったりせずに整備していく方針です。
- ☆歴史的事実を説明することは後でもできるが見せることが大切であると考えられる。

その他全体を通して

- ☆平成12年までに当初の予定を達成するのは難しいのではないか。天守、特に本丸櫓についての論議もある。見方によっては天守にも見える建物を復元しても良いとの計画なのだから。本丸櫓は何年に着手する予定か。
§ 最終年度になるものと思えます。
- ☆櫓は絵図にも描かれているし復元は可能なのだろうが、平成12年までに本丸櫓を造るのならば謝恩碑の問題を県民まで含めて論議する必要があるのではないか。前回は論議されたがこれを曖昧にするのはよくない。
- ☆記念碑などについて計画設定が載っているが謝恩碑は残すということで位置付けられていた。
§ 謝恩碑は移転対象になっていません。
- ☆櫓門などを造るのなら移転を考えたほうがよいのではないか。造らないなら移転の必要はないかも知れない。
§ Aゾーンに7つの方針があります。これに基づいて記念碑について既に撤去されたものもあり、謝恩碑は武徳

殿と同じ位置付けで、設置より半世紀が過ぎ、その存在自体が歴史的意味があるとの認識になっている。

☆舞鶴陸橋の東県庁に面した石垣が大分孕んでいる。修復する計画はあるのか。修復する方向で考えて貰いたい。

§ 構造上の問題で舞鶴陸橋があつた石垣にぶつかった状態で建っています。陸橋との関係、使用問題と修復必要箇所が陸橋から見える部分だけではないのかも知れませんが何とも言えません。

☆調査検討委員会は整備委員会の専門部会的立場を引きずっている。整備方針を決める際には調査検討委員会を中心となって専門的な検討を行うべきであり、来年度以降論議検討をして土台を作り公聴会を開くことなども設定して天守一件も含めて話し合っていくべきである。

平成 8 年度第 3 回調査検討委員会会議録

I 日 時 1997年 3 月12日 13:00～16:30

II 場 所 恩賜林記念館 2 階会議室

III 会議内容

鉄門下階段石垣解体部分瓦層検出について

☆出土した金箔瓦は「五三の桐」か「五七の桐」か。

§ いづれかは現時点では確認できません。

☆ 6 枚一組の飾り瓦になるのではとの説明だが、出土した部分はどこか。

§ 最左部分上側の瓦であると思われますが、桐の花が 6 つ存在するので気になっています。

☆ まだ瓦層が続いているというので、これからの成果が期待できる。

内松陰門跡周辺石垣検出について

☆ 資料に掲載されている旧石垣をみると「布積み崩し」が見られるが、これだけでは何とも言えない。それより一つの構造体としてどのような形をとっていたのかということは資料の上の図でのみしか分からない訳か。

§ そうです。銅門を下った所の南北石垣を解体したときも説明した部分と同様の小ぶりの石垣を要した旧石垣が検出されている。この部分は階段にめり込んだ形で検出した。旧石垣の内②の石垣も同様の形で検出されている。このことから当初一間程狭い虎口が存在したのではないかと考えられる。今回は従来通り解体したラインで石積みが進んでいたが、大分縄張り変更が行われているということが分かりました。鉄門下階段西石垣解体前の石垣は奇麗な切石で角が取っており、江戸後期のものかそれ以降のものであると思われます。

☆ 解体後旧石垣が検出され、金箔瓦がその裏込めに使用されたという事はその旧石垣よりも更に古い段階のものであるということになるのか。金箔瓦と今回検出された石垣は同時期のものではないということでしょうか。

§ 金箔瓦のほうが古い時代のものであると判断できます。

☆ このような事例は他の所でも確認されているとのことだが内松陰門周辺で検出された旧石垣が造られたのも鉄門下階段西石垣解体部分から検出された旧石垣と同様甲府城築城から 2 段階目の作業であったと言えよう。

§ 内松陰門周辺で検出した旧石垣は全部で 3 段階に分れており時代的な差があります。

☆ 金箔瓦を裏込めに使用するという事になると、一旦埋めたものを掘り返すということは考えられない。何処かに積んであったものを使用したということになれば、金箔瓦が使用されていた時期と裏込めとして再利用された時期とがあまり離れていたとはいえない。金箔瓦を使用していた時期に、これを石垣の裏込めとして利用するとも考えられないか。

§ そんなに離れていないと思われます。「諸国古城当城之図」に記されている甲府城の図では、帯曲輪の石垣は直線状に描かれていてクランク状の石垣は見られない。今回検出された旧石垣はクランク状の縄張りを示しているので浅野紀伊守時代のものであったと仮定すると、今回検出された旧石垣は浅野氏転封後の築造であり、

この際に大量の瓦を裏込めとして利用したものと考えられると思います。

広島市立中央図書館所蔵浅野文庫文献史料調査結果について

§ 浅野高勝は子孫が広島藩家老職を世襲し、史料は現在広島中央図書館に「東城浅野家文書」として保管されている。これら800点は寄託文書であるため東城浅野家の許可を必要とする。甲府城築城に参与している可能性が高く有効な調査が望まれる。

今後の整備事業について

- ◆ 1. 内松陰・稻荷門石垣改修工事は発注済、順次銅・鉄門と最終年度迄に造る予定。
 - 2. 櫓は文献調査が終わり次第大きさ等を検討委員会に諮りたい。
 - 3. 漆喰形式の塀280m、木柵850mを施工予定。
 - 4. トイレを銅門の下に3月入札し次年度に工事予定、青少年科学センターの下にも平成10年度計画予定。
 - 5. 道路北側旧国鉄用地を公園用地として買収してあるが、甲府市の駐輪場の調整により工事は平成10年予定。
- ☆平成12年には本格的な報告書が作成されていて国指定時に提出できるよう11年には着手しておいたらどうかと思う。

☆国の史跡を考えても遊戯施設の最低条件を押さえておかなければならない。対策を如何考えているのか。

§ 石垣工法については基本的に理解して貰いたい。文化財にそぐわないものは建てないよう指導を仰ぎます。

☆今ある建物のしかるべき所への撤去、管理構想についても考えるべきだ。

☆謝恩碑は残すと計画にあるが移すべきである。国の調査官も毎年入るべきだ。

☆売店については又造る計画はあるのか。造らなくてもよいのでは。

§ 造る計画はある。他の碑については引取手に委ねる。

平成8年度石垣検討会会議録

I 日 時 1997年3月12日午前10:00～12:00

II 場 所 恩賜林記念館2階会議室

III 会議内容

時代別の石垣石材比較について

1. 甲府城に現存する多期（文禄～江戸期）に亘る石垣の過去7年間の石材調査結果により、石材の加工方法や使用方法等に差が認められる。
2. 外見ばかりでなく石材の控えや重量の法量を四次元グラフ化しその傾向を数値から求めた。

広島県山県郡東部地域の石垣について

1. 中世遺跡保存整備事業として事業対象史跡の発掘調査と環境整備を県で町とで役割を分担。
2. 石垣の調査方法は立面形状の把握、構築法（裏構造）の把握、石材と採石地の把握、分布調査による同一の立面形状の石垣を7遺跡で確認。資料調査では7石垣の築造時期が16世紀後半と推定、石垣職人の存在を推定。
3. 石垣の復元方法は全面的な積み直しをせず、目地詰めやかませ石程度の工事。

北部九州の近世初期城郭石垣概要

1. 城郭石垣に関する構築技法の追及と類型化、石垣使用法の追及と築城主体の意図の考察、石工集団の動向と

存在形態、名護屋城石垣使用石材の規格化の問題と曲輪造成工法の特徴、構成石材の加工度の偏差と巨石の使用・石垣構築箇所の偏在性。

2. 中世城郭から近世城郭への変化のなかでの石垣の使用形態例として、原城では本丸のみが総石垣。同じく梶谷城では在地系技法の石垣と近畿系技法の石垣が混在。清水山城の二の丸、三の丸南東端では近畿系石積み技法の駆使。角牟礼城大手方向外縁部では近畿系技法の多用。本丸石垣使用箇所の偏在性。

史跡富田城跡歴史概要

整備事業に伴う調査での検出石垣整備は、平成5～8年にかけて国庫補助事業史跡等活用特別事業で実施。中世山城における通路跡やそれにかかる曲輪等の整備を目的としている。

石垣の検討

- ・高取山城等300～1000mという山城は総石垣だが豊臣系であるとする広告塔に使う傾向が考えられ、平行して存在する中世では中央の勢力に関係しているのかを課題としている。この技術が穴太の技術に呑み込まれて行く過程があるのでは。甘子氏の場合、地山の削り出しが中心となっている。
- ・16世紀前半では曲輪を造成し直に建物を載せた。土圧を止めるための性格を有するのではないかと、限界のある建物の大きさに従いこれを目的とした機能を有している。
- ・石垣は重量建物の有無より、隅角をもつものを石垣というのではないかと思う。石積は広く捉えて隅石がない場合をいい又石畳は角部が無く曲っている。
- ・石垣は裏栗層と反りをもつ。勾配のためには裏栗層が必要となる。直角に積み上げる場合、反りと裏栗石が無いものを石積みと呼んだらいいのではないかと。これからすると吉川元春館、万徳院は石組みでいいと思う。
- ・大内氏を見ると花崗岩という石の摂理を利用した大きな石を多く使用している。広島周辺をよく調べるべきだ。
- ・石工集団の原点、造る機能性を探るべきである。石材グラフはとてもよい方法である。
- ・江戸幕府では組織された人々が新田開発や棚田などに携わっていた。素人でなく在地技術者である。その面では全国にも居たはず。その集団を全国的に調査しなければならない。
- ・本格的な石積みを専門としていた職人集団か、それとも臨時に石工として採用されたものか。石垣技術をもった集団が出た近世と中世とに差はないのか。
- ・武田氏の場合も石積みがなされていたのではないかと。在地の積み方を知りたい。見せる石垣ではないと思うが。
- ・鋳物師と石工の例として信玄堤に巨石を扱った16石工事があった。大阪の陣の時はカナホリ職人2人が指導しようとした記録もある。
- ・天正19年に巖島の石垣工事を作る際に「石つきの者共」が堀川普請や石垣普請に携わったと書かれた文書があるが、石つきの者共は短縮される言葉にはならなかったのか。固定しない中世的な職業集団とまでもいかなかったのか。
- ・～衆から発展していったと思う。石つきは農業的な意味でなく、つき石のつきと思う。



第4図 第1回調査検討委員会・石垣検討会

第3章 発掘調査

第1節 稲荷櫓台

稲荷曲輪は、天守台・本丸の東側を囲む天守曲輪の北から東下を巡るL字状の曲輪で、その規模は北側で東西50m・南北90m、東側で東西70m・南北65mを測る。天守曲輪東面石垣付近は、地山層を削平しているが、他所は全て埋め立てによって形成されている。文禄2（1592）年、朝鮮出兵中の加藤光泰から国家老加藤平兵衛らに送られた書状に「其国ふしん土手ひかしの丸石かき出来候や」という一節が見られるが、ここに記された「ひかし（東）の丸」は、その後の甲府城の縄張りから推察して、稲荷曲輪に比定されている。恐らく文禄2年には、天守台・本丸などの城郭中心部が既に完成の域に達し、稲荷曲輪などの普請に取り掛かったのであろう。

『楽只堂年録』所収の甲府城絵図によれば、稲荷曲輪内には、その北側区域に番所や焰硝蔵、天守曲輪東面石垣寄りには稲荷曲輪の名称の由来ともなった庄城稲荷、東北隅には二重櫓（稲荷櫓）、櫓台南から同曲輪の東を取り巻く腰石垣の内側には土蔵3棟、鍛冶曲輪との境には稲荷曲輪門が築かれていたことが確認できる。

庄城稲荷、及び稲荷曲輪門の周辺の調査に関しては、平成2（1990）年度・同6（1994）年度に完了している。本年度は、まず稲荷櫓台の天端における遺構確認調査、同所西面石垣解体調査が実施された。

稲荷櫓台は稲荷曲輪の東北隅に設けられた高石垣の区画である。絵図によると、櫓台上には梁東西5間・桁南北6間からなる2層の稲荷櫓があったとされている。これについては、明治初年に愛宕山方面から撮影された写真の中に、稲荷櫓が確認できることから知られている。

発掘調査では櫓台上の西端及び南端から、扁平な自然石を用いた礎石列が検出され、西端の礎石列と並行して栗石群が検出された。前者は、稲荷櫓の外観を構成するものであったと考えられ、後者については礎石が撤去されているが、元来は西端の礎石列と一対の基礎構造で、櫓の母屋を構成したものと考えられている。北端及び東端から礎石列などの明確な遺構が確認できなかった点については、公園内への擬木設置に際する攪乱などが考えられるが、検出された前述の礎石列から、絵図で記された稲荷櫓の規模はほぼ正確であることが推測できる。

櫓台に関しては、その後に実施された西面石垣の解体調査によって、解体対象の石垣の裏から崩落痕を有する旧石垣が検出されたことによって、規模拡張に通じる改修を行っていたことが明らかになった。

検出された旧石垣は、築城期の様相を示していた。旧石垣を埋め殺すように新規の石垣が積み直されている様子から、この改修が緊急を要するものであったことが判る。また、解体された石垣の根石下からは築城期の瓦が大量に検出されており、その中には浅野氏の家紋（違ひ鷹の羽）を象った鬼瓦がみられたことから、旧石垣の崩落時に櫓台上に存在した稲荷櫓は、築城期のものと推定することができる。更に、解体された西面石垣の姿は、宝永2（1705）年の絵図に確認できるため、この石垣の改修時期は、宝永2年以前であることが考えられる。つまり、旧石垣崩落時の稲荷櫓は、屋根瓦など櫓の一部を損傷したと推定されるが、その後も存続したため、櫓に最も影響が少ない方法で、崩落石垣の前面に、新規の石垣を構築したとみることができよう。

櫓跡から検出された遺物としては、密教法具である輪宝を挙げることができる。これは、前述した櫓の母屋と考えられる範囲の内側から検出されたもので、検出数は全5点であった。1点のみ原位置を保っていなかったものの、他の4点は4隅を構成している。このうち西北隅の1点は、礎石直下で検出されており、他の3隅については礎石直下ではなかったが、同様の層から検出された。

輪宝は元来、古代インドの武器で、これを投擲して敵を摧破するものである。梵語でチャクラ（斫訖羅）と言い、転輪聖王の七宝の一つとされている。仏教では、輪宝の武器としての鋭さが仏の説法に例えられ、仏の説法を転法輪と呼び慣らすなど、従来より仏教との関わりは強い。特に密教では、これを法具として扱い、様々な儀式の際に用いた。日本には平安時代初期に、渡唐した最澄や空海などによってもたらされており、やがて密教においても地鎮めの儀式が行われるようになると、輪宝はその儀軌に適った法具として用いられるようになった。

輪宝は、轂・輻・輞・鋒の4部に区分され、鋒の形態によって3種類に分類することができる。轂は内輪部で

あり、輻は轂から放射状にのびる8本の肘木、輞は輻を受ける外輪部、鋒は外輪の周縁にある8点の突起部分を指している。そして鋒先が、独鈷杵の先端を突き出したものを八鋒輪宝、羯磨のように三鈷形をしたものを三鈷輪宝、鋒が輞に連なって八角形になっているものを八角輪宝と呼んでいる。多くは銅製もしくは青銅製で、鑄造製のものと鍛造製のものがみられる。密教における地鎮めには、概とよばれる棒状の法具を輪宝の中心に接続して埋納するため、これに用いられる輪宝は、中心に孔が開いているのが特徴である。

密教において単に地鎮めといっても、その修法の違いから地鎮・鎮壇、結界、土公供、鎮宅・安鎮の4つに大別される。このうち地鎮・鎮壇と結界は、本来の密教の修法で、両者は大概、同時に行われる。

地鎮・鎮壇は本来、厳密に区別されており、『覚禪鈔』によれば、地鎮は「不築壇以前修之」もので、鎮壇は「鎮壇築壇、建堂之後修之」ものであった。但し、これらは時代とともに簡略化の傾向をたどり、平安～鎌倉時代には「両度依有煩、地鎮鎮壇一度修之」となっていた（地鎮鎮壇合行の法）。輪宝は元来、鎮壇に際して用いられる法具であるが、地鎮・鎮壇が合理化されていく中で、これが厳密に守られていたとは言い難い。

結界は、これらの儀式に伴って行われるもので、一般的には七里四方・上下八方の範囲の悪鬼神を追い払い、一切護法善鬼神を迎え入れて、内なる世界を浄化するための手法である。

使用する「輪宝」の種類と埋設方法は、宗派によって決定的な違いを見せる。即ち、真言宗が三鈷輪宝を概の上に傘のように載せるのに対して、天台宗は八鋒輪宝に概を突き立てると言った具合である。

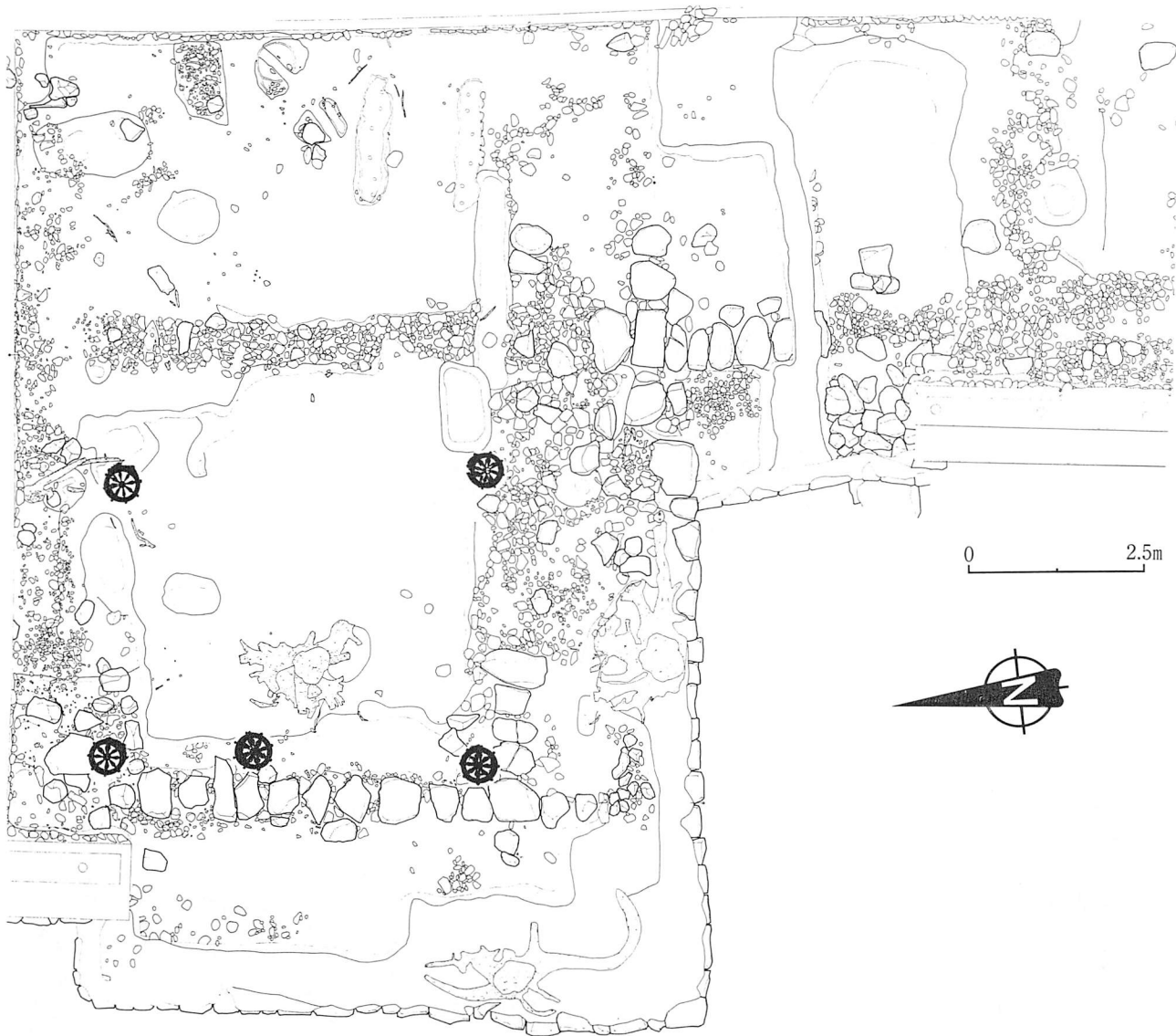
稲荷曲輪檜台で検出された輪宝は、5点とも同一形態で、八鋒輪宝と呼ばれるものであった。厚さ0.1cm程度の薄い銅板を規格的に切断したものと考えられ、全長は約17.5cmで、中心には0.4cm程度の孔が開いていた。表裏同形状で、片面の中心部に3cm四方の金箔が施されている以外に目立った装飾はない。

4隅の「輪宝」は、いずれも金箔が確認できる面を天上に向けて埋設されており、また5点とも微量ながら初殻が付着していた。興味深い点として、強弱の差はあるものの、5点とも中心の孔に衝撃痕が確認できることである。これらは金箔が確認できる面から突かれたもので、南東隅の1点と原位置を保っていなかった「輪宝」は強い衝撃痕が認められる。特に後者については強く刺し抜かれていたことが特徴に挙げられる。輪宝に残る衝撃痕の状況から、原位置を保っていなかった1点についても、やはり金箔が確認できる面は天上に向けられていたと考えることが可能である。天上を向いた金箔には、何らかの呪術的な意図が感じられるが、5点各々の輪宝の役割としては、恐らく4隅の輪宝が四方を結界するために用いられ、残りの1点は元来、4隅の「輪宝」を対角線上に結んだ交点に埋設されていたが、後世の攪乱によって移動してしまったものと考えられる。

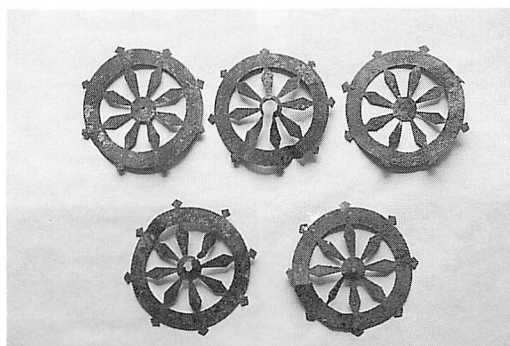
これらの輪宝について、先ず礎石下の層から検出されたこと、輪宝のもつ密教法具としての性格、及び轂の中心に孔が開いていることから、稲荷檜建造に先行して、地鎮めのために埋設されたことは明らかである。また、検出された輪宝の形態や、天上から地下へ向かって与えられた輪宝の衝撃痕から推測すると、その担い手は天台宗である可能性が指摘される。しかしながら、密教における地鎮めの儀式において本来、輪宝に付随するはずの概が1点も検出されていないことから考えると、現時点で結論を急ぐことはできない。

また、これらの「輪宝」が埋設された時期については当初、17世紀中期に使用された「輪宝」に銅鍛造製の薄手作りがみられることから、少なくともその時期まで遡ることができると考えられた。しかしながら、前述の檜台西面石垣の解体調査で得られた成果から、檜台上に構築されていた稲荷檜が築城期のものである可能性が高いことから、検出された輪宝も築城期のもので、その使用時期は16世紀末であると考えられるのである。

その他の遺構・遺物としては、檜台東端中程の地点から確認された土坑4基と、それに伴う埋甕と骨片の検出が挙げられる。これらは全て江戸時代のもと考えられるが、埋甕は、3号土坑から検出されたもので口縁の直径は約50cm、輪宝より1層上から検出されており、甕の深さは約70cmであった。甕中の土からは漆喰が検出されている。骨片は、4号土坑から検出されたもので直径1.5cm・長さ約15cm程度の円筒状の部分骨で、動物のもと考えられる。また、1点のみであるが、文字が刻まれた瓦（文字については不明）片が検出されている。



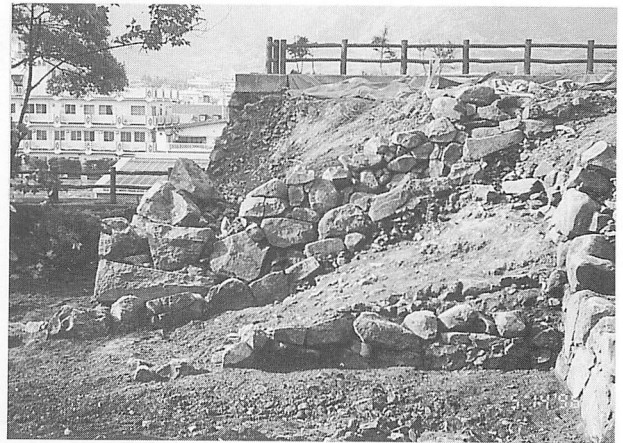
第5図 稲荷槽台平面図



第6図 調査風景・輪宝出土写真



- A. 稲荷櫓台調査前全景
- B. 礎石列検出状況
- C. 西面石垣根石調査風景
- D. 南面石垣解体状況
- E. 石段解体状況



第7図 稲荷櫓台調査写真



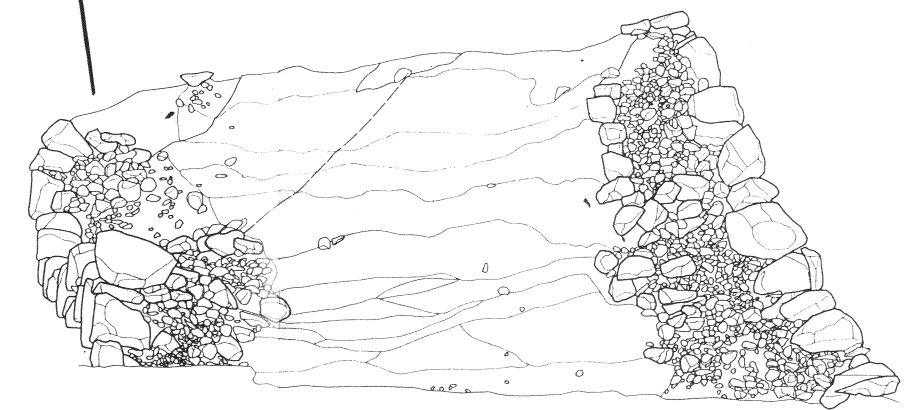
第8図 稻荷櫓台 土層立面・平面図



A. 櫓台東面石垣断面・裏盛土



第9図 B. 櫓台西面石垣断面・裏土盛



第2節 稲荷曲輪腰石垣

本節で取り上げる稲荷曲輪北腰石垣・及び東腰石垣とは、櫓台南から稲荷曲輪の東端を囲む石垣である。元来、これらは櫓台と直結していたが、現在は東に屈曲する部分で崩されて、北東方面からの進入路が築かれている。これは大正9（1920）年の謝恩碑建設に際して、石材搬入のために設けられたものであるため、この進入路両脇は間知積みによる石垣が構築されており、築城期の穴太積み石垣と明確に区別できる様相を示している。

北腰石垣については、既に平成6（1994）年度の調査によって天端の遺構確認が実施されており、曲輪側に堀のものとは考えられない平石による石列が確認された。これは、櫓台南に直結している腰石垣にも同様の石列が確認できることから、稲荷櫓台から北腰石垣・東腰石垣を取り囲むように築かれた多聞櫓の存在が指摘された。

しかしながら、『楽只堂年録』所収の絵図によると、北腰石垣の曲輪側には西より順に、石段1箇所、合坂1箇所、南に屈曲してから（いわゆる東腰石垣では）合坂1箇所が確認できるが、多聞櫓は描かれていない。これは他の絵図に関しても同様で、今後とも検討を要するものであると言える。

本年度は、平成6年度に引き続く北腰石垣、及び東腰石垣の天端における遺構確認調査と、同所曲輪側の石垣解体に伴う調査を主眼に置いたものであった。

このうち、天端における遺構確認については、前述同様に多聞櫓の可能性が指摘できる。また、石垣解体に伴う調査では、同所の縄張り変更を彷彿とさせる旧石垣の検出が挙げられる。旧石垣は、石段西面石垣の延長線上、及び前述の礎石列下から確認された。両所とも平成6年度に確認されていたものである。

石段の西面石垣の延長線上に検出された石列は、築城期の様相を示す旧来の西面石垣であった。解体された西面石垣は、進入路で阻まれた櫓台南の腰石垣の西面石垣とは延長線上にあるため、これが『楽只堂年録』などの江戸時代の絵図にみられる石垣面であることは間違いない。しかしながら、この場所に北腰石垣の西端が位置すると言うことは、この場所の縄張り変更されていることを彷彿とさせるものである。可能性としては、築城当初にはこの場所に、虎口が存在していたということを指摘できる。

平成6年度の調査で、多聞櫓の可能性を示唆した礎石列の下から検出された石垣も、やはり築城期の様相を示す旧来の石垣であるが、これは埋め殺された合坂の袖石垣にあたるものであった。

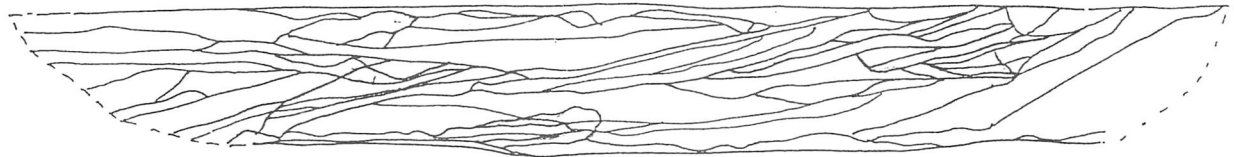
また北腰石垣西寄りの石段付近では、その解体に際しては東面石垣が検出されている。これも前述と同様に、築城期の様相を示しているものであった。

『楽只堂年録』所収の絵図を始め、その他の絵図においても、今回の発掘調査を裏付けるような資料は確認できない。解体された石垣も、その裏から検出された旧石垣も、技術的・時代的には殆ど差がみられないことから、これらが築城から数年のうちに行われた縄張り変更によるものであると考えるのが妥当であろう。恐らく、築城から間もなく行われた縄張り変更で、虎口を閉鎖され、虎口直近の合坂を埋設する過程で、この場所に石段が設けられたものと考えられる。

このような縄張り変更の担い手としては、甲府城完成期の城主であった浅野長政・幸長や、関ヶ原以後に入城した平岩親吉が考えられる。前者であれば、文禄2年当時に普請されていた「ひかし（東）の丸」が稲荷曲輪に比定されていることから、加藤光泰病没後に入城した浅野氏はその直後に行ったと考えられるし、また関ヶ原以後の緊張関係の中で行ったものとも考えられる。後者であれば、『甲斐国志』巻之百（人物部第九）の平岩主計頭親吉の条に記された「上州ヲ転ジテ甲州ニ新タニ府之城（甲府城）ヲ築キテ」が信憑性を帯びることになる。

次に、東腰石垣についてである。この曲輪側にある合坂については、興味深い遺構が確認されている。

この合坂は、南北両側にのぼる階段を有するが、この幅が極端に異なる点に注目できる。北に上る南面石段は幅約2mと狭く、南に上る北面石段は幅約4.2mと広い。南北石段の上り口の高さは異なり、南面石段の方が高く設計されているため、平場の部分に1段分の段差が生じている。また、低い方の平場には、礎石らしい平石が配列されており、ここに何らかの建造物があったことを示唆している。なお北面石段から上がった天端には、櫓台南や北腰石垣でみられたような、多聞櫓を示唆する礎石列が確認されている。

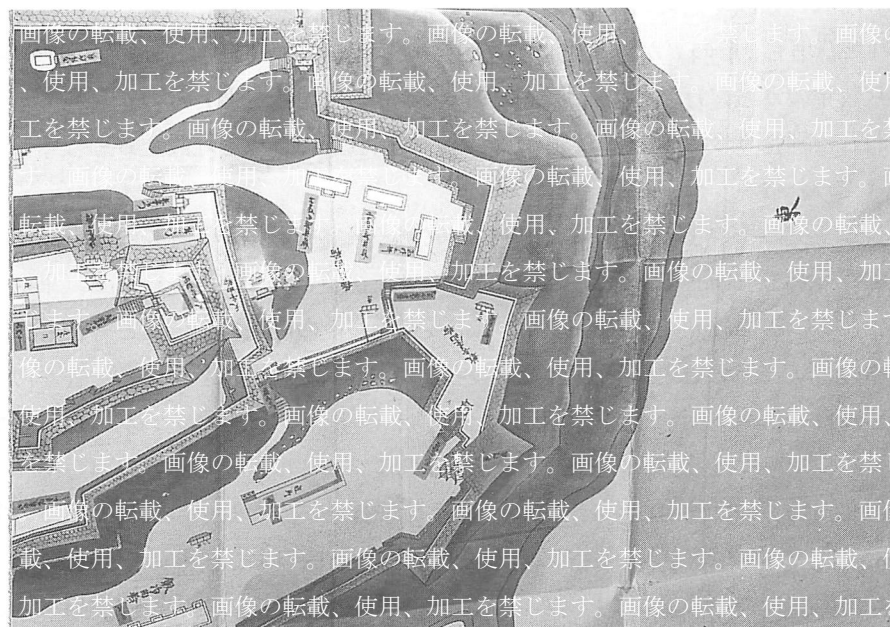


第10図 稲荷曲輪腰石垣 8～13番石垣裏盛土土層図

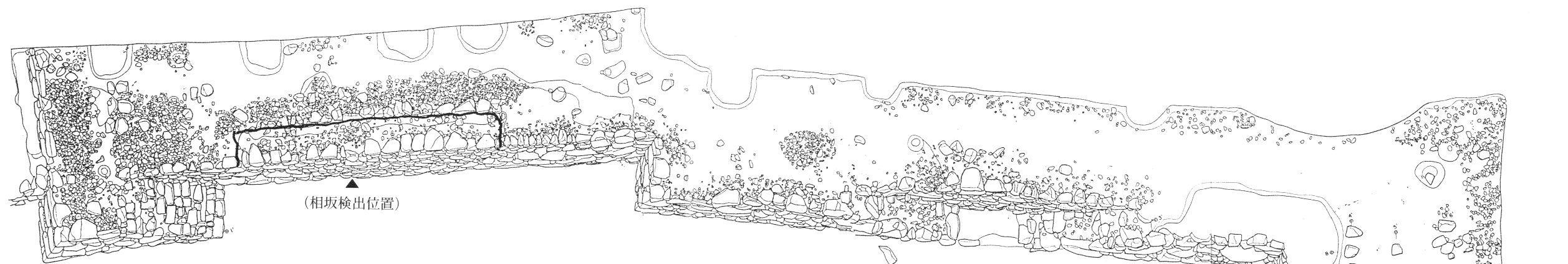
0 10m



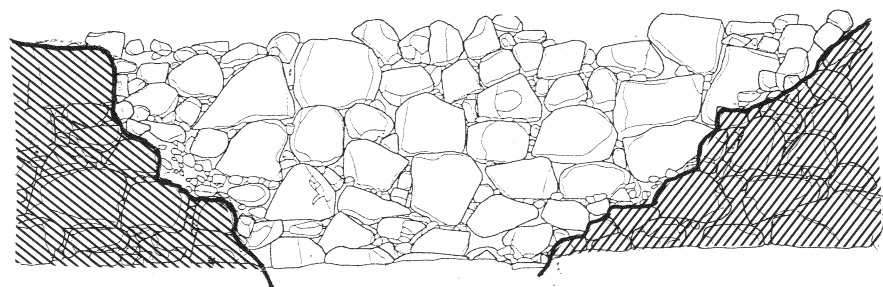
第11図 同上盛土状況



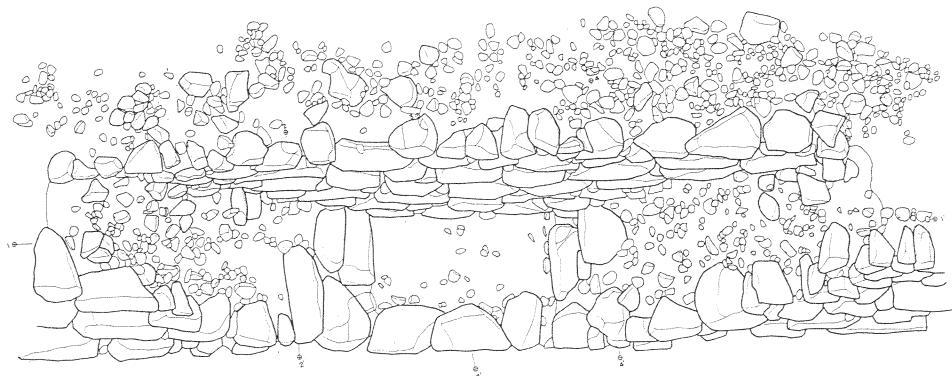
第12図 甲府城内屋作図部分（露木家蔵）



第13図 稻荷腰石垣全体平面図



第14図 検出相坂立面図



第15図 同上平面図



第16図 腰石垣上礎石検出状況



第3節 本丸

本丸は、甲府城の中心部に位置する東西60m・南北50mの不正方形の区画で、この東端には天守台が築かれている。『樂只堂年録』所収の絵図によれば、南に鉄門（くろがねもん）、西に銅門（あかがねもん）、中央には本丸御殿、東北隅には二重櫓（本丸櫓）、東南区域には毘沙門堂が配されていた。

現在は、銅門跡南区域に謝恩碑が建ち、本丸櫓台はすべて取り潰されているために往時の様相とは異なる点が多いが、平成5年度（1993）から断続的に調査を実施しており、前述の毘沙門堂跡を始めとして、庭園状遺構、水抜き暗渠、地中石垣などを検出している。

本年度は、本丸中央部、銅門南（謝恩碑北）の区域において、遺構確認を中心とした調査を行った。

本丸中央部では、城郭の遺構ではないが、調査区域のほぼ中心部で、直径約10mの円形枠のコンクリート製の基礎が検出されたことが挙げられる。この円の中心部には、直径約40cmの円筒状コンクリートが縦横5本ずつ並べて埋設されていた。これは戦前に、舞鶴城公園（甲府城跡）の名物であった「鶴の噴水」の遺構であると考えられる。恐らく、中心部の円筒状のコンクリートは、鶴の台座の基礎であり、周囲を取り巻くコンクリートの縁は、噴水の施設の基礎であろう。

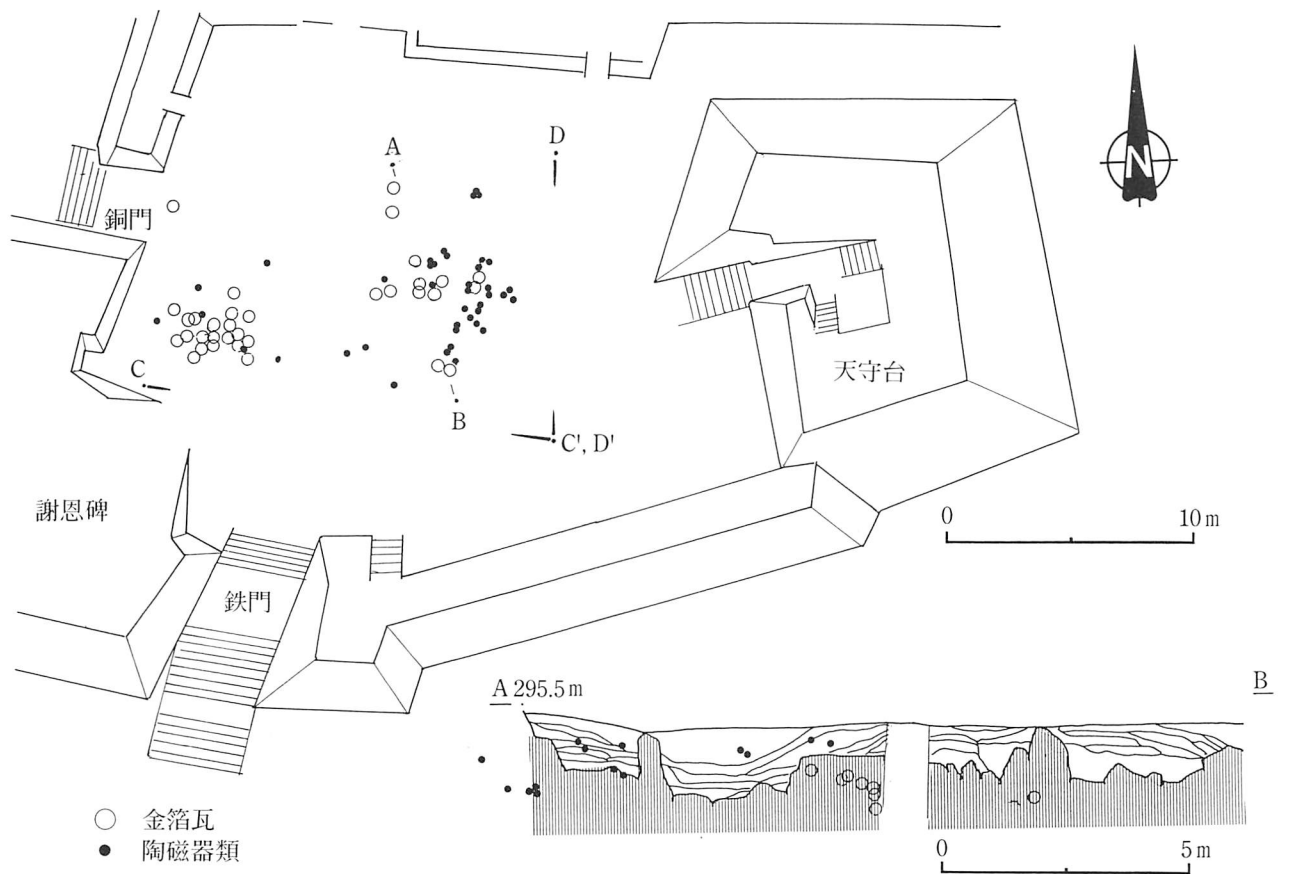
本丸中央部においては、前述の噴水遺構を始め、公園整備以降の水道管などの地下埋設物、松木の植樹による攪乱が著しく、推定遺構面での成果は皆無であった。しかしながらその後、現地表面にわずかに現れていた石が築城期に刻まれたと考えられる矢穴（約10cm×約4cm）をもつ11t級の岩であったことが判明し、その直下から鳥伏間と考えられる連珠紋を象った金箔瓦片1点が検出された。このことから、改めて試掘溝を数条にわたって設定し、現地表面から岩盤直上までの間に築城期の瓦包含層が2層存在することを確認した。

本丸中央部の版築状況は、西北から東南を結ぶ地山の稜線を頂点として、東北・西南方向に緩傾斜をなしている。この中であって築城期の瓦を包含する2層のうちの1層は、現地表面から約1mの深さにあった。共通しているのは赤茶色系粘質土の直上にある青味がかかった灰色系粘質土である。この層からは大量の築城期の瓦が検出され、中には長さ7cm・幅5cm弱の円筒状の朱塗瓦1点を始め、飾り瓦や鬼瓦の一部と考えられる金箔瓦数点と、木材の表面に塗布してあったと考えられる朱が確認された。また、もう1層は、現地表面から約2～3mの深さにあり、岩盤直上の層である。この層からも大量の築城期の瓦が検出された。

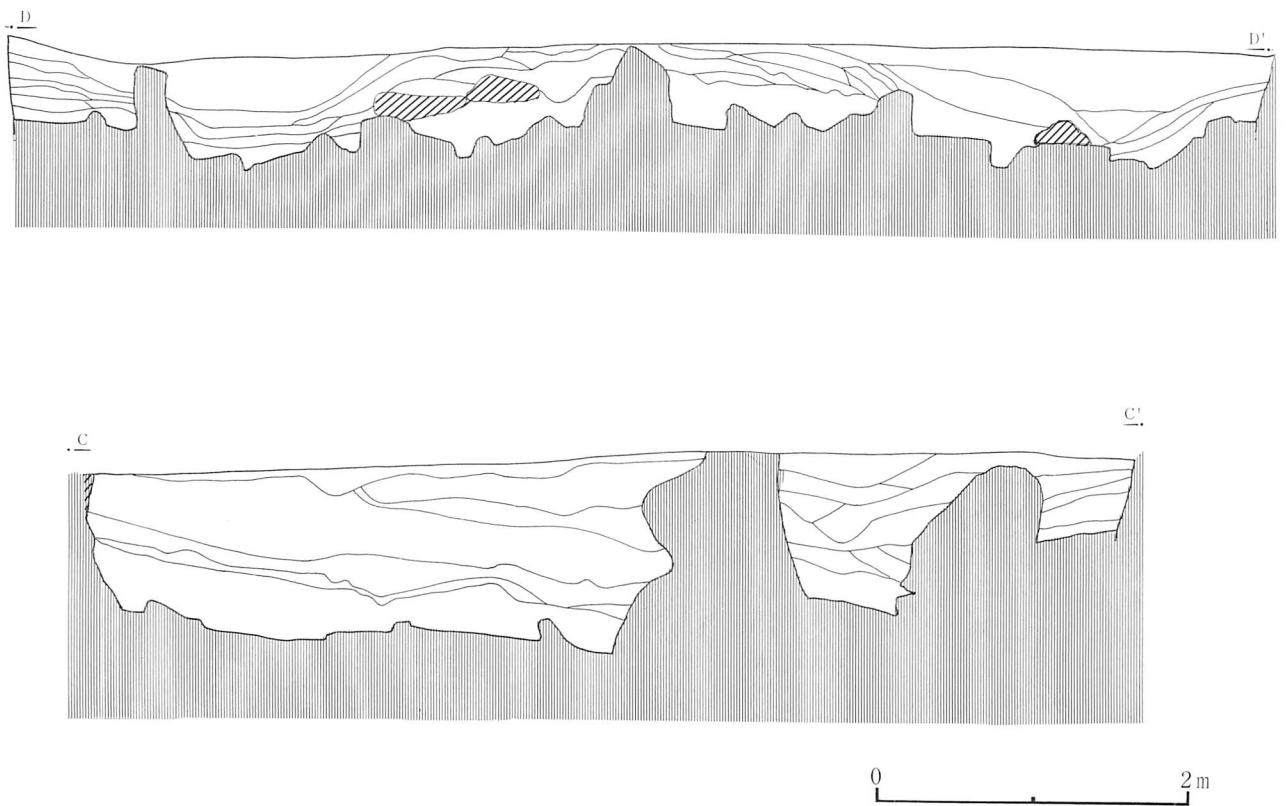
岩盤及び直近の岩には、多数の矢穴が確認できるが、これらはその大きさから築城期のものと判断される。このことは、甲府城の地山である一条小山が、築城の際の石切場に利用されていたことの例証となるが、ここに築城期の瓦が深く埋められていたことを考えると、築城後のある時期に大量の石材が再び必要になり、本丸下の岩盤まで大穴を掘って、石材を取り出したという仮説が成り立つ。その際に、金箔瓦を含む築城期の瓦が一斉に廃棄された結果が、岩盤直上の瓦層になるのではなかろうか。

岩盤などに刻まれた矢穴には一見して、時期的・技術的な差異は認められない。恐らく、大量の石材が必要になったのは築城から数年後のことと考えられ、築城期の瓦が大量に廃棄されているところから推察すると、前節の稲荷曲輪北腰石垣で述べた縄張り変更の時期が有力であると言えよう。

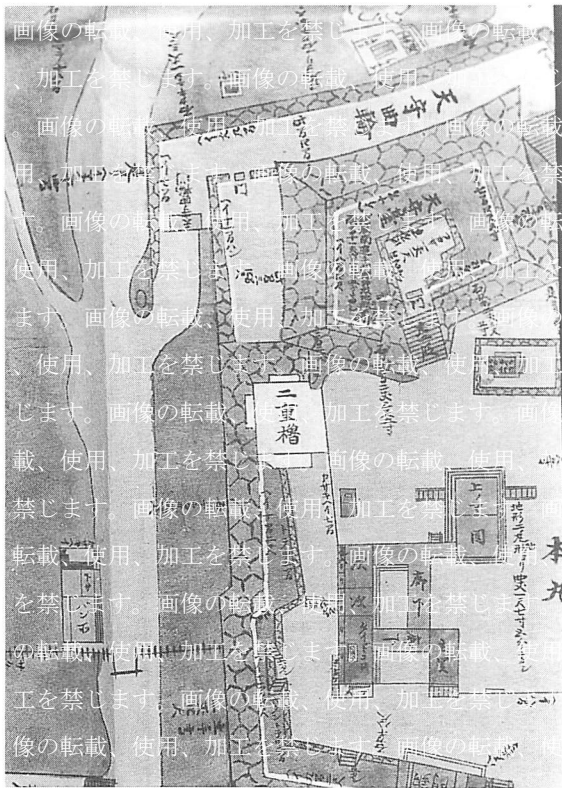
前述した、岩盤直上にみられる築城期の瓦の廃棄の性格については、今後の慎重な検討が必要であると考えられるが、16世紀末に築かれた豊臣政権下の甲府城と、それ以降の甲府城の縄張りを同一視することは尚早であると考えられる。



第17図 金箔瓦、陶磁器、出土遺物分布図及び断面図



第18図 東西 (C-C') 南北 (D'-D) 土層図



楽只堂年録絵図部分（柳沢文庫蔵）



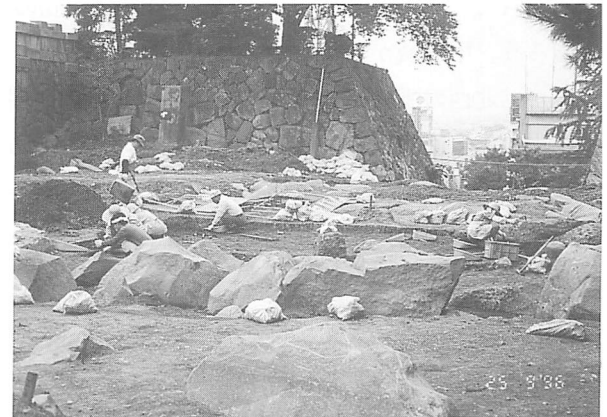
本丸地山岩盤検出状況



同上矢穴石



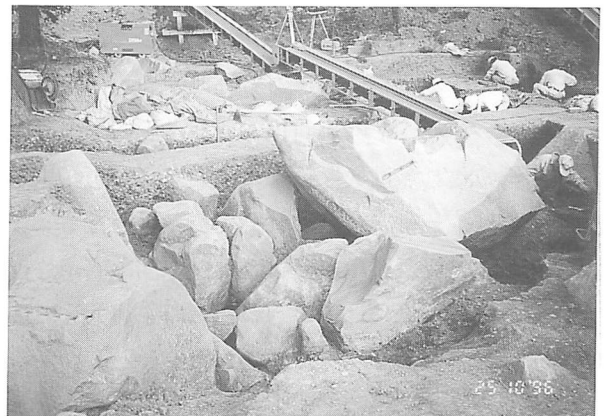
噴水跡検出状況



作業風景



土層写真



同上

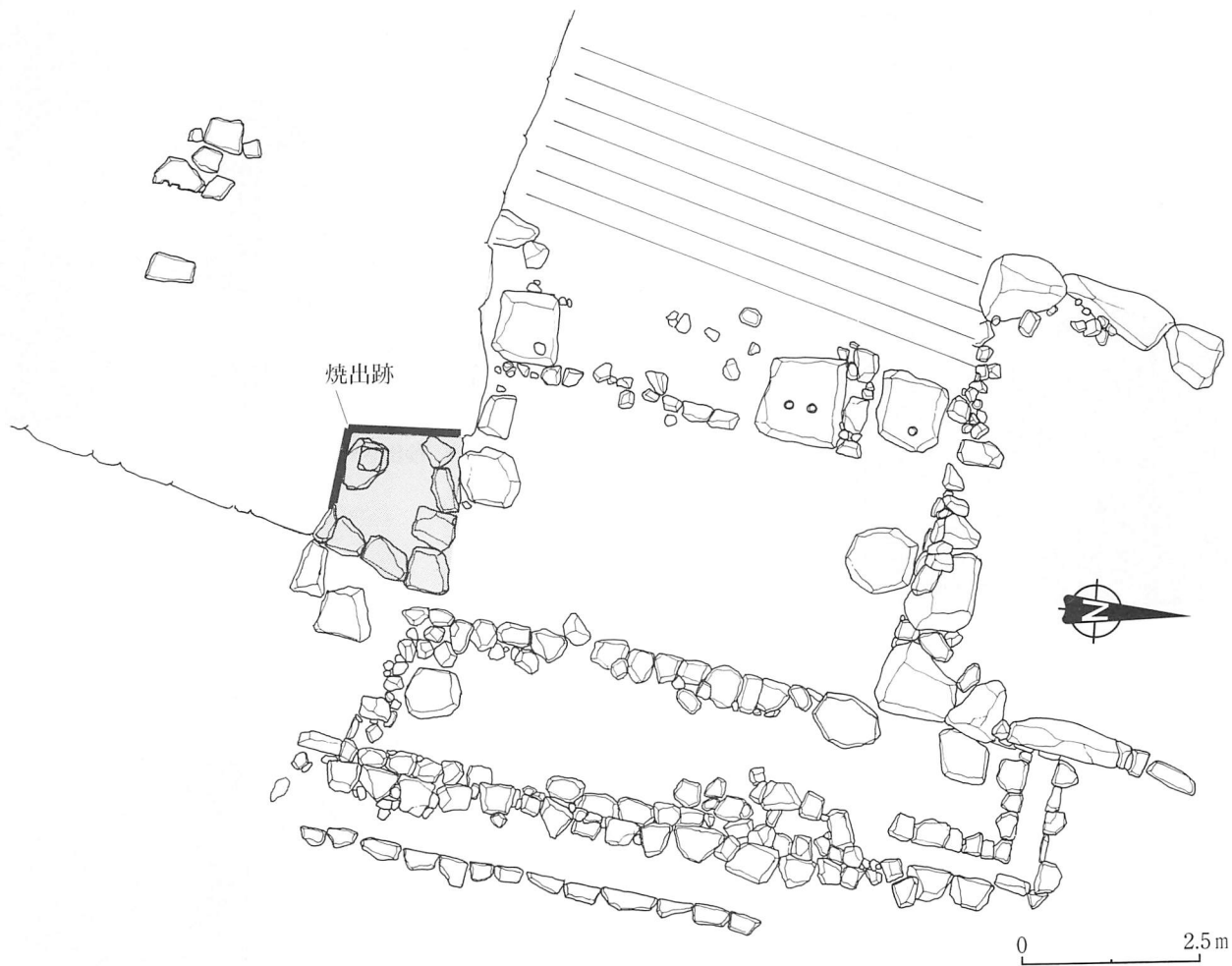
第4節 銅門周辺

銅門南腰石垣の解体に先立って南側周辺を中心に調査を昨年度末から行った。門跡の調査は3年以前に終了しているが、調査対象地の南には大正11年(1922)に完成した謝恩碑の説明板が設置されていたため、事前の調査ができなかった。また、この周囲は石碑の建設工事によって著しく攪乱されていることが予想された。しかし、表土を剥ぎ始めると江戸時代中期以前と想定される大きな瓦溜めが、またその北隣りには石材を掘り出した大きな穴も確認された。調査面積は約300㎡あるが、北側から着手して、説明板及び基礎石の撤去後に南側半分を行った。調査区の西側は腰石垣の根石、南側は謝恩碑の台座石垣の根石までとし、東側は昨年度までに終了している範囲まで、北側は門の南までとした。

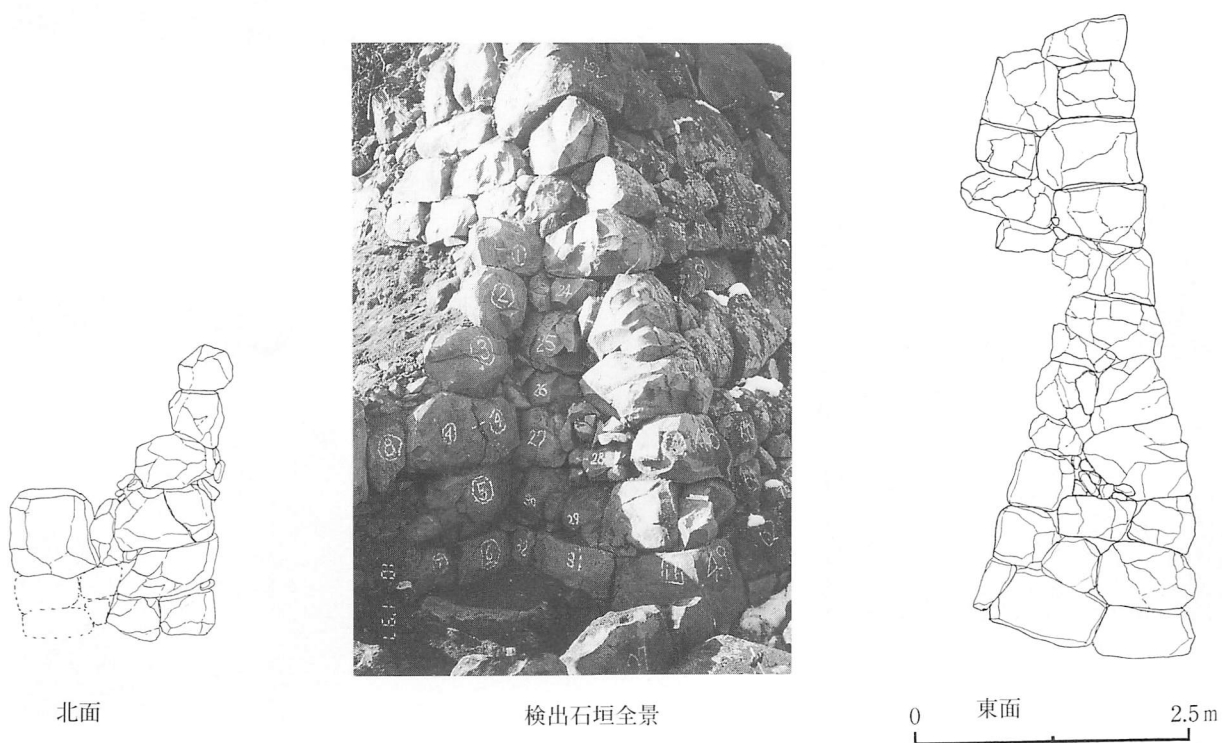
検出された遺構は瓦溜めが3カ所、石切り穴が2カ所である。銅門の南側に隣接する調査区では、表土を除去すると全面に安山岩の岩脈が姿を表し、所々に矢を打って石を切り出した跡が見られた。この穴からは大型鯨瓦破片(第32図No1)と板碑の頭部(第34図No31)が出土した。その南側では表土が0.5~1mと厚くなり、その下層から瓦溜めが検出された。調査区の南は謝恩碑の基礎石垣の根石によって攪乱を受けていたが、江戸中期以前の瓦が集中する瓦溜めを確認した。その中から金箔鯨瓦の胴部破片(第32図No2)が出土した。これらの瓦溜めを掘り上げると基盤の安山岩の岩脈が表れた。安山岩を切り出した穴に残されていた矢穴は大小あり、築城時代に、また江戸中期以後に、近代にも石を切り出したことが考えられる。特に近代と推定できる小さな矢穴は大正9年(1920)から着工した謝恩碑の工事に伴って切り出された跡と考えられる。謝恩碑の基礎石垣は安山岩で積まれ、本体は塩山御影石が使用されているので、周囲の石垣の石材調達がこの場所で行われたのであろう。

銅門南石垣の東側隅部分は、石材が小型で後世に積み直されたと考えられた。そのため、石垣の解体を先行させると、裏側から別の石垣が現れた。この石垣は火災を受けて石材が著しく風化しており、根石の横には礎石が確認された。この礎石の上には焼土が10~5cmの厚さで堆積しており、火災によって銅門が焼失した時のものである。甲府城が火災に遭った記録は、享保12年にある。12月9日の夕刻発生した山の手の大久保内蔵介宅の火災が、北西の季節風で南東方向に拡大し城内の屋形曲輪の御殿や本丸御殿までも焼き尽くした。その時に銅門も焼失し、今回検出した焼土は、その時のものである。解体した石垣は焼土が礎石の上に残されていたことから、焼失直後に熱によって痛んだ石垣の前面に新しく積まれたものと考えられるべきである。93年度の調査報告書に記した銅門の規模は桁行9m、梁間5.4mであったが、この礎石の検出によって南側に1間延びて桁行10、8m梁間5.4mとなる。

銅門から南に延びる謝恩碑建設時に積まれた石垣裏から、築城期の腰石垣が現れる予想で解体を進めた。大きな石材を使用した築城期の腰石垣は根石のみが残されていたが、その背後に数十cmの小石を積んだ石垣が現れた。この石垣は、93年度に本丸で確認された地中石垣とは異なり、面を明確に意識した積み方であり、95年度に天守曲輪で検出した腰石垣の下部に構築され、あるいは裏栗石と裏盛土の境界に設置されていた裏石垣と酷似するものである。水道の地下タンク建設のために一部が崩落していた。この部分から裏側を観察すると、全体が栗石であり、この栗石は西にある外側の石垣のそれでもあった。これらは天守曲輪で検出した裏石垣と同様な形態である。しかし、この裏石垣の前面は腰石垣の裏栗層であり、根石も同一レベルに据えられている。この部分が天守曲輪のそれとは異なるため、過去の調査結果を再検討する必要が生じた。いずれにしても築城時に本丸の西側腰石垣は、二重に構築されていたこととなる。また、石垣上段の調査では、絵図に描かれている石段が3段検出された。裏側に石垣が検出された範囲の石垣修復工事は、前面に根石のみが残されている築城期の腰石垣を復元し、更に石垣上には検出された石段を復元することとした。銅門の南石垣については、享保12年以前の姿である南側に石段がある状況に復元することとした。

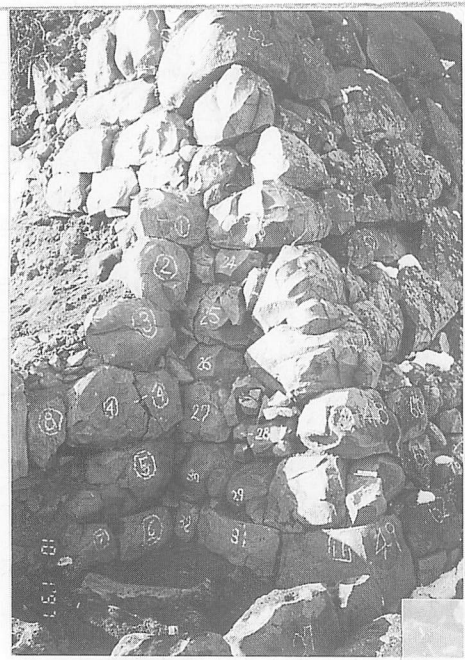


第20図 銅門平面図



検出石垣全景

第21図 銅門南検出石垣



検出された銅門南石垣



検出された銅門礎石



検出された銅門石段



検出された石段（部分）



調査風景

第22図 銅門南石垣

第4章 石材調査

1 調査の経緯

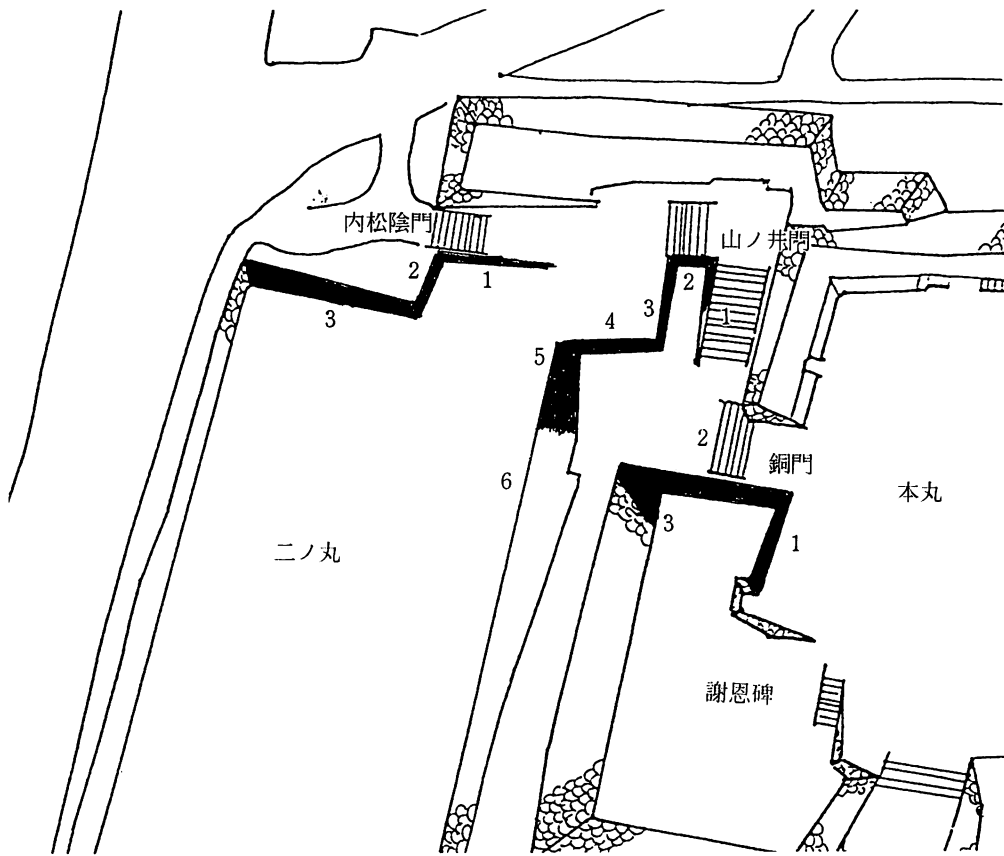
石材の法量調査は、堀石垣の解体が行われた91年度（2年目）から実施してきている。解体対象石垣全ての築石法量を記録することは不可能である。築石が裏側の控え部分で幾つかに割れているため、また一部は既にはがれ落ちている場合が多い。さらには解体途中で破損する石も少なくない。解体途中で原位置を保っている状態での計測も不可能ではないが、危険を伴うこともある。このような状況にあるため、原則として解体対象の石材は、解体後に計測可能なものについてのみとした。なお、解体範囲の境界にあり残される石材については、境界線を清掃した後に控えを計測してきている。

今年度に行われた石垣修復工事に伴う石材調査箇所を曲輪ごとに記すと次の通である。本丸銅門南側石垣北面・西面・東面、二の丸（山ノ井曲輪）の北側にある内松陰門南石垣北・西面、稲荷櫓台石垣西・南面、稲荷曲輪腰石垣全面である。これらの範囲での石材調査結果は、面毎に一覧表としてまとめ、各石垣面の石材の控えの大小についてはその分布図を掲載している。銅門北面石垣については、中段部分の孕みがあり、石材も火災で風化が進んでいるため、根石を残しての解体となった。西面は北面との隅角部分が解体されるため、その範囲で若干の解体が行われた。内松陰門の西面石垣は全面が、その西下にある西面・北面石垣については上から3～4mの範囲で解体された。稲荷櫓台石垣については、地上に出ている範囲の全面解体となったが、地下2m以下に入れている根石は残しての解体である。稲荷曲輪腰石垣については、根石の位置を確認して地下1m前後に据えられているため、地上に出ている範囲の解体を基本としたが、No 8 からNo13までは、根石が浅いため、根石を含めた解体となった。

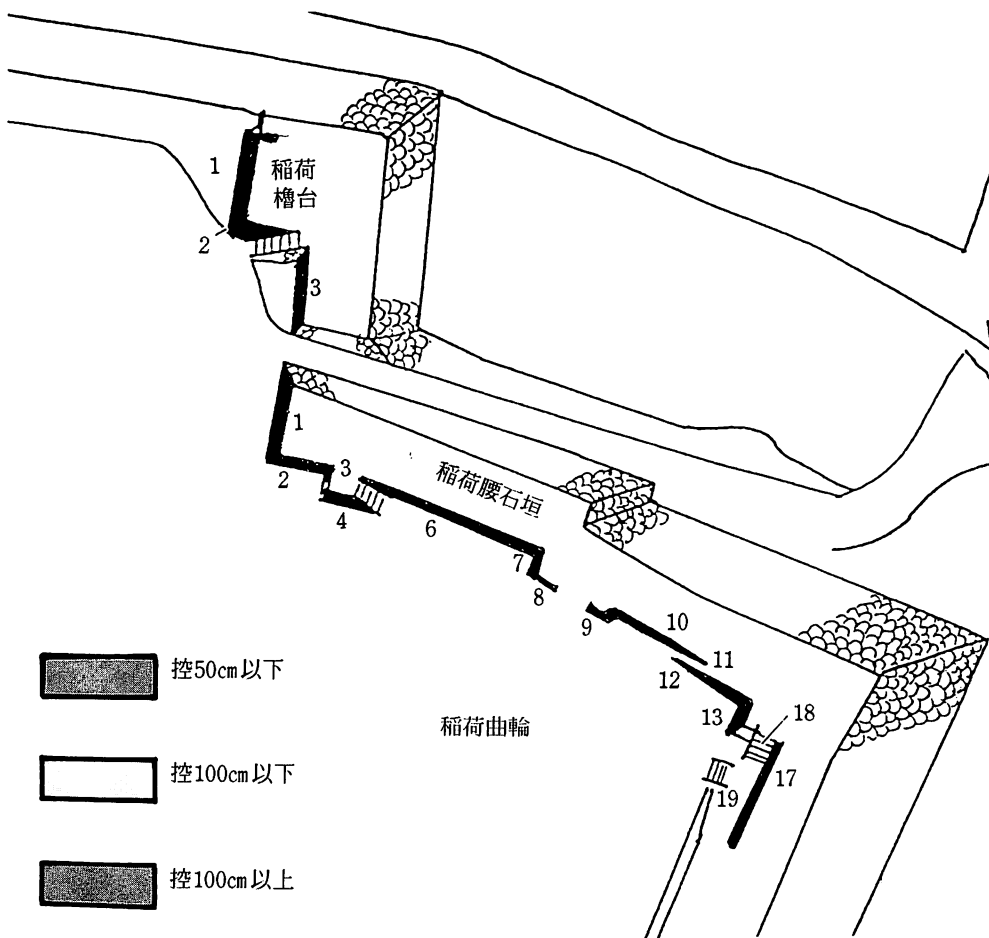
2 今年度の概要

銅門周辺の石垣の石材は、面も比較的大きく控えも全体的に大きい。門下の北面中央には縦1.3m、横2.6m、控え0.6m、重さ4tの石材が積まれていた。このような石材を鏡石と呼んでいるが、全国の城郭で、門周辺に見られる技法である。稲荷櫓台の石垣は、西面で二重になっていた。新しい石垣は、奥から検出された石垣が崩落したためにその前面に新たに積まれたもので、石材の控えは小さく1mを越えるものは少ない。裏から検出された石垣も前面と比較すると大きいものが多く積まれていた。このように新たに積まれた石垣は櫓台1・2番石垣である。3番の石段は近代の所産であり、その下から古い石段が3段確認されている。5番石垣の南側は大正年間に崩されて間知積となっている。稲荷曲輪腰石垣3番と4番石垣の積まれた時期が異なることは、報告書3で指摘しているが、今回の解体調査では石材の使用方法などからの違いを確認することはできなかった。6番石垣の中央部には左右の石材より小さな石が積まれている。この石垣の天端調査でも裏側に石垣が存在することを、報告書4で指摘したが、この部分から相坂が確認され、それを埋め殺した石垣が小さな比較的規格された石材を使用していたことが明らかとなった。7番石垣は小さな出隅部であり、8番石垣は大きな石材を立てた鏡石のような据え方が半数以上である。9番石垣と11番石垣は相坂の石段、10番石垣は相坂の奥壁である。12番石垣も10番と同様の傾向が見られた。

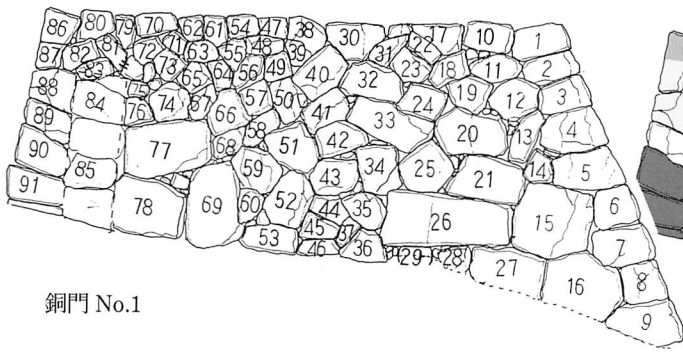
なお、石垣解体工事中に、裏栗石の中から五輪塔・宝篋印塔・石臼などの石造物の検出は稲荷曲輪ではなかった。しかし、銅門周辺からは石臼など多数の石造物が出土したが、本丸以西から出土が多いという昨年度までの調査結果と同様である。詳細は、遺物の章で記すが、築城以前のあった一蓮寺の関連遺物と考えることができよう。



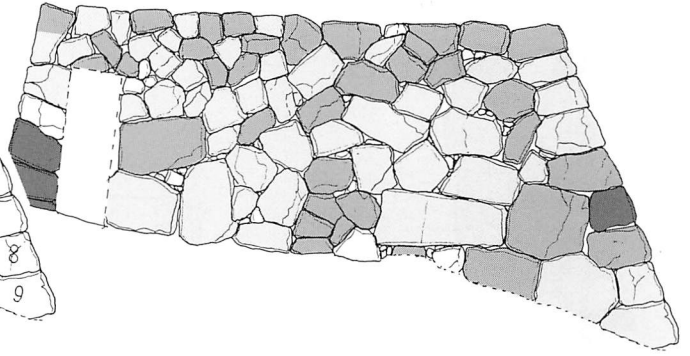
第23図 銅門・山ノ井門石垣番号



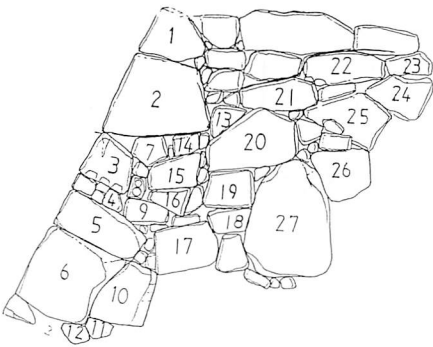
第24図 稻荷曲輪腰石垣番号



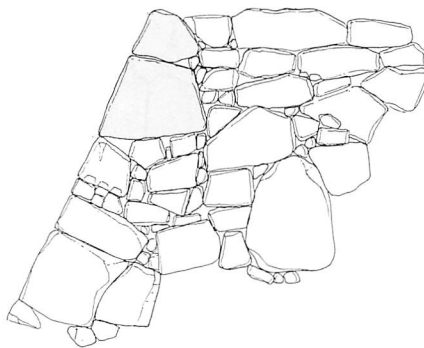
銅門 No.1



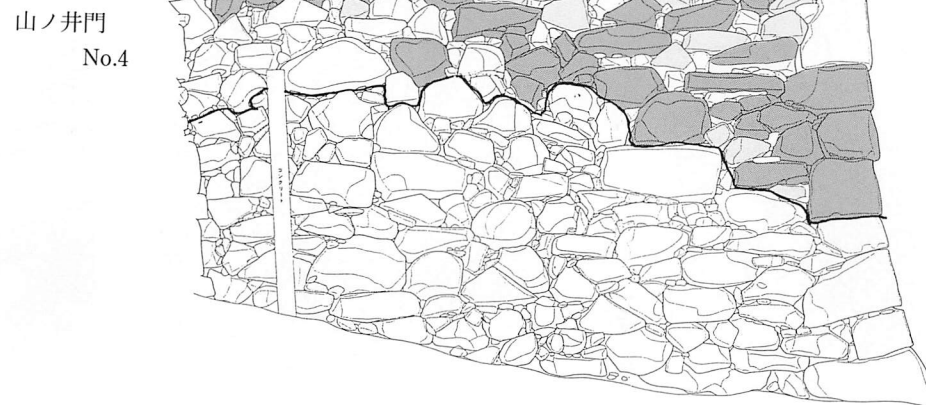
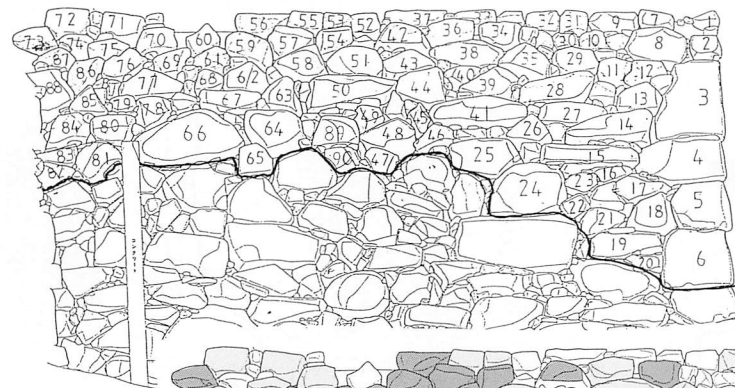
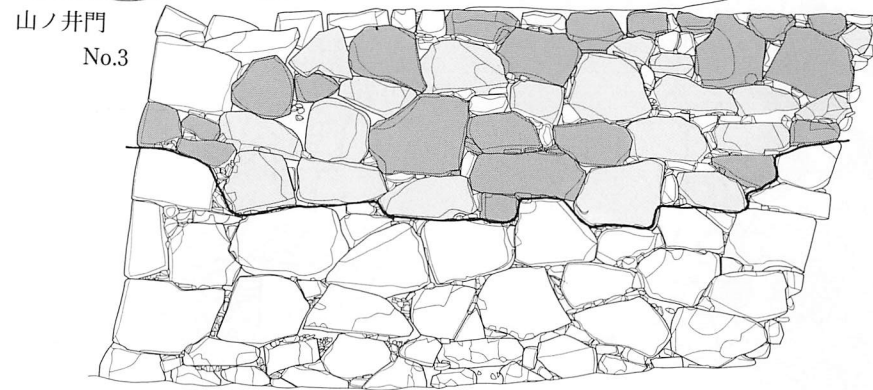
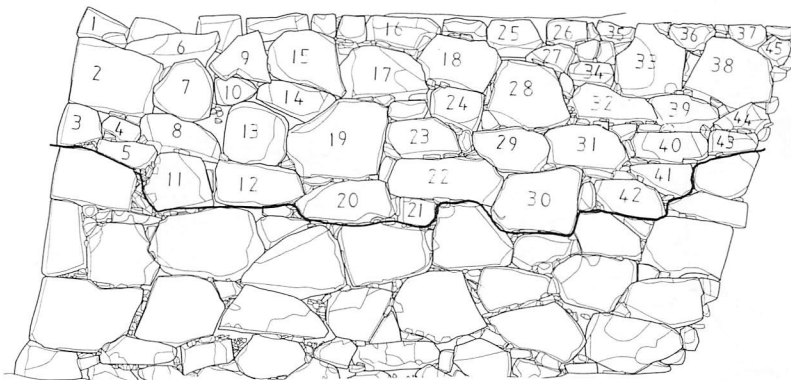
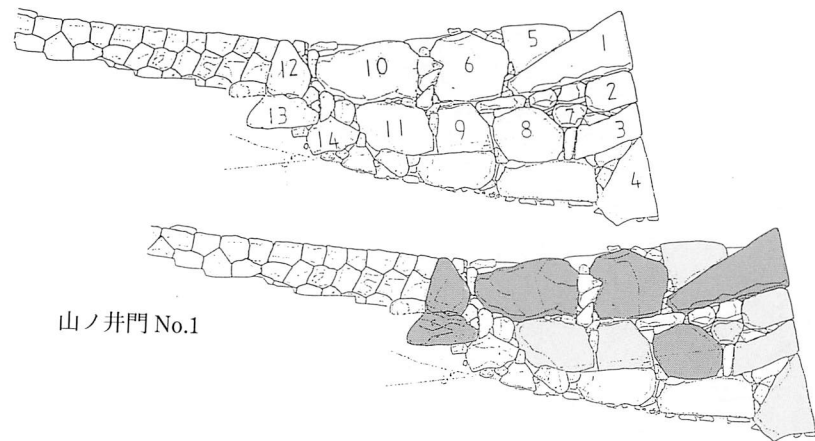
銅門 No.2



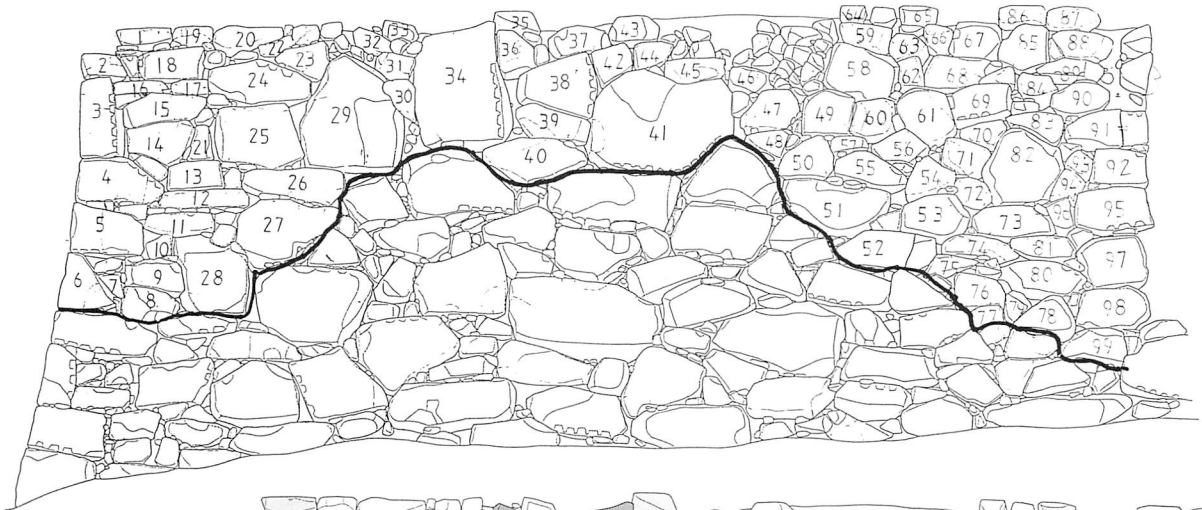
銅門 No.3



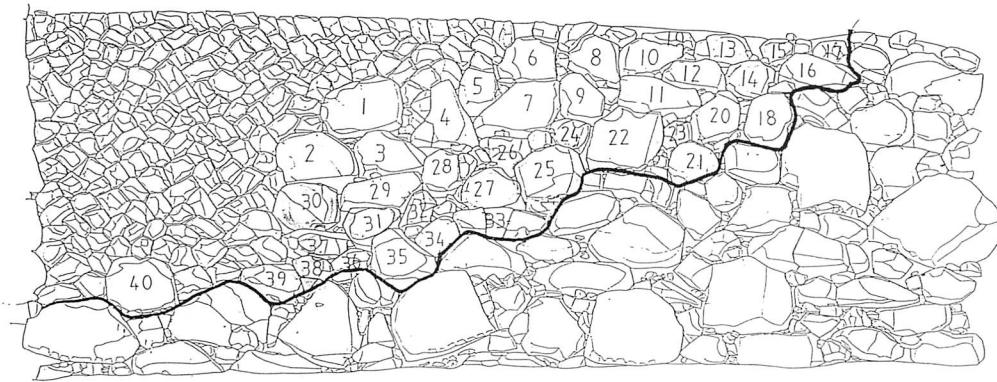
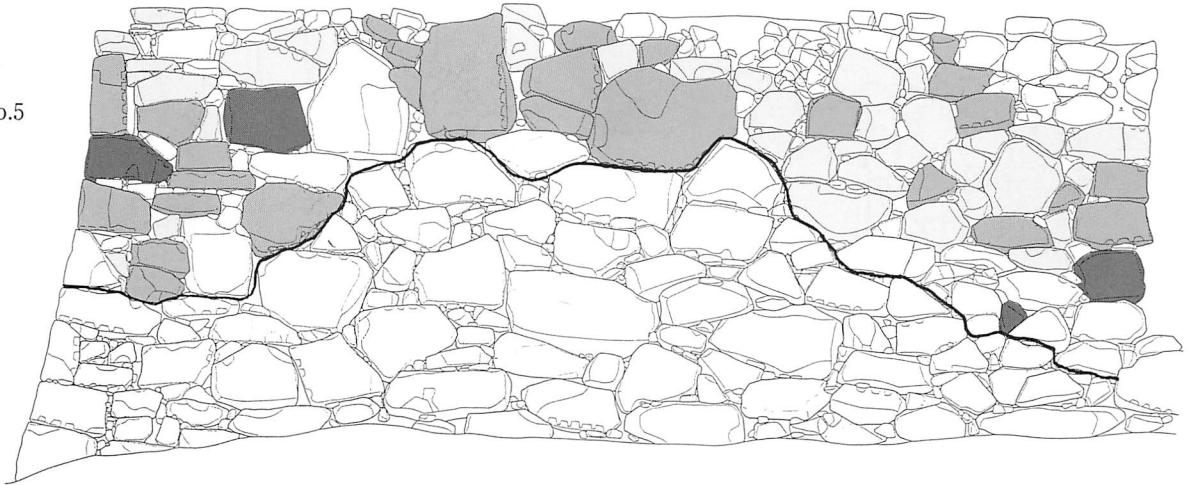
第25図 鉄門No. 1・2・3石垣石材分布図



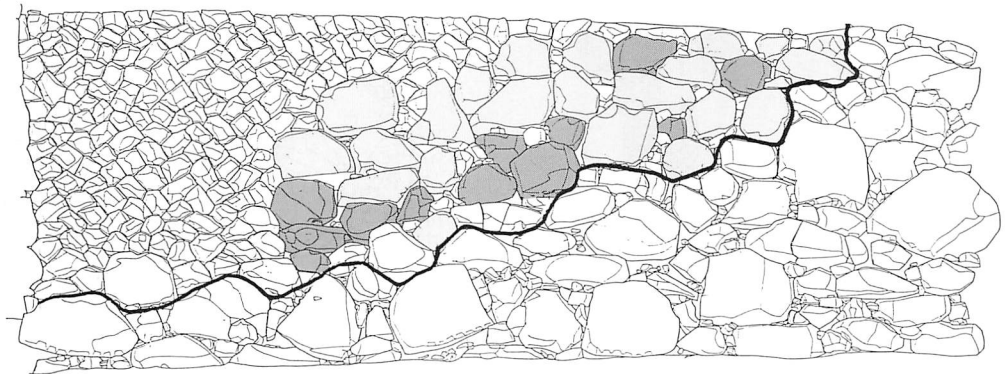
第26図 山ノ井門No.1・2・3・4石垣石材分布図



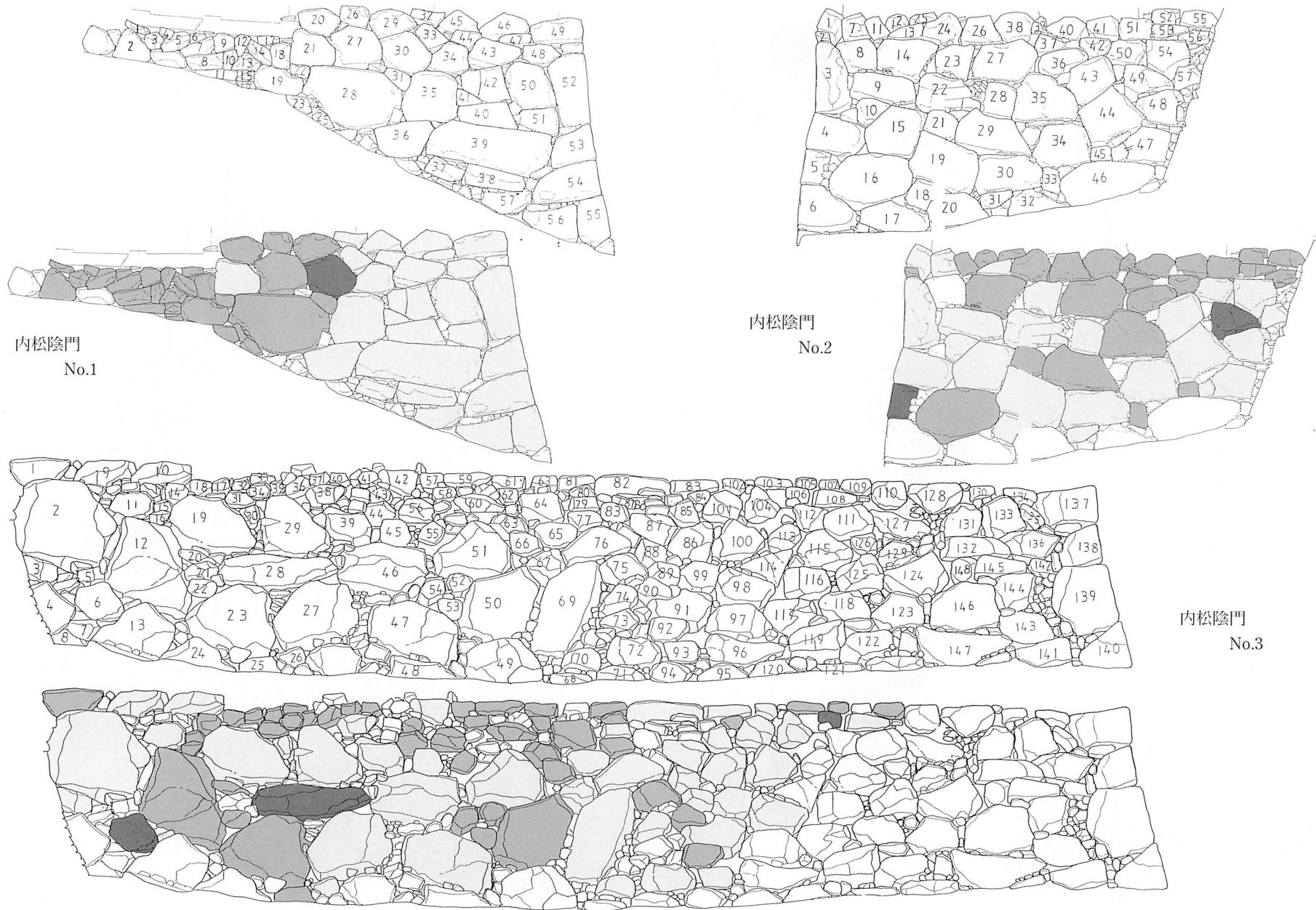
山ノ井門
No.5



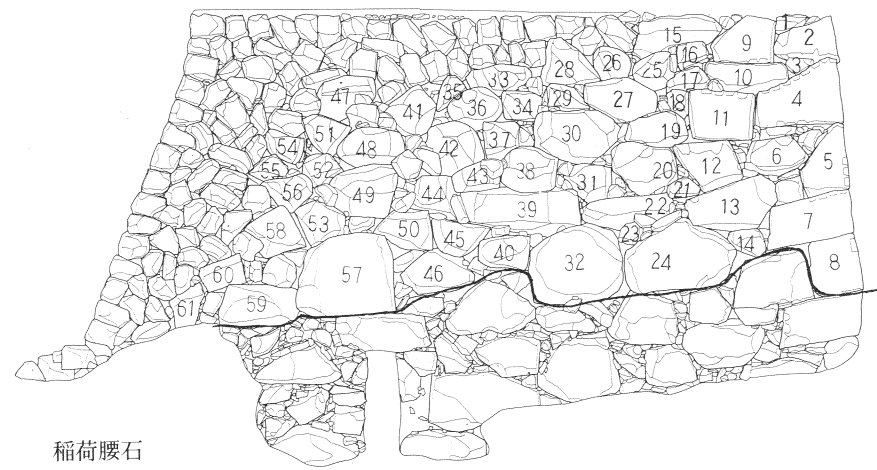
山ノ井門
No.6



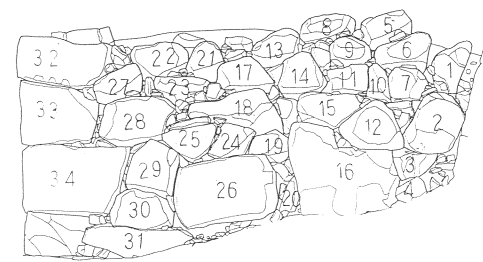
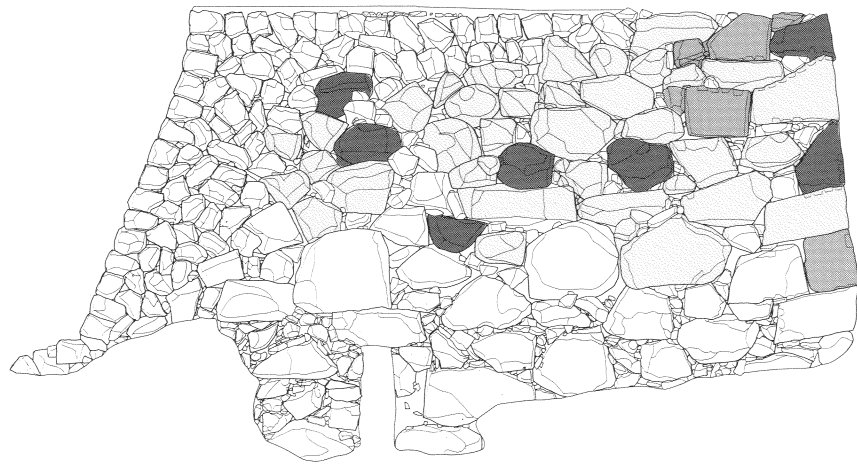
第27図 山ノ井門No. 5・6 石垣石材分布図



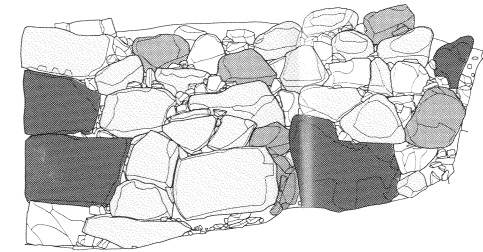
第28図 内松陰門No.1・2・3石垣石材分布図



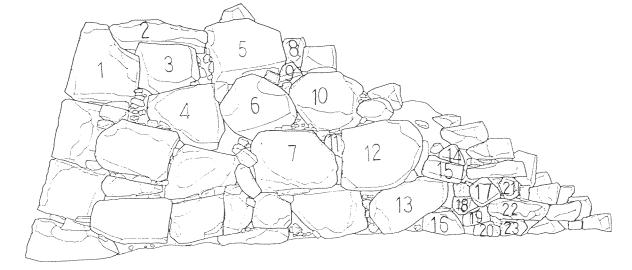
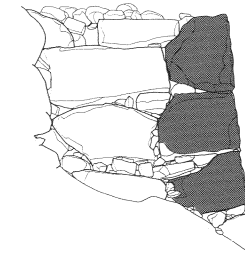
稻荷腰石
No.1



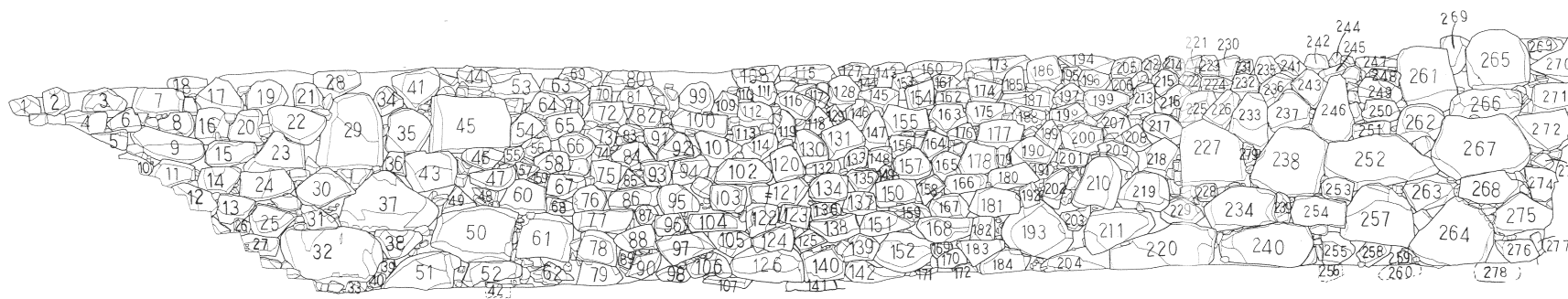
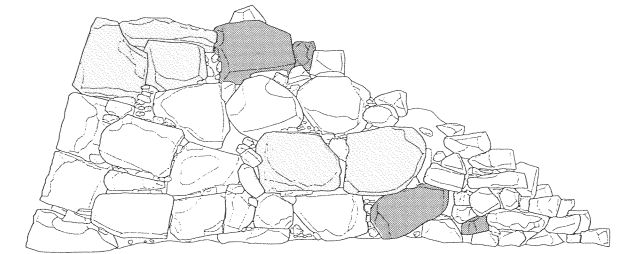
稻荷腰石
No.2



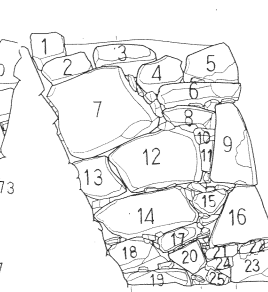
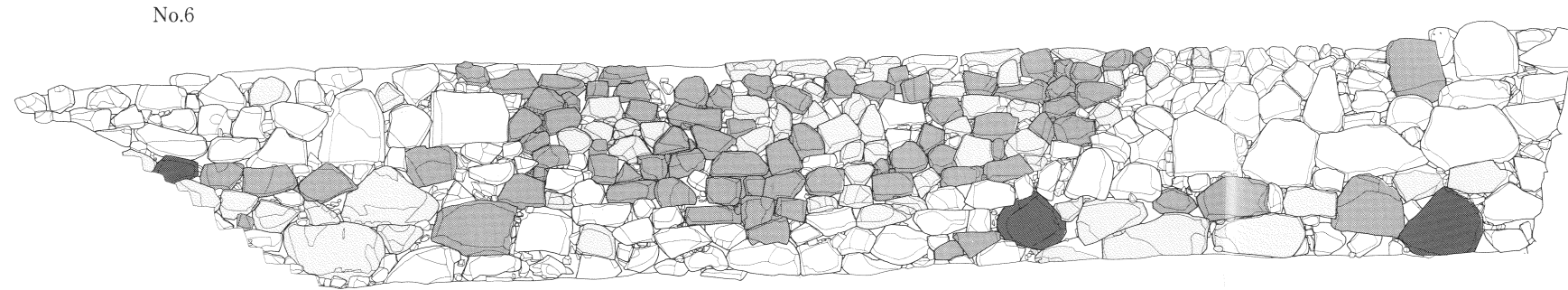
稻荷腰石
No.3



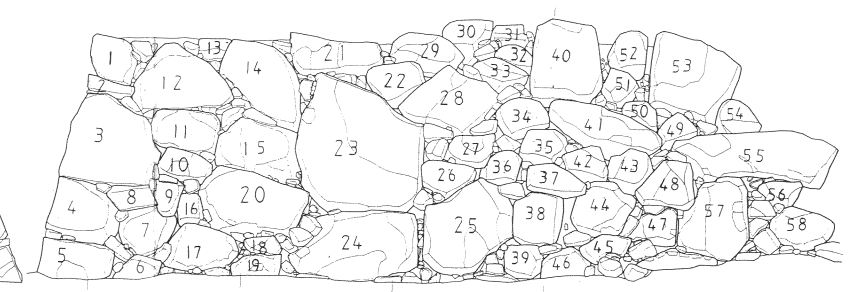
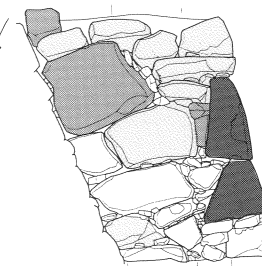
稻荷腰石
No.4



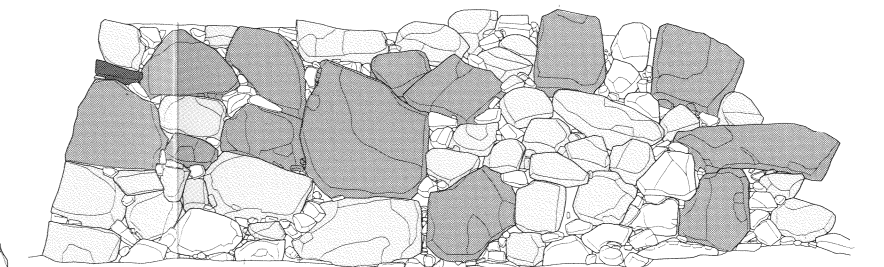
稻荷腰石
No.6



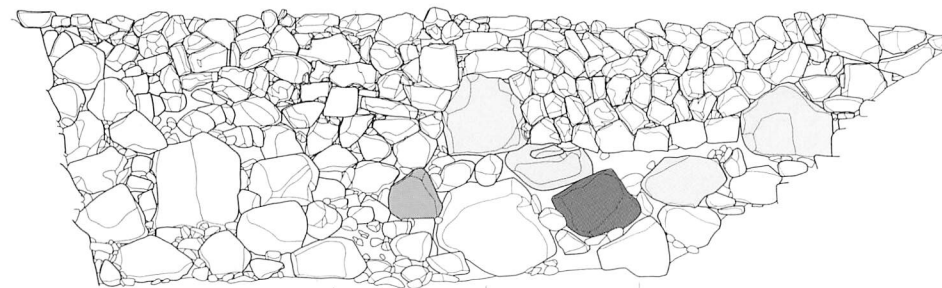
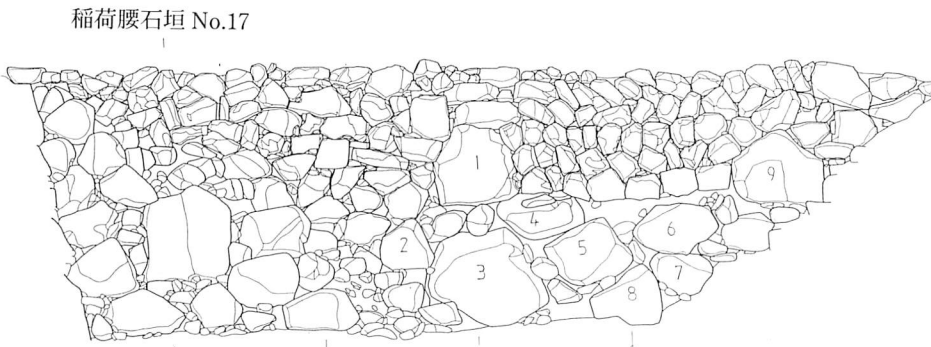
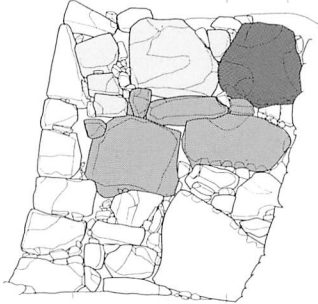
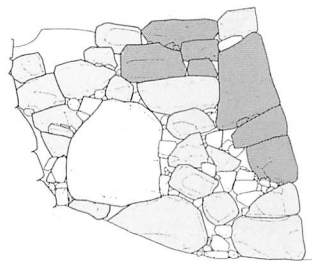
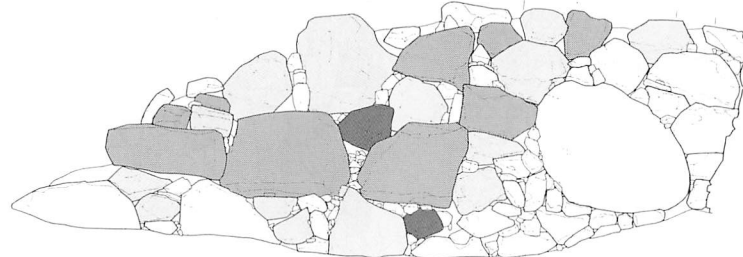
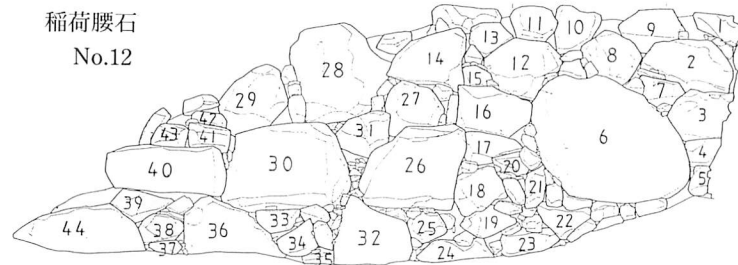
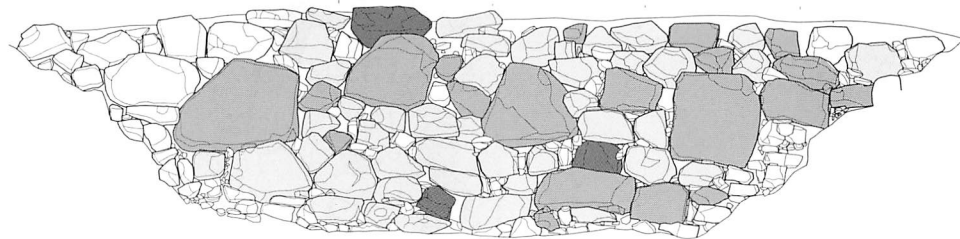
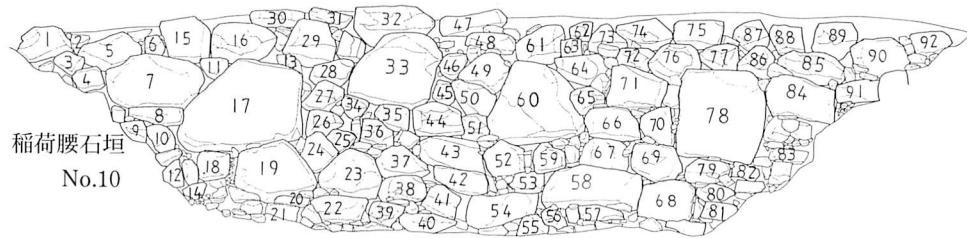
稻荷腰石 No.7



稻荷腰石 No.8

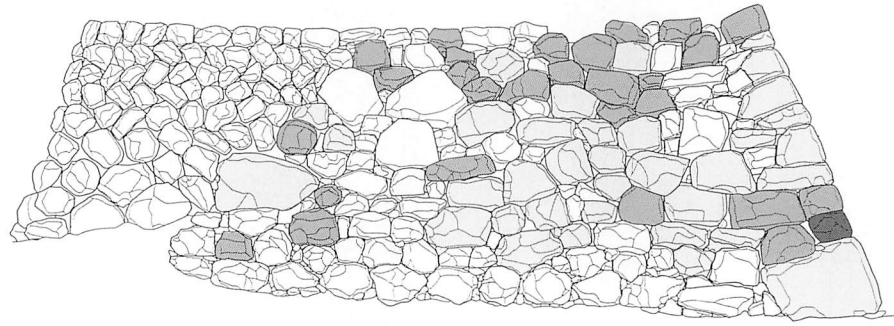
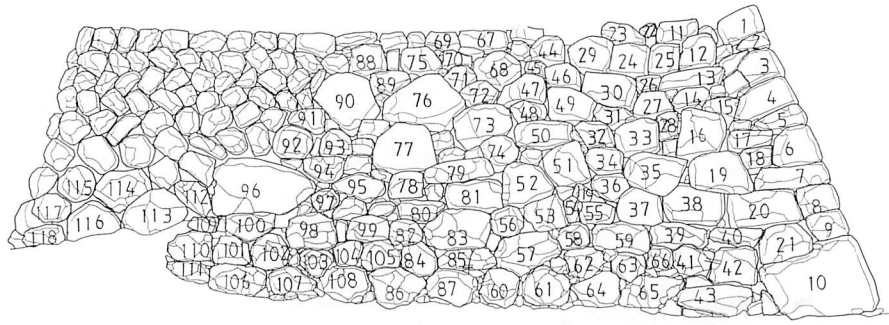


第29图 稻荷腰石No.1・2・3・4・6・7・8石垣石材分布图

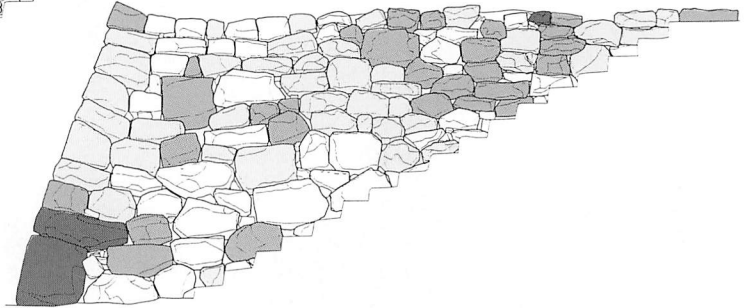
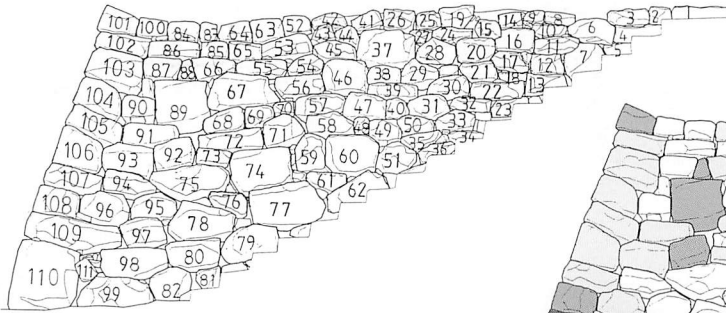


第30图 稲荷腰石垣No.10.12.13.14.17 石垣石材分布图

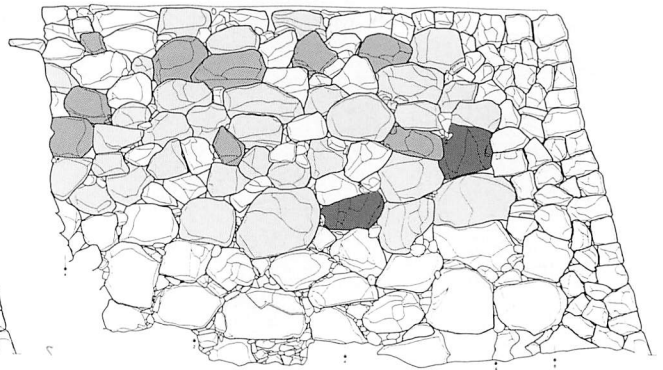
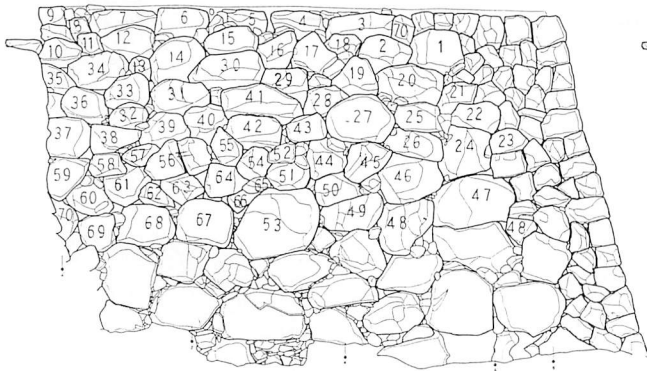
稲荷櫓台
No.1



稲荷櫓台 No.2



稲荷櫓台 No.3



第31図 稲荷櫓台No.1・2・3石垣石材分布図

石材調査表

銅門南石垣No. 1 ~ 3 石材表

銅門南石垣No. 2

No.	縦	横	控	重量	備考
1	50	55	60	0.4	
2	30	80	65	0.4	
3	50	90	55	0.7	
4	60	80	55	0.7	
5	50	45	90	0.5	
6	55	110	45	0.6	
7	45	50	75	0.4	
8	50	70	50	0.4	
9	55	70	85	0.7	
10	55	40	55	0.2	
11	50	30	50	0.1	
12	45	40	50	0.1	
13	60	25	35	0.2	
14	25	40	25	0.1未	
15	70	50	60	0.2	
16	50	50	60	0.2	
17	50	80	45	0.3	
18	50	50	55	0.2	
19	35	70	60	0.2	
20	50	60	85	0.5	
21	60	80	50	0.4	
22	50	40			
23	55	40			
24	55	50			
25	50	40			
26	50	40			
27	35	70			
28	30	45			
29	55	30	50	0.1	
30	55	65	25	0.2	
31	60	40	35	0.2	
32	50	60	40	0.2	
33	45	60	30	0.2	
34	50	45	55	0.2	
35	65	50	40	0.2	
36	55	50	45	0.2	
37	45	45			
38	35	40			
39	35	55			
40	40	20	60	0.2	
41					
42	50	60	80	0.6	
43					
44	40	45	30	0.1	
45	30	40	60	0.2	
46	40	60	40	0.3	
47	40	50	70	0.3	
48	30	50	30	0.3	
49					
50	30	50	40	0.2	
51	30	80	60	0.4	
52	40	40	50	0.3	
53	50	60	50	0.5	
54	40	50	50	0.4	
55	30	30	45	0.2	
56	30	30	40	0.2	
57					
58					
59					
60	20	30	40	0.1未	

No.	縦	横	控	重量	備考
61					
62					
63	25	50	40	0.2	
64	40	40	50	0.3	
65	20	50	40	0.1	
66	30	40	40	0.2	
67	70	135	75	0.1	
68	50	65	65	0.5	
69	30	50	100	0.7	
70					
71	30	45	40	0.2	
72	80	140	115	2.6	
73	60	70	40	0.4	
74					
75					
76					
77	20	40	50	0.2	
78	40	40	30	0.2	
79	30	30	40	0.1	
80					
81	85	145	80	2.0	
82	30	65	75	0.4	
83	75	125	70	1.6	
84	30	45	75	0.4	
85					
86	55	65	55	0.7	W30×70×70×0.4
87	40	65	65	0.6	
88	30	120	50	0.5	
89	30	30	50	0.2	
90	55	50	55	0.7	
91	80	120	65	1.3	
92	40	35	65		
93	25	95	80	0.7	
94	40	30	60	0.3	
95					
96	30	70	90	0.6	
97	80	180	50	2.0	
98					
99	40	40	50	0.2	
100	30	70	50	0.2	
101	40	60	70	0.3	
102	130	260	60	4.0	
103	60	130	85	1.4	
104	40	45	50	0.4	
105	40	60	60	0.5	
106	40	70	70	0.4	
107	35	50	65	0.4	
108	30	30	75	0.3	
109	120	95	100	2.2	
110	30	70	40	0.3	
111	45	45	105	0.5	
112	30	60	65	0.4	
113	50	70	70	0.6	
114	30	40	60	0.3	
115	20	70	80	0.5	
116	20	40	80	0.4	
117					
118	30	70	20	0.2	
119	40	50	55	0.4	
120	30	40	60	0.4	
121	50	50	55	0.5	
122	20	40	60	0.2	
123	30	40	80	0.4	
124	40	70			
125	40	60			
126	80	110	80	1.4	

No.	縦	横	控	重量	備考
127	60	90	50	0.9	
128	50	40	60	0.5	
129	50	40	60	0.5	
130	40	60	75	0.5	
131	30	40	60	0.1	
132	20	70			
133	70	170			
134	20	80	60	0.2	
135	50	70	70	1.0	
136	80	120	90	2.4	
137	40	30	65	0.5	

銅門南石垣No. 1

No.	縦	横	控	重量	備考
1	40	70	45	0.4	
2	35	80	70	0.4	
3	40	65	90	0.4	
4	60	90	85	0.7	
5	50	100	40	0.5	
6	50	55	115	0.6	
7	55	80	40	0.4	
8	55	60	70	0.4	
9	60	100	55	0.7	
10	40	60	40	0.3	
11	30	75	65	0.2	
12	55	65	45	0.3	
13	60	35	50	0.2	
14	45	40	55	0.1	
15	95	110	50	1.0	
16	80	90	80	1.0	
17	45	70	30	0.2	
18	30	45	50	1.0	
19	50	55	60	0.3	
20	60	100	80	1.0	
21	60	90	65	0.7	
22	30	40	40	0.1	
23	40	60	50	0.1	
24	70	75	65	0.1	
25	60	75	70	0.5	
26	80	150	60	1.0	
27	70	90	50	1.1	
28					
29	40	50	50	0.2	
30	55	70	30	0.2	
31	30	40	65	0.4	
32	55	85	45	0.3	
33	55	115	75	0.9	
34	60	50	95	0.5	
35	40	60	50	0.2	
36					
37	20	40	30	0.2	
38	40	50	30	0.2	
39	30	25	45	0.2未	
40	55	65	85	0.7	
41	40	55	40	0.2	
42	45	75	70	0.5	
43	50	70	30	0.3	
44	30	60	40	0.2	
45	30	60	50	0.3	
46	40	60	50	0.2	
47	25	40	85	0.3	
48	30	55	40	0.1	
49	30	35	60	0.2	
50	60	40	55	0.4	
51	60	70	60	0.7	
52	80	60	70		

No.	縦	横	控	重量	備考
53	40	70	60	0.5	
54	30	45	25	0.1	
55	40	35	65	0.2	
56	30	35	50	0.1	
57	40	40	60	0.2	
58	30	70	30	0.2	
59	50	60	60	0.6	
60	30	40	70	0.5	
61	40	30	30	0.1	
62	35	30	75	0.2	
63	30	45	35	0.1	
64	40	30	40	0.2	
65	40	50	60	0.2	
66	60	60	60	0.5	
67	30	40	60	0.2	
68	40	30	70	0.2	
69	70	110	70	1.1	
70	30	60	35	0.2	
71	30	25	60	0.1	
72	50	50	80	0.2	
73	40	50	80	0.3	
74	60	50	70	0.5	
75	20	20			
76	50	90	60	1.0	
77	70	150	40	1.5	
78	90	165	75	1.7	
79	60	30	60	0.1	W60×30×50×0.2
80	40	60	60	0.3	
81	30	90	40	0.3	
82	40	60	70	0.3	
83	30	60	50	0.2	
84	60	50	70	0.3	
85	60	100	70	0.8	
86	50	60	50	0.4	
87	50	40	70	0.4	
88	50	80	90	0.9	
89					
90	50	80	100	1.1	
91	95	95	110	2.0	

銅門南石垣No. 3

No.	縦	横	控	重量	備考
1	50	40	60	1.1	
2	115	90	90	2.4	

山ノ井門石垣 No. 1 ~ 6 番石材表

山ノ井門石垣No. 1

No.	縦	横	控	重量	備考
1	60	150	45		
2	40	60	75		
3	35	85	80		
4	100	70	80		
5	45	75	60	0.4	
6	90	80	30	0.5	
7	30	35	55	0.2	
8	65	80	45	0.4	
9	60	65	40	0.4	
10	70	135	55	0.5	
11	60	100	35	0.6	
12	70	55	60	0.6	
13	45	80	60	0.5	

山ノ井門石垣No. 2

No.	縦	横	控	重量	備考
1	40	100	70		

No.	縦	横	控	重量	備考
2	85	20	110		
3	45	50	60		
4	40	35	110		
5	30	70	50	0.3	
6	35	60	30	0.2	
7	50	35			
8	70	40			
9	35	75	40	0.2	
10	40	35	40	0.1	
11	40	110	35	0.4	
12	45	85	70	0.6	
13	65	110			
14	35	45	40	0.3	
15	30	80	40	0.1	
16	30	45	35	0.1	
17	40	60			
18	40	60			
19	60	60	35	0.4	
20	50	110	45	0.7	
21	65	45			
22	70	110	35	0.7	
23	30	90	50	0.4	
24	35	60	40	0.2	
25	100	90			

山ノ井門石垣No. 3

No.	縦	横	控	重量	備考
1	40	65			
2	90	115			
3	55	50			
4	30	50	40	0.1	
5	30	75	40	0.2	
6	40	110			
7	65	70	45		
8	45	95	70	0.7	
9	60	65	55		
10	35	50	45		
11	75	85	60	0.9	
12	55	115	60	0.8	
13	80	80	75	0.7	
14	35	85	70	0.6	
15	70	80	40	0.4	
16	35	75	40	0.3	
17	65	95	65	0.9	
18	60	105	30	0.4	
19	100	125	30	0.8	
20	55	120	90	0.9	
21	35	45	35	0.2	
22	55	145	45	0.8	
23	50	85	40	0.6	
24	45	65	80	0.6	
25	40	70	40	0.3	
26	25	45	50	0.2	
27	30	50	60	0.3	
28	85	100	75	1.3	
29	60	100	30	0.5	
30	85	115	70	1.2	
31	55	105	65	0.7	
32	45	110	60	0.7	
33	95	90	30	0.4	
34	25	55	65	0.3	
35	24	60	35	0.2	
36	45	65	30	0.3	
37	35	50	35	0.2	
38	80	105	30	0.7	
39	35	85	75	0.6	

No.	縦	横	控	重量	備考
40	40	100	65	0.7	
41	40	80	30	0.4	
42	50	90	60	0.9	
43	30	65	50	0.2	
44	30	65	75	0.4	
45	30	35	60	0.2	
46	30	35	60	0.2	

山ノ井門石垣No. 4

No.	縦	横	控	重量	備考
1					
2	30	35	60	0.1	
3	100	85			
4	60	115	90	1.3	
5	60	70	90	0.8	
6	75	85	60	0.9	
7	20	40	55		
8	45	70	40	0.2	
9	25	60	45	0.1	
10	25	30	45	0.1	
11	30	95	70	0.3	
12					
13	35	55	50		
14	30	110	80	0.8	
15	25	130	70	0.5	
16	20	50	60	0.1	
17	35	95	60	0.4	
18	45	45	90	0.5	
19	30	95	60	0.5	
20	20	45	50	0.1	
21	35	60	45	0.2	
22	35	35	30	0.1	
23	25	40	60	0.1	
24	70	100	70	1.1	
25	50	85	90	0.8	
26	35	45	40	0.2	
27	30	80	50	0.2	
28	35	90	60	0.3	
29	30	55	50	0.3	
30					
31	30	35	50	0.1	
32	25	45			
33	15	55			
34	30	55	60	0.2	
35	35	65	45	0.3	
36	30	65	40	0.1	
37	20	75			
38	25	90	40	0.2	
39	35	65	70	0.4	
40	25	35	70	0.2	
41	40	125	75	1.3	
42	30	60	70	0.3	
43	30	65	50	0.1	
44	45	60	40	0.3	
45	25	35	60	0.1	
46	30	50	60	0.1	
47	35	45	80	0.2	
48	35	65	70	0.3	
49	30	40	90		
50	40	125	60	0.8	
51	40	70	40	0.3	
52	30	35			
53	15	30	40	0.1	
54	30	45	60	0.3	
55	25	45	35	0.1	
56	30	65	55	0.1	

No.	縦	横	控	重量	備考
57	45	60	60	0.3	
58	40	60	60	0.3	
59	40	60	70	0.3	
60	50	30			
61	30	45	65	0.2	
62	40	60	70	0.4	
63	40	45			
64	55	75	70	0.6	
65	45	45			
66	70	130			
67	30	70	90	0.4	
68	30	40	50		
69	30	35	85	0.5	
70	25	45	25	0.1	
71	30	50	40	0.1	
72	35	45	40	0.1	
73	30	60	70	0.3	
74					
75	20	45	30	0.1	
76	30	55	80	0.3	
77	40	75	45	0.3	
78	40	35			
79					
80	40	55			
81	55	50			
82	35	55			
83	20	55			
84	35	55			
85	35	40			
86	35	45	60	0.2	
87					
88	55	40			

山ノ井門石垣No. 5

No.	縦	横	控	重量	備考
1	20	70	35		
2	30	60	40		
3	100	45	75	0.9	
4	55	95	120		(11×9×5)×3
5	55	90	80		
6	70	60			
7	30	25	30	0.1	
8	40	65	85	0.6	
9	35	70	65	0.4	
10	25	30	40	0.1	
11	25	90	55	0.3	
12	25	110	90	0.5	
13	35	70	55	0.3	
14	55	85	60	0.6	
15	40	95	50	0.4	
16	15	60	50		
17	20	45	50		
18	35	85			
19	30	50			
20	40	30	25		
21	40	30	25		
22	20	50	30		
23	50	70	50	0.3	
24	60	135	40	0.6	
25	90	100	110	2.6	
26	40	125	75	0.7	
27	80	130			
28	20	105			
29	140	160			
30	40	40	60	0.1	
31	160	125	60	2.8	

No.	縦	横	控	重量	備考
32	20	55	55	0.3	
33					
34	150	110	85	3.8	(13×11×6)×6
35	35	60	15	0.1	
36	55	45	40	0.2	
37	35	70	60	0.4	
38	65	100	55	0.8	(14×10×8)×5
39	40	95	70	0.6	
40	60	140			
41	140	175	95	4.6	(11×9×7)×12
42	40	45	50		
43	40	70			
44	30	50	60	0.2	
45	30	80	40	0.3	
46	25	45	50	0.2	
47	50	70	50	0.6	
48	35	50	50	0.3	
49	55	60	35	0.5	
50	50	65	60	0.5	
51	65	130	95	2.0	
52	50	130			
53	55	80	40	0.3	
54	45	60	60	0.4	
55	40	90	35	0.4	
56	35	70	45	0.3	
57	20	40	50	0.2	
58	60	85	45	0.6	
59					
60	50	40	50	0.3	
61	60	80	45	0.6	
62	40	25	30	0.1	
63	35	45			
64					
65	25	40			
66	35	55	60	0.3	
67	45	60			
68	45	70	65	0.6	
69	40	70	60	0.5	(5×10×8)×3
70	30	50	50	0.3	
71	45	50	50	0.4	
72	30	32	50	0.2	
73	40	100	75	0.8	
74	20	85			
75	35	60			
76	45	55			
77	25	30			
78	45	80			
79	65	80	110	1.4	
80	40	100			
81	35	80	50	0.3	
82	95	90	50	1.2	
83	55	75	40	0.3	
84	30	35			
85	55	60			
86	20	50			
87	30	55			
88	35	65			
89	20	40			
90	40	70			
91	40	100	30	0.5	
92	50	70	60	0.7	
93	30	35	50	0.1	
94	30	35	60	0.2	
95	70	90	90	0.9	
96	40	35	35	0.1	
97	65	80	110	1.4	

No.	縦	横	控	重量	備考
98	55	90			
99	40	85			

山ノ井門石垣No. 6

No.	縦	横	控	重量	備考
1	75	100	50	0.6	
2	60	95	30	0.4	
3	55	80	40	0.5	
4	85	70	35	0.3	
5	55	70	35	0.2	
6	55	80	45	0.5	
7	60	100	40	0.4	
8	55	60	40	0.4	
9	50	55	35	0.3	
10	45	75	60	0.3	
11	45	100	40	0.4	
12	40	80	45	0.3	
13	40	70	50	0.2	
14	50	60	55	0.3	
15	30	55	50	0.3	
16	45	100	40	0.4	
17	30	40	35	0.1	
18	70	70			
19	55	65	55	0.2	
20	55	55	50	0.4	
21	50	55	40	0.3	
22	80	90	40	0.5	
23	30	30	85	0.3	
24	40	45	75	0.4	
25	65	75	70	0.5	
26	50	50	80	0.6	
27	55	70	35	0.2	
28	55	70	50	0.5	
29	40	110	80	1.0	
30	60	70	70	0.6	
31	45	65	55	0.5	
32	40	55	80	0.5	
33	35	120			
34	35	40	50	0.4	
35	75	75			
36	30	50			
37	35	80	80	0.6	
38	25	40	60	0.3	
39	45	110			
40	80	90			

内松陰門南石垣番付表No. 1 ~ 3

内松陰門南石垣No. 1

No.	縦	横	控	重量	備考
1	10	40	40	0.1	
2	65	60			
3	20	30	35	0.1	
4	15	20	30	0.1	
5	20	50	30	0.1	
6	15	25	20	0.1	
7	25	60	35	0.1	
8	25	60	30	0.2	
9	30	30	40	0.1	
10	35	20	40	0.1	
11	20	80			
12	45	30			
13	40	50			
14	25	40	40	0.1	
15	30	35			
16	30	20	20	0.1	

No.	縦	横	控	重量	備考
17	20	40			
18	45	30	25	0.2	
19	45	85			
20	45	70	45	0.3	
21	60	85	55	0.4	
22	25	35			
23	20	30			
24	30	25			
26	35	50	40	0.2	
27	40	50			
28	100	170	45	1.6	
29	40	80	45	0.3	
30	70	80	125	1.4	
31	25	50	15	0.1	
32	25	65			
33	35	50	30	0.1	
34	50	60	50	0.3	
35	70	100	60	0.7	
36	70	100			
37	35	70			
38	40	110			
39	75	210	40	1.8	
40	40	95	60	0.6	
41	30	55			
42	75	50	40	0.4	
43	50	70	25	0.2	
44	30	45	50	0.2	
45	35	60	25	0.3	
46	40	80	35	0.3	
47	20	50	40	0.1	
48	35	50	2	0.1	
49	40	90	30	0.4	
50	80	70	60	0.6	
51	40	65	30	0.2	
52	130	55	40	0.9	
53	60	70	85	0.9	
54	60	70	85	0.9	
55	100	60			
56	60	100			
57	40	95			

内松陰門南石垣No. 2

No.	縦	横	控	重量	備考
1	40	40	80	0.4	
2	15	20	35	0.1	
3	125	55	55	0.9	
4	60	90	70	0.9	
5	60	30	120	0.7	
6	60	110			
7	40	35	60	0.1	
8	60	60			
9	45	110	65	0.9	
10	45	110	65	0.4	
11	40	30	40	0.1	
12	40	30	40	0.1	
13	20	60	60	0.1	
14	60	80	30	0.4	
15	90	85	65	0.9	
16	90	130	50	1.1	
17	55	120			
18	50	45	70	0.4	
19	80	115	60	0.4	
20	60	110			
21	25	45	30	0.1	
22	65	80	60	0.5	
23	55	60	65	0.4	

No.	縦	横	控	重量	備考
24	50	60	40	0.3	
25	15	40	40	0.1	
26	55	40	30	0.1	
27	70	110	30	0.4	
28	60	50	85	0.8	
29	15	40	20	0.1	
30	70	110	80	1.1	
31	30	50	70	0.3	
32	45	110			
33	40	40	30	0.1	
34	80	80	60	1.1	
35	85	110	45	0.9	
36	40	80	50	0.4	
37	30	50	25	0.1	
38	50	65	50	0.1	
39	20	25	30	0.1	
40	40	60	40	0.2	
41	35	50	35	0.2	
42	30	50	45	0.3	
43	60	90	65	0.7	
44	80	90	70	1.1	
45	20	20	40	0.1	
46	70	170			
47	60	70	65	0.6	
48	60	70	90	0.9	
49	50	70	100	0.8	
50	40	60	65	0.5	
51	35	50	40	0.1	
52	25	40	45	0.2	
53	20	20	35	0.1	
54	60	65	70	0.7	
55	30	60	50	0.3	
56	25	60	50	0.1	
57	40	95			

内松陰門南石垣No. 3

No.	縦	横	控	重量	備考
1	50	110	50	0.7	
2	150	180	60	3.5	
3	40	60	80	1.5	
4					
5					
6	70	65	130	1.3	
7					
8					
9	50	90	80	0.8	
10	40	110	70	0.5	
11	50	70	60	0.5	
12	165	120	40	2.6	
13					
14	30	40	40	0.1	
15	20	30	50	0.1	
16	25	40	30	0.1	
17	25	40	30	0.1	
18	30	35	35	0.1	
19	80	160	65	1.8	
20	20	50	50	0.1	
21	30	60			
22	30	50	45	0.1	
23	20	30	40	0.1	
24					
25	30	40	50	0.2	
26	35	50			
27	100	125	65	2.3	
28	60	185	120	2.0	
29	120	80	65	1.9	

No.	縦	横	控	重量	備考
30	40	20	70	0.2	
31	30	40	50	0.2	
32	20	30	40	0.1	
33	15	35	30	0.1	
34	30	30	30	0.1	
35	25	40	40	0.1	
36	25	40	40	0.1	
37	20	40	40	0.1	
38	40	40	55	0.2	
39	50	80	95	0.7	
40	20	30	30	0.1	
41	25	40			
42	35	60	60	0.3	
43	25	40	40	0.1	
44	30	40	50	0.2	
45	30	40	90	0.6	
46	100	160	70	2.2	
47	100	170	70	2.0	
48	35	110			
49	80	135			
50	95	145	40	1.0	
51	80	125	55	1.0	
52	40	40	25	0.1	
53	30	40	50	0.1	
54	40	50	50	0.3	
55	25	30	50	0.1	
56	40	60	30	0.2	
57	25	40	30	0.1	
58	20	40	30	0.1	
59	20	80	35	0.1	
60	40	80	50	0.3	
61	25	60	50	0.2	
62	25	30	40	0.1	
63	20	60	30	0.1	
64	55	75	40	0.4	
65	40	65	65	0.5	
66	20	40	30	0.1	
67	50	55	75	0.4	
68	25	75			
69	180	80	60	1.7	
70	50	60	70	0.6	
71	30	90			
72	60	100	60	0.6	
73	40	70			
74	50	75	60	0.3	
75	50	75	45	0.6	
76	70	125	75	0.8	
77	20	40	30		
78					
79	30	50	60	0.1	
80	25	30	40	0.1	
81	20	60	30	0.1	
82	30	130	65	0.7	
83	35	40	70	0.2	
84	20	30	40	0.1	
85	45	40	65	0.4	
86	65	80	55	0.5	
87	40	85	95	0.6	
88	35	45	75	0.4	
89	20	40	70	0.4	
90	40	60	45	0.3	
91	40	110	60	0.5	
92	30	70	40	0.1	
93	40	60	75	0.4	
94	40	75			
95	35	95			

No.	縦	横	控	重量	備考
96	50	145			
97	70	110			
98	50	90	55	0.7	
99	60	65	70	0.5	
100	70	85	90	1.2	
101	50	75	80	0.7	
102	15	40	70	0.1	
103	20	60	50	0.1	
104	60	60	90	0.8	
105	20	40	40	0.1	
106	20	40	100	0.1	
107	20	45			
108	30	70	70	0.3	
109	30	50	40	0.1	

稲荷櫓台石垣No. 1 ~ 3 石材表

稲荷櫓台石垣No. 1

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
1	40	65	40	0.3	
2	25	45	70	0.4	
3	40	60	60	0.7	
4	45	60	60	0.7	
5	30	65	65	0.4	
6	55	70	60	0.5	
7	30	105	80	0.7	
8	40	55	45	0.4	
9	40	55	115	0.6	
10	90	145			
11	30	55	40	0.2	
12	45	50	40		
13	25	90			
14	30	45			
15	30	50	35		
16	65	60	60	0.6	
17	30	60	65	0.4	
18	40	45			
19	60	80	55	0.5	
20	45	100	40	0.4	
21	50	80	45	0.5	
22	35	20	30		
23	30	60	45	0.4	
24	45	50	55	0.3	
25	45	50	40	0.3	
26	25	35	50		
27	40	50	40	0.3	
28	40	30			
29	50	60	45	0.4	
30	45	70	50	0.4	
31	30	50	50		
32	35	45	60	0.2	
33	40	60	70	0.4	
34	45	50	65	0.4	
35	60	85	60	0.6	
36	35	50	75	0.5	
37	45	65	50	0.4	
38	55	90	80	1.2	
39	35	75	60	0.4	
40	25	75	60	0.3	
41	35	50	60	0.6	
42	30	60			
43					
44	40	50	40		
45	25	30	60		
46	30	45	50	0.2	
47	40	60	50	0.4	

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
48	30	45	60	0.4	
49	40	75	55	0.3	
50	60	60	70	0.5	
51	60	60	70	0.5	
52	55	70	70	0.6	
53	40	60	60	0.4	
54	40	25	60		
55	30	50	55	0.3	
56	30	45	65	0.4	
57	45	90	65	0.4	
58	35	45	60	0.3	
59	20	80			
60					
61					
62					
63					
64					
65					
66	40	60	80	0.5	
67	30	65			
68	50	60	55	0.4	
69	25	45	40		
70	25	40	45		
71	35	45	45		
72	35	55	50	0.3	
73	45	80	55	0.5	
74	45	55	70	0.3	
75	40	50			
76	75	110			
77	65	80			
78	35	45			
79	30	95	45	0.4	
80	25	60			
81	40	75	55	0.3	
82					
83	25	70	60	0.5	
84					
85					
86					
87					
88	40	45	50	0.5	
89	35	55	50	0.3	
90	90	80			
91	30	50	65	0.3	
92	45	50	50	0.3	
93	35	45	60	0.2	
94	40	50			
95	35	75			
96	30	145	65	0.4	
97	35	60	50	0.3	
98	45	50	40	0.3	
99					
100	40	70			
101	35	40	35	0.2	

稲荷櫓台石垣No. 2

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢穴
1	10	80			
2	70	30			
3	20	60			
4	20	70			
5	10	40			
6	30	70			
7	30	50			
8	15	50			
9	20	30			

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
10	10	45				
11	20	60				
12	20	40				
13	20	60				
14	20	30				
15	20	40				
16	30	50				
17	25	50				
18	10	40				
19	25	50				
20	30	60				
21	20	50				
22	20	70				
23	20	30				
24	20	60				
25	20	30	60	0.3		
26	20	50	50	0.4		
27	20	30	70	0.5		
28	30	50	55	0.4		
29	30	50				
30	30	60				
31	30	60	50	0.5		
32	15	60				
33	20	50	55	0.5		
34	10	55	80	0.3		
35	30	50	45	0.3		
36	45	100				
37	20	50	55	0.4		
38	20	40	60	0.6		
39	20	60	40	0.4		
40	30	30	50			
41	25	40	45	0.2		
42	25	50	45	0.3		
43	20	30				
44	25	30	85	1.1		
45	20	50	55	0.2		
46	50	60	60	0.5		
47	30	50	85	0.3		
48	20	20	55	0.3		
49	40	40	60	0.2		
50	20	50				
51	50	50				
52	20	35	50	0.2		
53	30	70	75	0.5		
54	30	50	40			
55	20	65	55			
56	25	70	40			
57	25	70	70	0.3		
58	30	60				
59	50	40	65			
60	60	70	60	0.2		
61	40	65				
62	40	70				
63	35	40	45	0.2		
64	30	50	55			
65	20	50	65	0.4		
66	30	60				
67	40	90	50			
68	35	60	40			
69	30	50	50			
70	10	30				
71	40	60	80	0.4		
72	25	85	50	0.3		
73	25	40				
74	60	75	65	0.7		
75	50	100	80	0.8		

76	30	50	60	0.2		
77	60	100	55	0.8		
78	40	80	35	0.4		
79	45	75	65	0.4		
80	30	40				
81	20	30				
82	40	50				
83	30	30	60	0.5		
84	30	50				
85	20	40	55	0.4		
86	20	70				
87	25	55				
88	20	20				
89	50	70	45	0.5		
90	30	50	50	0.3		
91	30	70	50	0.3		
92	40	50				
93	30	70	60	0.4		
94	35	70				
95	40	60	45	0.2		
96	40	60	60	0.4		
97	40	60	60	0.3		
98	40	80	55	0.4		
99	35	100				
100	40	50				
101	30	50				
102	20	70				
103	50	70				
104	40	60				
105	30	80				
106	50	60				
107	30	80				
108	30	60				
109	40	130				
110	90	90				

稲荷櫓台石垣No. 3

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	60	65	70	0.6		
2	40	75	50	0.4		
3	35	90				
4	30	70	65	0.5		
5	45	65				
6	40	70	55	0.5		
7	25	95				
8	20	25				
9	25	30				
10	40	60				
11	30	35	50	0.3		
12	45	70				
13	25	30	55	0.4		
14	60	75	35	0.3		
15	30	75	70	0.3		
16	40	50				
17	55	60	50	0.4		
18	40	55				
19	50	60				
20	55	90	60	0.4		
21	35	50	65	0.4		
22	40	60	60	0.4		
23	30	50				
24	50	60	100	0.4		
25	35	50	80	0.4		
26	40	90	50	0.5		
27	60	80	90	1.0		
28	45	35	70	0.3		
29	45	65				

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
30	50	100	45	0.4	
31	40	70	70	0.3	
32	60	100	80	0.9	
33	30	60			
34	50	80			
35	40	40	55	0.2	
36	45	65	50	0.3	
37	60	60	50	0.2	
38	30	60	70	0.3	
39	65	45	65	0.3	
40	35	55	70	0.3	
41	45	100	60	0.6	
42	40	60	60	0.4	
43	30	50			
44	30	50	70	0.3	
45	40	60	90	0.5	
46	50	60	80	0.7	
47	60	100	80	0.9	
48	60	90	90	0.9	
49	50	40	130	1.0	
50	40	60			
51	30	60	80	0.4	
52	20	30			
53	80	110	50	0.9	
54	30	30	90	0.4	
55	30	40	40	0.2	
56	40	50	60	0.3	
57	25	40	60	0.2	
58	20	40	80	0.3	
59	40	50	70	0.4	
60	30	50	70	0.4	
61	30	50	90	0.5	
62	30	50			
63	30	30	60	0.3	
64	35	40	60	0.3	
65	20	40			
66	30	40			
67	40	60	80	0.7	
68	50	80			
69	40	50			
70	50	20			

稲荷曲輪No 1 ~17石材表

稲荷曲輪腰石垣No. 1

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
1	20	35	30	0.1	
2	40	70	110	0.8	
3	20	35			
4	60	110	75	1.3	
5	80	60	110	1.5	
6	40	75	70	0.5	
7	60	110	80	1.1	
8	75	65	40	0.4	
9	60	70	45	0.4	
10	30	110	60	0.5	
11	60	80	50	0.6	
12	60	65	90	1.3	
13	40	50	90	0.5	
14	35	50			
15	30	140	80	0.9	
16	25	30	50	0.1	
17	30	60	60	0.3	
18	30	20	50	0.1	
19	30	60	60	0.4	
20	70	70	115	1.0	

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
21	20	30	60	0.1	
22	30	110	75	0.5	
23	20	20	70	1.0	
24	80	130	55	1.1	
25	20	50	60	0.3	
26	30	30	70	0.4	
27	55	100	60	0.5	
28	30	65	60	0.5	
29	25	50	75	0.4	
30	60	95	65	1.0	
31	40	40	80	0.6	
32	100	120			
33	30	50	95	0.4	
34	35	35	60	0.3	
35	20	30	65	0.2	
36	40	50	70	0.5	
37	40	40	85	0.5	
38	50	60	105	0.7	
39	45	130	75	1.3	
40	40	60	80	0.5	
41	55	45	85	0.7	
42	50	70	55	0.7	
43	25	50	80	0.3	
44	50	80			
45	40	50	105	0.6	
46	50	100			
47	25	75	100	0.5	
48	40	75	110	0.8	
49	60	75	95	1.0	
50	50	70			
51	40	40	70	0.3	
52	30	40	70	0.2	
53	40	40	95	0.8	
54	30	40	60	0.2	
55	20	50			
56	30	40	95	0.5	

稲荷曲輪腰石垣No. 2

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
1	40	50	110	0.7	
2	70	60	50	0.5	
3	40	60			
4	40	60	60	0.3	
5	25	50	50	0.2	
6	30	50	80	0.7	
7	40	55	60	0.3	
8	30	65	60	0.3	
9	30	40	70	0.4	
10	30	20	60	0.3	
11	30	50	40	0.3	
12	50	70	60	0.6	
13	30	50	70	0.3	
14	50	60	70	0.5	
15	30	60	60	0.4	
16	60	60	120	1.3	
17	40	50	50	0.3	
18	40	90	70	0.5	
19	30	30	50	0.3	
20	20	50	50	0.1	
21	40	50			
22	45	50			
23	20	70	80	0.4	
24	40	30	80	0.5	
25	45	60	60	0.5	
26	80	120	75	2.0	
27	30	60	80	0.4	

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
28	50	90	90	1.0		
29	60	50	55	0.5		
30	40	60	75	0.7		
31	45	125	80	0.9		

稲荷曲輪腰石垣No. 4

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	100	85	80	0.4		
2	30	130	90	0.9		
3	50	65	70	0.5		
4	80	100				
5	75	95	35	0.4		
6	90	100				
7	80	100	65	1.1		
8	30	25	35			
9	25	25	55			
10	80	90				
11	30	30				
12	95	105	55	1.2		
13	60	110	50	0.5		
14	25	45				
15	30	50				
16	30	50				
17	40	40				
18	25	35				
19	20	40				
20	20	35				
21	30	30				
22	25	80				
23	20	35				

稲荷曲輪腰石垣No. 6

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	30	40				
2	50	40				
3	40	65				
4	30	60				
5	25	50				
6	40	50				
7	40	70				
8	45	50				
9	40	110				
10	20	50	65	0.2		
11	40	65	100	0.3		
12	40	80	55	0.2		
13	35	55	65	0.1		
14	40	65	35	0.2		
15	35	80				
16	55	50				
17	45	70				
18	30	60				
19	50	45	90	0.2		
20	50	50				
21	40	40				
22	50	80				
23	55	70				
24	25	65	35	0.2		
25	45	60	65	0.4		
26	35	25	35			
27	20	50				
28	40	70				
29	110	90				
30	6,	80	50	0.3		
31	45	65	80	0.2		
32	80	120	80	1.5		
33	20	30				

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
34	30	60	60	0.2		
35	70	60				
36	30	30				
37	85	130	90	1.4		
38	40	50	80	0.4		
39	25	25				
40	25	20				
41	60	70				
42	20	40				
43	30	60	50	0.2		
44	30	40	50	0.1		
45	80	120				
46	30	60				
47	25	70				
48	20	40				
49	40	40				
50	80	110	50	1.2		
51	55	90				
52	30	75				
53	30	60	40	0.2		
54	40	50	40	0.2		
55	25	30				
56	40	50	40	0.2		
57	25	30				
58	30	40	50	0.1		
59	20	20	40	0.1		
60	50	60				
61	70	80				
62	40	60				
63	20	60	40	0.1		
64	30	50	40	0.2		
65	30	55	50			
66	40	50	60	0.2		
67	45	50				
68	20	70	80	0.2		
69	15	50	60	0.1		
70	25	30	50	0.1		
71	30	10	40			
72	40	40	60	0.3		
73	30	45	65			
74	20	20	25	0.1		
75	40	40	50	0.1		
76	30	40				
77	35	70				
78	40	30	70	0.4		
79	35	65				
80	25	60	50	0.1		
81	20	40	30	0.1		
82	30	40	40	0.1		
83	20	35	90			
84	40	50	65			
85	30	20	30	0.1		
86	30	60	40	0.2		
87	30	30				
88	35	60				
89	20	20				
90	45	45				
91	30	35	80			
92	40	50	50	0.2		
93	30	30	40	0.1		
94	30	60	50			
95	40	50	40			
96	50	45				
97	50	80				
98	20	50				
99	50	40	40	0.2		

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
100	30	70	50	0.3	
101	30	60	50	0.1	
102	30	80	40	0.2	
103	40	40	50	0.2	
104	30	70	40	0.2	
105	40	70			
106	30	70			
107	15	70			
108	20	70	70	0.2	
109	30	40	40	0.1	
111	20	20			
112	30	50	55		
113	20	35	35		
114	30	45	70		
115	25	70	60	0.2	
116	30	50	40	0.2	
117	15	35	55		
118	20	30	75		
119	40	20	65		
120	50	45	40		
121	30	50	40	0.1	
122	40	40	50	0.2	
123	30	45	50	0.2	
124	30	50	50	0.2	
125	30	50			
126	40	110			
127	20	40	70	0.2	
128	40	40	50	0.1	
129	20	20			
130	30	35	45		
131	40	55	60		
132	20	50			
133	30	25	80		
134	40	50	50	0.1	
135	40	40	60	0.1	
136	20	40	60	0.2	
137	30	40	80	0.2	
138	40	80			
139	40	65			
140	50	60			
141					
142	30	90			
143	10	50	70	0.1	
144	20	30			
145	25	50	50	0.2	
146	30	35	60		
147	50	30	60		
148	20	30	80		
149	30	15	30		
150	40	50	40	0.2	
151	30	60	90	0.2	
152	60	80			
153	20	20	50	0.1	
154	40	30	40	0.2	
155	30	60			
156	30	35			
157	40	40	40	0.2	
158	25	40	70	0.2	
159	15	40	60	0.1	
160	20	80			
161	20	30			
162	20	40	60	0.2	
163	40	50	50	0.3	
164	30	40	50	0.2	
165	30	30	50	0.2	
166	25	50	40	0.2	

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢 穴
167	40	60			
168	40	80			
169	20	30			
170	30	45	30		
171	15	31			
172	10	30			
173	25	80	70	0.1	
174	30	50	50	0.2	
175	30	50	60	0.2	
176	25	40	60	0.2	
177	40	60	30	0.2	
178	30	55	65	0.5	
179	30	15	20	0.1	
180	30	60	40	0.2	
181	45	50			
182	35	40			
183	45	70	50	0.1	
184	30	60			
185	30	30	60	0.1	
186	40	50	50	0.1	
187	25	70	30	0.2	
188	20	40	60	0.2	
189	30	50	40	0.1	
190	30	50	60	0.3	
191	20	30	60	0.1	
192	30	30			
193	70	85	115	1.2	
194	20	80	60		
195	20	20	50	0.1	
196	25	35	30	0.1	
197	20	30	30	0.1	
198	30	40	50	0.2	
199	30	60	50	0.2	
200	40	50	50	0.2	
201	20	30			
202	30	70			
203	35	35	60		
204	60	80	90	0.2	
205	25	40	30	0.1	
206	20	30	70	0.2	
207	30	30	60	0.1	
208	35	40			
209	35	60			
210	80	60			
211	60	105	65	0.5	
212	20	30	40	0.1	
213	50	30			
214	25	30			
215	30	30	60	0.1	
216	40	40			
217	30	60			
218	50	40			
219	50	60			
220	65	130	60		
221	25	20			
222	30	25			
223	50	55	60	0.2	
224	20	50			
225	50	40			
226	50	40			
227	90	100			
228	20	30			
229	20	30	40		
230	30	40			
231	20	30			
232	25	40			

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
233	50	60				
234	65	95	40	0.5		
235	30	40				
236	40	50				
237	50	60				
238	100	100				
239	45	20				
240	65	130	70	1.0		
241	30	50				
242	30	40				
243	50	50				
244	20	20				
245	15	40				
246	90	60				
247	15	60				
248	15	50				
249	30	70				
250	30	60				
251	20	60				
252	70	150				
253	30	50				
254	35	70	55	0.2		
255	40	50				
256						
257	100	80	25	0.7		
258	30	50				
259	20	20				
260	20	20	40			
261	80	80				
262	45	60				
263	50	70	70	0.3		
264	100	110	105	1.4		
265	85	95				
266	35	100				
267	80	140				
268	50	90				
269	25	50				
270	70	80				
271	40	80				
272	60	80				
273	20	30				
274	40	40				
275	50	90				
276	30	70				
277	20	20				

稲荷曲輪腰石垣No. 7

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	45	50	40	0.1		
2	35	65	60	0.1		
3	25	60	70	0.2		
4	35	65	85	0.2		
5	55	65	65	0.4		
6	30	70	65	0.3		
7	110	125	50	1.2		
8	25	70	90	0.2		
9	110	60	125	1.0		
10	20	25	45			
11	40	25	45			
12	70	100	80	0.9		
13						
14	60	140				
15	40	45				
16	85	75	100			
17	30	60				
18	50	70	55	0.3		

稲荷曲輪腰石垣No. 8

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	60	55	70	0.4		
2	25	65	110	0.3		
3	115	110	50	1.0		
4	85	80	65			
5	55	100	80			
6						
7	65	75	65	0.4		
8	30	55	60	0.1		
9	45	35	70	0.1		
10	35	35	50			
11	55	65	70	0.5		
12	85	125	50	0.7		
13	25	40	55			
14	75	130	35	0.6		
15	70	100	50	0.6		
16	45	30	55	0.1		
17	65	95				
18	40	25	65			
19	35	65				
20	75	130	70	0.8		
21	40	120	60	0.8		
22	55	70	50	0.3		
23	160	160	45	1.7		
24	90	165	70	2.6		
25	110	130	40	0.9		
26	60	70	90	0.4		
27	40	65	85	0.4		
28	95	135	45	0.5		
29	40	95	60	0.2		
30	40	60	60	0.3		
31	25	45	40			
32	35	50	70			
33	25	60	90	0.2		
34	55	90	70	0.2		
35	50	65	60	0.3		
36	40	45	70	0.2		
37	100	80	50	1.0		
38	65	65	65	0.3		
39	50	160	70	0.6		
40	100	80	50	1.0		
41	50	160	70	0.6		
42	50	60	60	0.2		
43	50	40	60	0.3		
44	70	75	70	0.6		
45	30	60				
46	40	70				
47	55	40	70	0.2		
48	60	80	75	0.3		
49	35	50	55	0.1		
50	30	45				
51	55	50				
52	60	50				
53	100	120	40	1.2		
54	60	60	70	0.1		
55	60	220	45	0.9		
56	30	50	75	0.2		
57	110	90	30	0.4		
58	60	75				

稲荷曲輪腰石垣No.10

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
17	125	150	25	1.4		
18	30	40	60	0.2		
19	70	90	70	0.8		

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
20	10	40	60	0.2		
21	30	45	50			
22	40	70	90	0.4		
23	50	80	80	0.6		
24	40	40	70	0.2		
25	30	30	35			
26	20	30	90	0.3		
27	40	55	70	0.2		
28	30	55	70	0.2		
29	55	70	95	0.1		
30						
31	15	55	55			
32	35	100	100	0.4		
33	90	90	30	0.5		
34	20	30	60	0.1		
35	30	40	60	0.3		
36	30	40	60	0.3		
37	40	60	70	0.4		
38	40	50	80	0.2		
39	30	40	55			
40	35	80	75	0.3		
41	60	40	100	0.3		
42	30	75	60	0.2		
43	35	70	60	0.3		
44	40	60	90	0.6		
45						
46	30	30	50			
47	40	55	65	0.2		
48	20	60	50	0.2		
49	45	55	65	0.2		
50	30	50	50	0.1		
51	30	30	70	0.1		
52	50	50	70	0.4		
53	30	40	90	0.2		
54	40	80	60	0.4		
55						
56	20	40	25			
57	25	60	70	0.4		
58	50	130	45			
59	30	40	90	0.2		
61	100	120	50	1.0		
62	15	25	40			
63						
64	30	65	75	0.2		
65	35	50	60	0.4		
66	40	80	60	0.4		
67	40	65	110	0.6		
68	55	75	30	0.3		
69	40	60	70	0.3		
70	40	40	60	0.3		
71	55	50	30	0.3		
72	25	40	75	0.1		
73	30	50	65	0.2		
74	35	75	60	0.2		
75	30	60	40	0.2		
76	50	60	70	0.2		
77	25	35	30	0.1		
78	110	110	30	0.8		
79	30	60	60	0.2		
80	25	50	50			
81						
82						
83						
84	50	90	25	0.3		
85	30	80	50	0.3		
86	30	20	90	0.2		

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
87	30	40	60	0.2		
88	35	50	50			
89	30	60	20	0.2		
90	30	40	60	0.2		
91	30	70	40	0.2		

稲荷曲輪腰石垣No.12

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	35	55				
2	70	110				
3	60	70				
4	45	40				
5						
6	170	180				
7	40	55				
8	65	70				
9	40	80	60	0.3		
10	60	50	50	0.3		
11	40	50	60	0.2		
12	90	80	90	0.9		
13	45	55	35			
14	70	90	50	0.6		
15	30	40				
16	60	100	50	0.5		
17	30	70	80	0.3		
18	50	60	65			
19	40	80				
20	35	40				
21	50	25				
22	45	50				
23	30	80				
24	30	100				
25	30	50	110	0.5		
26	115	110	40	1.4		
27	50	70	60	0.4		
28	120	120	90	1.6		
29	70	70	90	0.8		
30	110	160	40	1.7		
31	25	65	130	0.9		
32	30	25	65	0.1		
33	30	55	90	0.3		
34	35	45	60	0.2		
35	25	40				
36	80	130、				
37	20	50	60			
38	30	30	65	0.1		
39	30	70	80	0.3		
40	55	140	40	0.6		
41	25	50	60			
42	20	50	40			
43	25	30	50			
44	60	170				

稲荷曲輪腰石垣No.13

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	35	55	80	0.2		
2	95	70	40	0.6		
3	30	60	50	0.2		
4	25	20	40			
5	40	70	80	0.4		
6	50	90	80	0.3		
7	40	40	65	0.6		
8	40	60	75	0.3		
9	40	40	80	0.3		
10	30	50	70	0.2		
11	25	30	80	0.2		

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
12	45	110	85	0.4		
13	30	30	40			
14	20	50	40	0.1		
15	30	110	50	0.1		
16	30	50	60	0.1		
17	50	70	30	0.2		
18	20	35	55			
19	40	70	80	0.3		
20	35	30	80	0.1		
21	140	120				
22	30	30	80	0.1		
23	25	70	80	0.3		
24	50	60	60	0.3		
25	30	55	55	0.1		
26	30	30				
27	40	70	70	0.3		
28	70	130	50	1.1		

稲荷曲輪腰石垣No.14

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	40	70	50			
2	100	35	70			
3	40	45	80			
4	65	60	70			
5	50	80	65			
6	50	80	70			
7	40	70	95			
8	30	70				
9	40	50	70	0.3		
10	30	45	60	0.1		
11	30	40	60	0.1		
12	20	25	40			
13	90	100	50	0.1		
14	50	65				
15	30	70				
16	30	25				
18	25	85				
19	30	20				
20	125	125				
21	60	65				
22	25	30				
23	35	70				
24	75	140				
25	35	100				
26	20	30				
27	105	100				
28	40	30				
29	100	110				

稲荷曲輪腰石垣No.17

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	105	95	70	1.5		
2	60	70	40	0.2		
3						
4	50	110	50	0.6		
5	70	90	70	1.0		
6	80	120	60	0.7		
7						
8						
9	100	130	40	0.9		

稲荷曲輪腰石垣No. 2

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
32	65	130	80			
33	80	100	110			
34	90	140	65			

稲荷曲輪腰石垣No. 3

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
1	105	85	120			
2	85	105	105			
3	70	100	130			

稲荷曲輪腰石垣No.10

番号	面(縦)	面(横)	控え	重量	矢	穴
60	100	120	50	0.6		

第5章 出土遺物

本年度調査した本丸・鉄門南西下・稲荷櫓台から出土した遺物は、金箔瓦・天目茶碗を中心とした陶磁器・土質土器などであるが、現段階で接合し実測可能な遺物についてその概要を述べる。

1) 金箔瓦

第32図のNo 1 は銅門南にある石切り跡の穴から出土した大型の鯨瓦である。金箔は確認できないが一部に朱漆が認められる破片で縦25.5、横18.5、厚さ6.4cmを測る。部位は顔面の裏側の円形の段の上部である。過去の調査で出土した鯨瓦の鱗の幅は2cm、胴部の厚さは3cm前後であるが、鱗の幅は約6cm、厚さ7cmを測るこの破片から推定できる鯨瓦の高さは2m前後となろう。No 2 も銅門の南でNo 1 より更に南から出土した金箔が施された鯨瓦の胴部破片である。胴部の直径は20cm、鱗の大きさは縦3、横2cmを測る。第33図のNo 3 は本丸中央部の地下2mの瓦溜めから出土した鬼板瓦の縁の左上のコーナー部分の破片である。No 4 は本丸中央部の瓦溜めから出土した鬼板瓦の右下の破片である。No 5 は本丸中央部瓦溜めから出土した雲形の金箔飾り瓦で、全面に金箔が施されている。No 6 は本丸中央部瓦溜め出土の鬼面瓦、あるいは鯨瓦の小鼻か唇の破片である。No 7 は本丸出土の鬼面瓦か鯨瓦の唇か小鼻の破片である。No 8 は本丸で出土した飾り瓦の一部の破片である。形状は棒状で、朱漆が施されている。No 9 は本丸瓦溜めから出土した鬼面瓦の顔面の一部で、朱漆が認められる。No10は本丸瓦溜めから出土した金箔が施された飾り板の左上部の破片である。破片左上には飾りが剥離した痕跡があり、中央部には花びらとも考えられる粘土板が張り付けられている。No11は本丸出土の金箔が施された飾り瓦の破片である。破片下に突起が一つ認められる。No12は本丸出土の飾り瓦に付けられた花びらの一部で、金箔が花びら内部に施されている。No13は本丸出土の鬼瓦の唇部分の破片で、朱漆が認められる。No14はNo 9 と同様な部位の破片で、朱漆が認められる。No15は、No12より小型の花びらの一部で、金箔が施されている。No16は朱漆が全面に施された瓦であるが、部位は不明である。No17も本丸地下に設けられた瓦溜めから出土した鯨瓦あるいは鬼面瓦の唇か小鼻の左側の破片である。No18は、鯨瓦の鱗の破片であろうが朱漆が認められる。第34図のNo19は鉄門西下の石垣裏栗石下から出土した金箔桐紋飾り板瓦で、幅18cmを測る。桐紋の左上の花と推定でき、この花の左右に釘穴が2個あるため、この板瓦を横に3枚、縦に2枚の合計6枚で桐紋全体を表現していたと考えられる。No20もNo19と同様な飾り板瓦であるが、幅は16cmを測る。No21も同様な家紋板瓦の破片で、部位は右上に位置する板瓦の右上の花の破片である。No22は同様な家紋瓦の左上破片である。No23は鉄門西下出土の鯨瓦の破片である。No24は金箔瓦の破片で、植物の葉を表現したものである。No25は鉄門西下から出土した雲形の金箔飾り瓦の破片である。No26は本丸出土の鳥衾で金箔が施されている。No27は銅門南から出土した鬼面瓦の下顎付近の破片である。No28は違い鷹羽家紋鬼瓦で、稲荷曲輪櫓台石垣下から出土した。No29は銅門南出土の鬼瓦の左上の破片である。No30は稲荷曲輪櫓台石垣下出土の違い鷹羽家紋を表した鬼板瓦である。No31は銅門南出土の板碑の破片である。

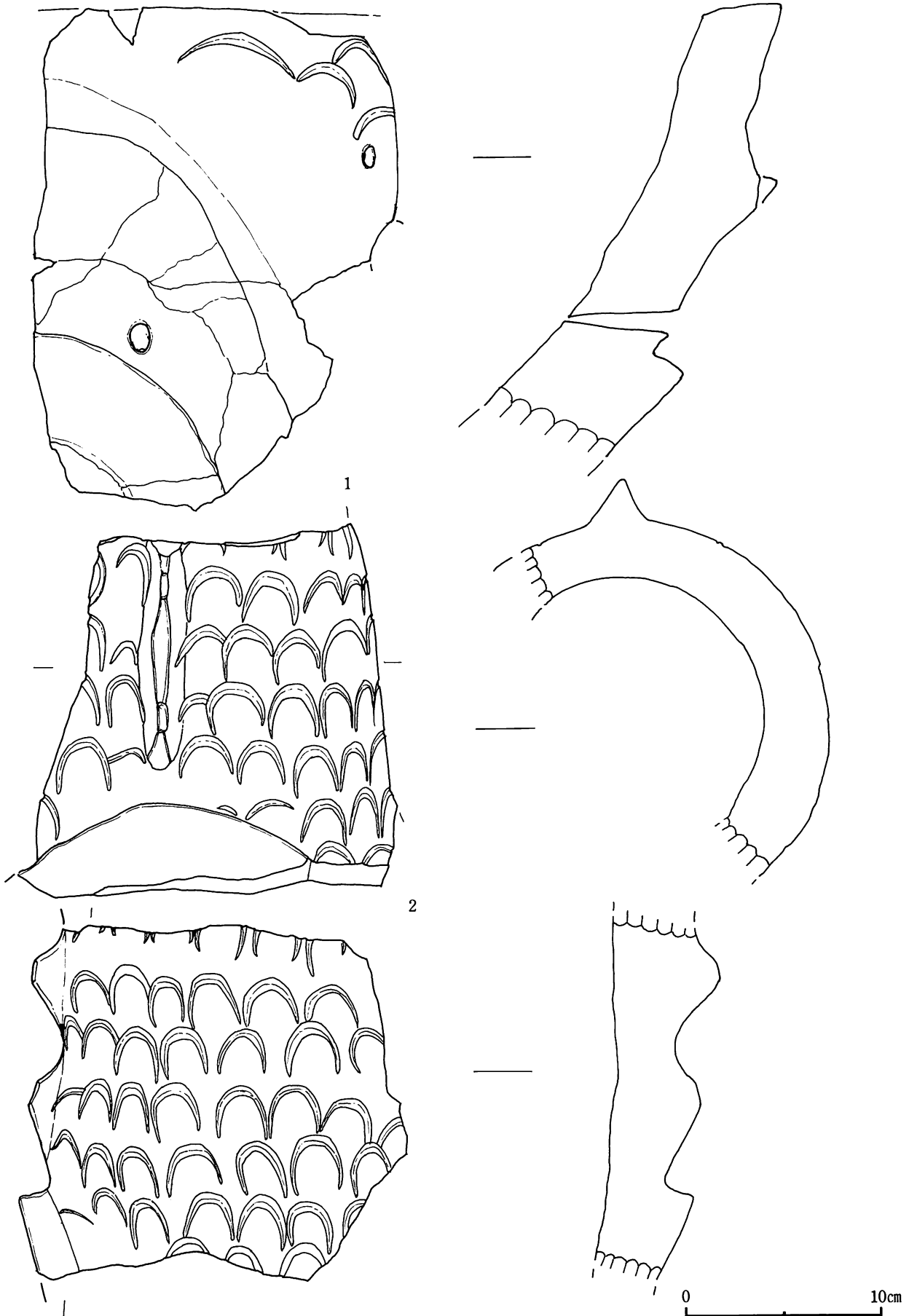
2) 陶磁器

第35図No32は本丸出土の口径12cmを測る瀬戸の天目茶碗で、高台部分を欠く。No33は本丸出土の口唇部を欠く瀬戸の天目茶碗で、口径12、底径4.4、器高5.8cmを測る。釉薬は胴部下半まで施され、その下の露地に薄い錆が塗られている。No34は本丸出土の瀬戸の天目茶碗で、口径12cmを測る。No35は、本丸出土の瀬戸の天目茶碗で、釉薬の発色は光沢を持った黒色で、胴部下半は白色の露地である。口径12、底径5、器高5.5cmを測る。No37は本丸出土の瀬戸の天目茶碗で、口径11.8cmを測る。No38は本丸出土の瀬戸の天目茶碗で、口径12.4cmを測る。No39は天目茶碗の口唇部破片で、口径13cmを測る。No40は本丸出土の天目茶碗の口縁部から胴部までの破片で、口径11.8cmを測る。No41は本丸出土の瀬戸の天目茶碗の口唇部破片で、口径10.6cmを測る。No44は本丸出土の天目茶碗の高台破片で、底径5cmを測る。No45は本丸出土の灰釉の碗の底部破片で底径5cmを測る。

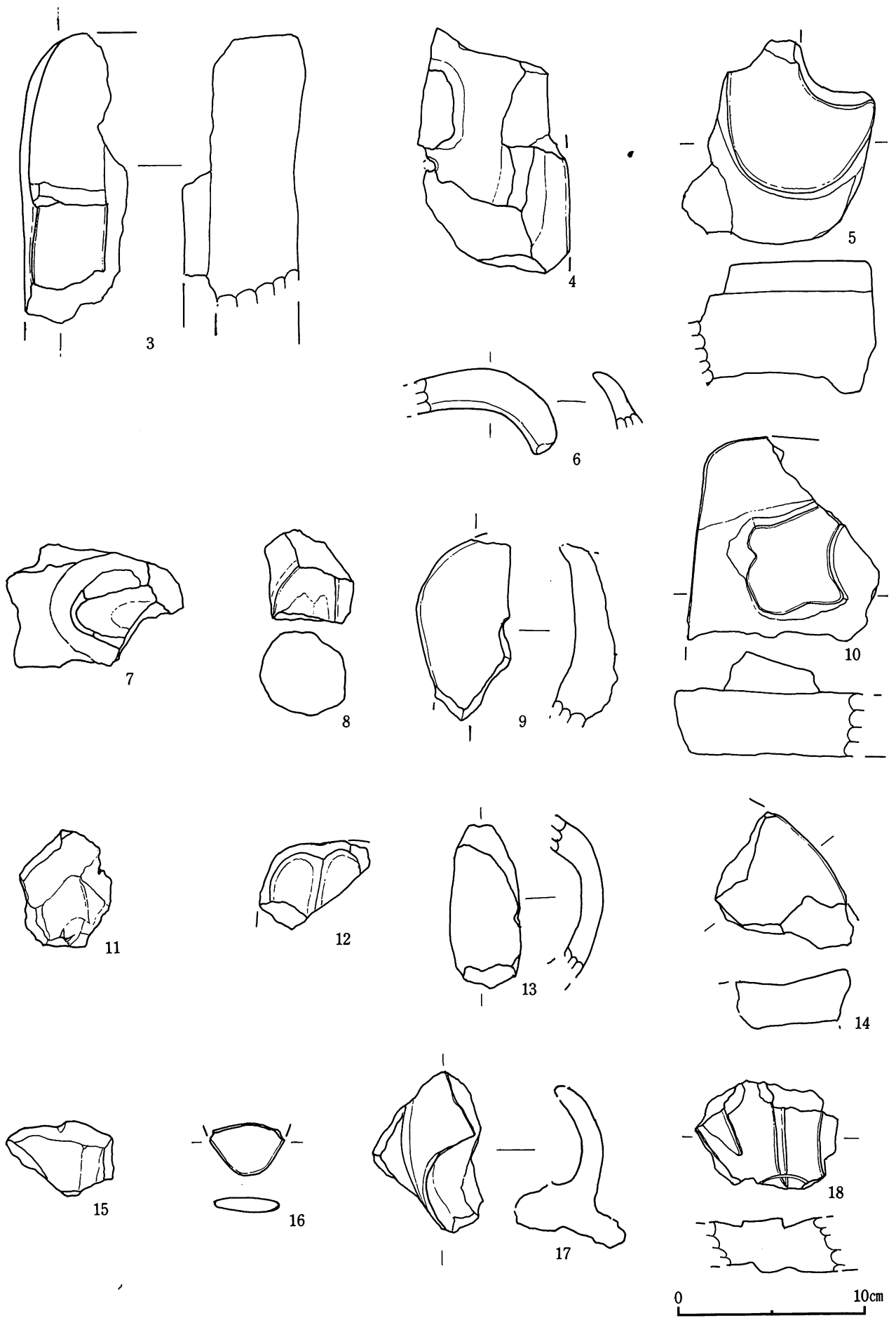
No46は本丸出土の天目茶碗胴部下から高台上部付近の破片である。No47は瀬戸の灰釉皿で口径12.6、底径6.5、器高2.5cmを測る。No49は瀬戸の灰釉の丸皿で口径9、底径5.3、器高2cmを測る。No50は本丸出土の瀬戸の灰釉丸皿で口径9.6、底径6、器高1.7cmを測る。No51は古墳時代の須恵器壺の肩付近の破片であるが、このような遺物が盛土中から出土することは、一条小山が客土用の土取り場に古墳時代の遺跡があったことを物語っている。No52は瀬戸の鉄釉茶入れで、肩には突起があり底部は糸切痕が残り底径5.2cmを測る。No53は、本丸出土の鉄釉茶入れの口縁部破片で、口径3.7cmを測る。No54は本丸中央部の客土中より出土した内耳土器の口縁部破片で、口径25.6cmを測る。No55は本丸出土の鉄釉茶入れの底部破片で底径2.8cmを測る。No56は本丸出土の鉄釉茶入れの底部破片で、底径3.2cmを測る。No57は本丸から出土した江戸後期の灰釉鉢の口縁部破片で、口径26.5cmを測る。No58は本丸から出土した灰釉碗の底部付近の破片で、底径5.5cmを測る。No59は本丸出土の鉄釉鉢の口縁部破片で、口径35.2cmを測る。

3) 土師質土器

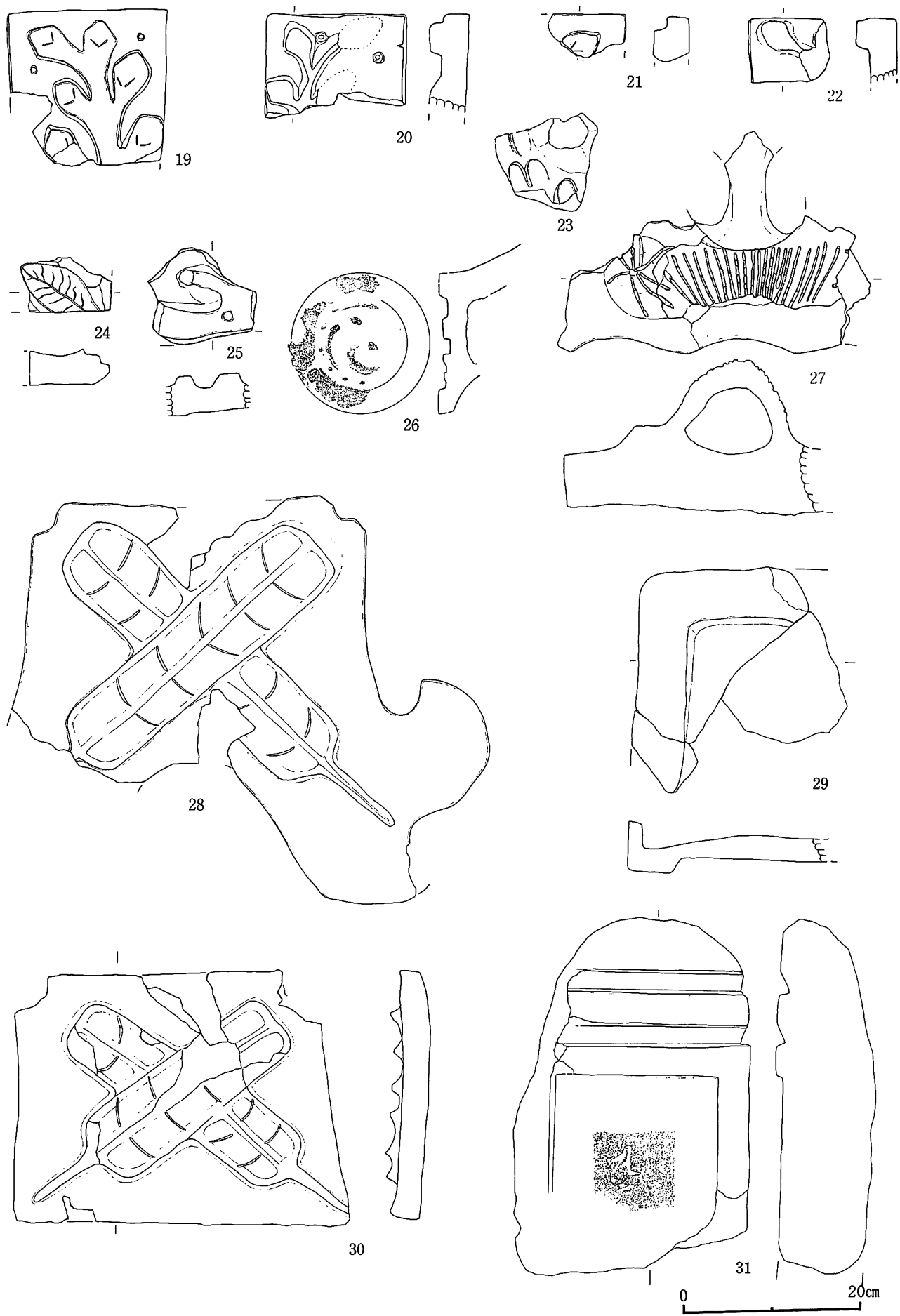
第36図は土師質土器の実測図である。口径から分類すると、12cm前後を測るもの、10cm前後を測るもの、8cm前後を測るものに大別できる。底部からの立ち上がりに着目すると、No60・67・69・84のように、胴部の中段付近に比較して立ち上がりのコーナー部分が厚くなるもの、口唇部が厚くなるもの、胴部に比較して薄くなるものなどが見られる。No60は口径12.6、底径7、器高2.5cmを測る。No61は口径13、底径8、器高2.4cmを測り、外面にススの付着が認められる。No62は本丸から出土し、口径12、底径6.8、器高3cmを測る。No63は本丸出土の口縁部破片で口径11.6cmを測る。No64は口径10.4、底径5.5、器高2.6cmを測る。No65は口径10.8cmを測る。No66は本丸から出土した口縁部破片で口径11.4cmを測る。No67は本丸出土の口縁部から底部までの破片で口径11、底径5.5、器高2.6cmを測る。No68は口径11.2cmを測る口縁部破片である。No69は本丸出土の口縁部から底部までの破片で口径9.8、底径5、器高2cmを測る。No70は本丸出土の口縁部から底部までの破片で口径10.2、底径5.6、器高2.1cmを測る。No71は立ち上がりがきつく口縁部が内湾し、口径9.8、底径7.1、器高2cmを測る。No72は本丸出土の口唇部は厚くなり若干外に反る口縁部破片で、口径10cmを測る。No73は本丸出土の口縁部から底部までの破片で口縁部付近で内湾して口径10.5、底径5.5、器高2.2cmを測る。No74は立ち上がりがきつい本丸出土の口縁部破片で口径11cmを測る。No75は本丸出土の口縁部破片で口径9.8cmを測る。No76は本丸から出土した底部から胴部への立ち上がり付近が厚くなる口縁部から底径までの破片で口径9.8、底径5、器高2.2cmを測る。No77は立ち上がりがきつい本丸出土の口縁部破片で、口径9.8cmを測る。No78は本丸出土の口縁部破片で口径9.8cmを測る。No79は本丸出土の口縁部から底部までの破片で口径8.8、底径4.8、器高2cmを測る。No80は本丸出土の立ち上がりがきつい口縁部破片で口径9.6cmを測る。No81は本丸出土の厚い口縁部から底部までの破片で口径7、底径4.8、器高1.5cmを測る。No82は本丸出土の口縁部が厚い破片で口径7.8cmを測る。No83は本丸出土の口縁部が内湾する口縁部から底部にかけての破片で口径8、底径5、器高1.6cmを測る。No84は本丸出土の底部から胴部への立ち上がり付近が厚くなる口縁部から底径までの破片で口径7.8、底径4.8、器高1.7cmを測る。No85は本丸出土の口縁部から底部までの破片で口径6.5、底径3.5、器高1.8cmを測る。No86は本丸出土の底部から胴部への立ち上がり付近が厚くなる口縁部から底部までの破片で口径6.4、底径3.8、器高1.2cmを測る。No87は極めて浅い皿で口径7.1、底径5.2、器高0.9cmを測る。No88は胴部中位が厚くなり口縁部が外に反る口縁部から口径7.7、底径4、器高2.2cmを測り口唇部にススの付着が認められる。



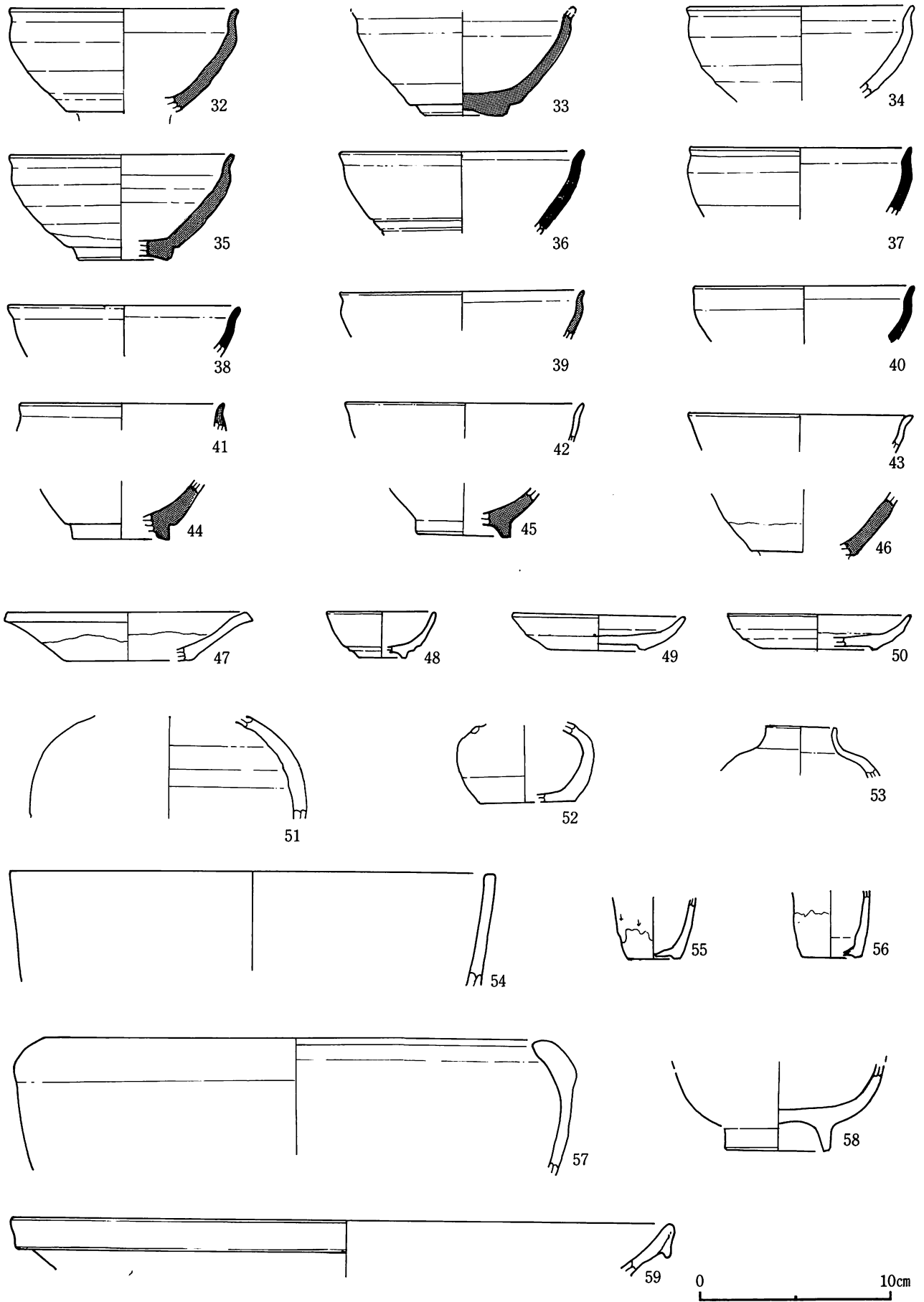
第32図 鯨瓦実測図



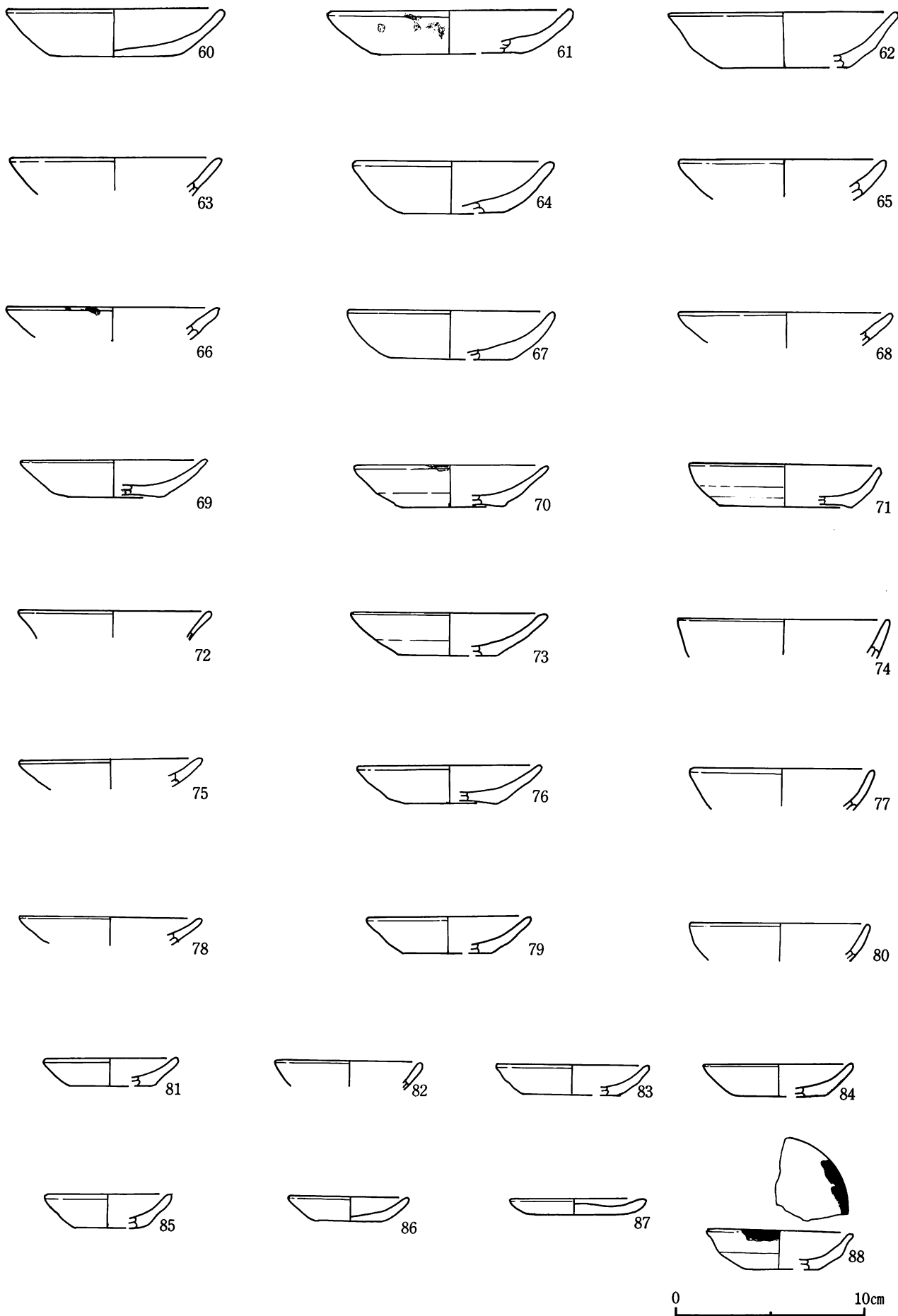
第33图 鬼瓦実測図



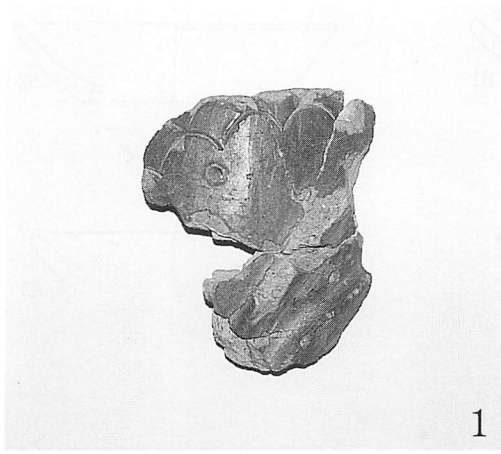
第34図 飾瓦・石造物実測図



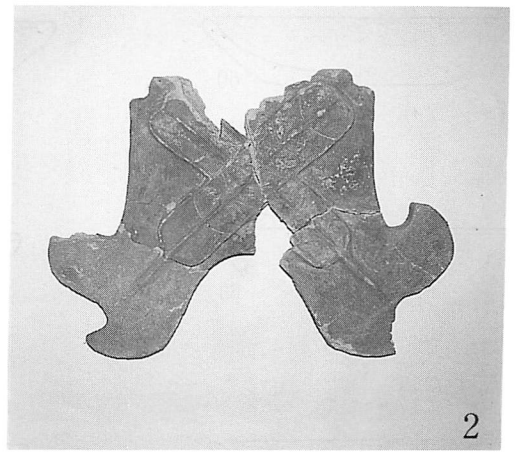
第35图 陶磁器实测图



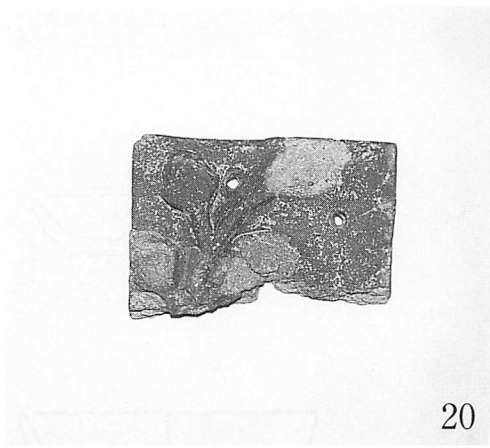
第36図 土師質土器実測図



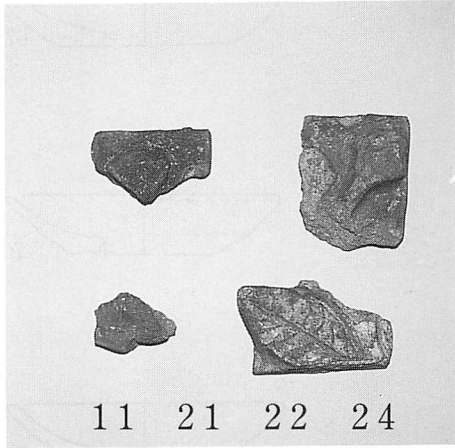
1



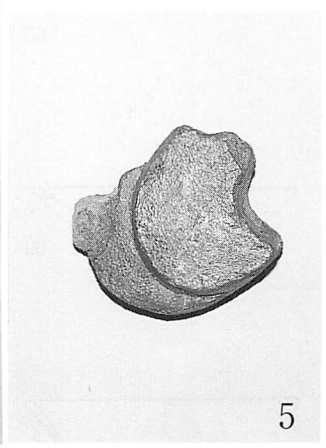
2



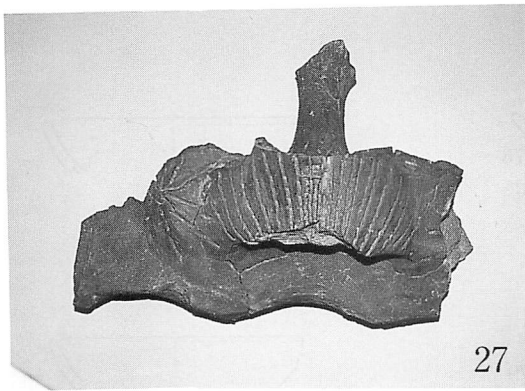
20



11 21 22 24



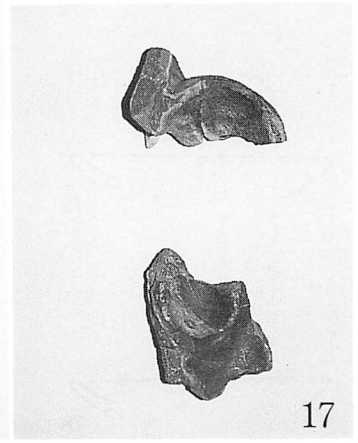
5



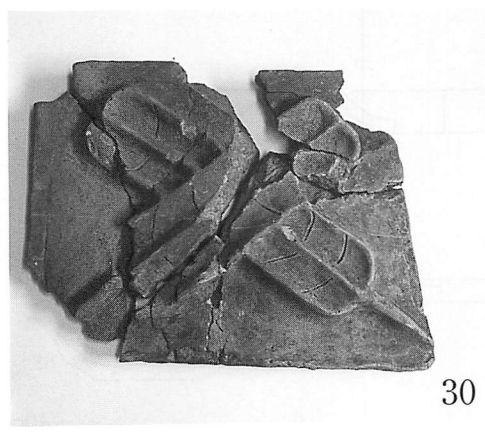
27



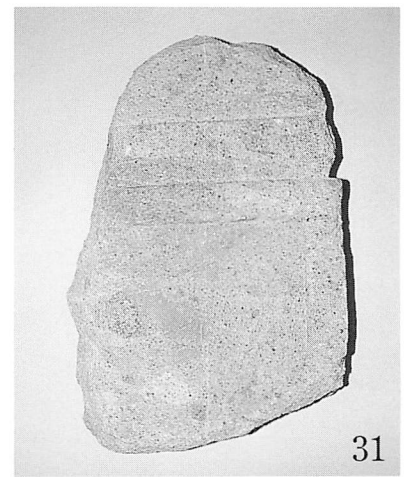
26



17

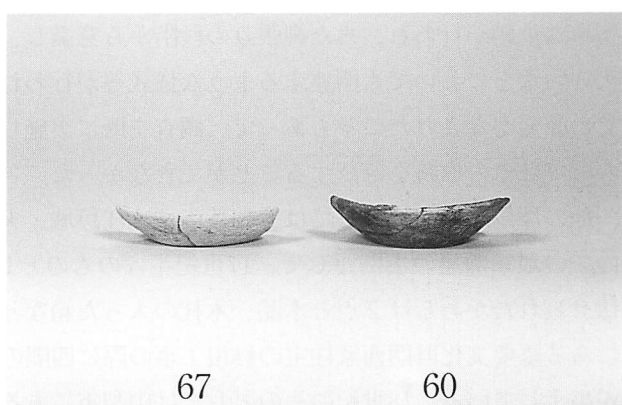
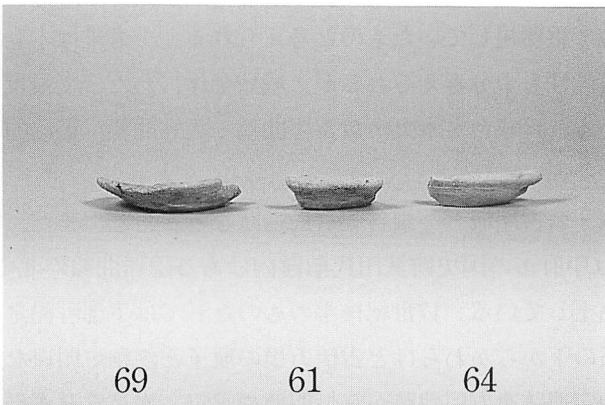
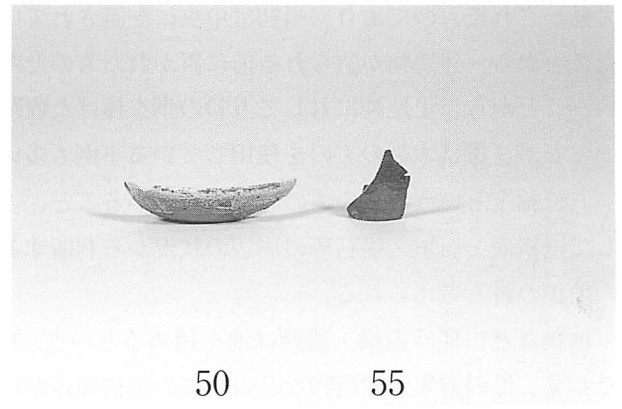
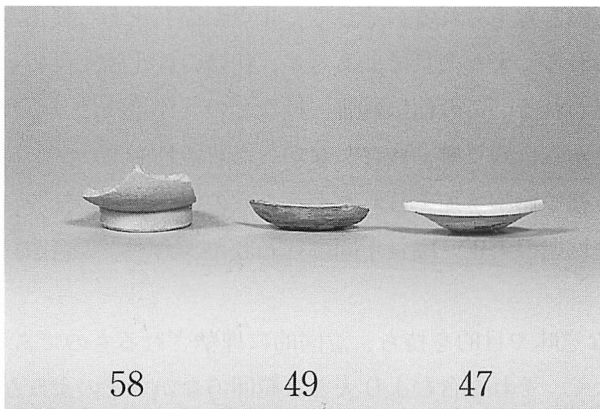
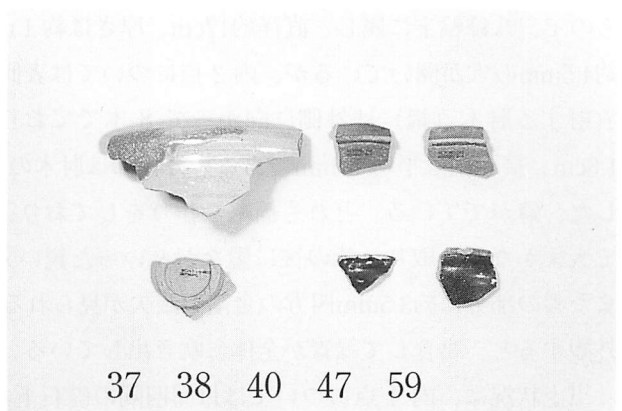
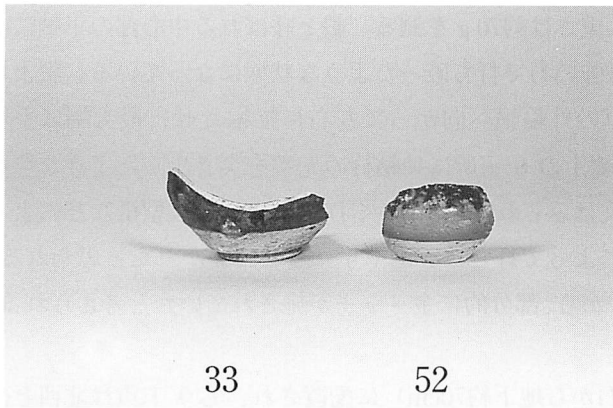
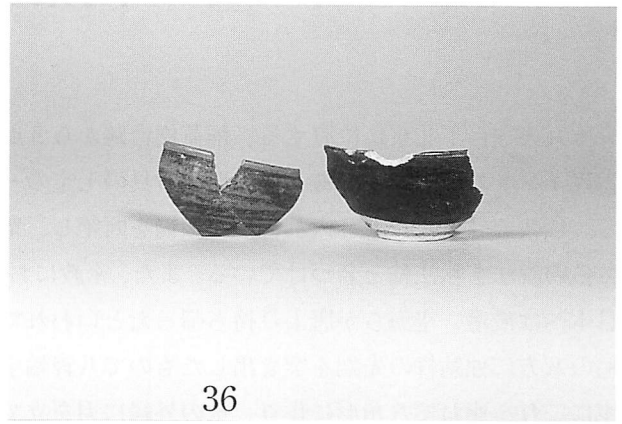


30



31

第37图 金箔飾瓦



第38図 陶磁器・土師質土器・板碑

第6章 山梨県内出土の地鎮具

降 矢 哲 男

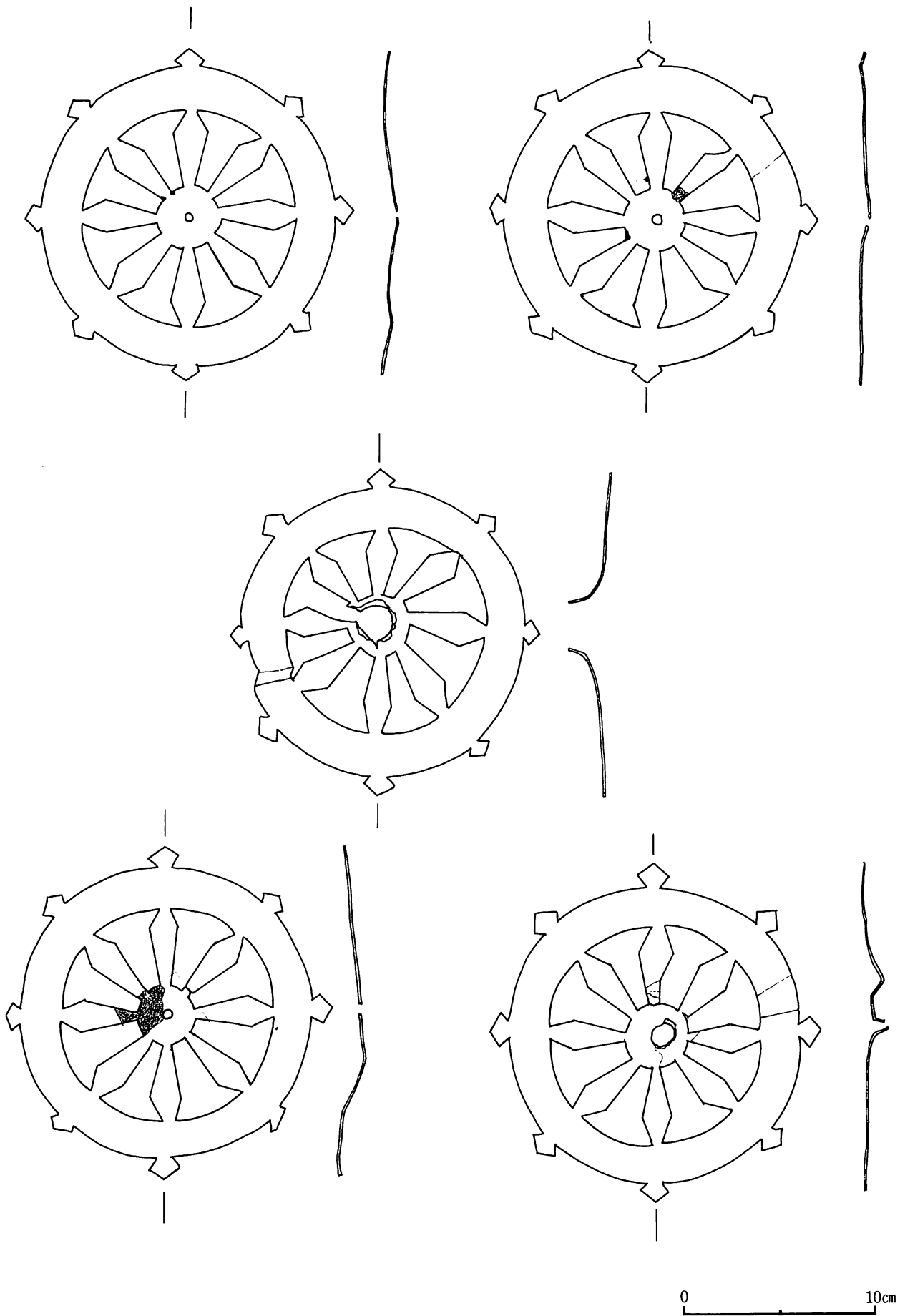
本丸天守台下北東に位置する、稻荷櫓台跡から5点の輪宝が出土した。輪宝は梵語でチャクラと言い、本来は古代インドの理想的王である転輪聖王所具の七宝の一つであり、聖王の軍に前行して敵を打ち破る徳を有している。仏教ではこれを取り入れ、仏が煩惱を断絶し、衆生に法を説いてその迷妄を摧破する徳に擬するとし、よって仏の説法を転法輪と名づけている。また、密教においては煩惱を敵とみて、煩惱を仏の説法にたとえて用いた。日本へは最澄、空海らが唐より持ち帰ったといわれている。形式としては、大きく分けて二つあり、一つには外輪の八方に独鈷杵の先端を突き出したもので八鋒輪宝または八輻輪宝と呼ぶ、もう一つには独立した股先をださずにこれを連ねて八角形に作り、その外縁に刃を立てたもので八角輪宝と呼ぶものがある。このほかにも三鈷輪宝、八鋒八角折衷式輪宝といったものもみられる。甲府城出土の輪宝は、いずれも銅板を打ち抜いてつくられたもので、八鋒輪宝に属し、直径約17cm、厚さは約1mm、重さは約70gを測る。轂と呼ばれる中心部の車軸には約4.5mmの穴が開いているが、内2点については表側から強い力で打ち破ったような状態になっている。轂より放射する肘木（輻）は外側に向かって8本でており、車の外輪輞へ向かって左右に拡幅させ、最大幅は平均1.6cm、最小幅は平均5mmである。外縁部は肘木の延長線上の8ヵ所に独鈷杵の先端を突き出したような形をした、鋒がでている。どれも簡略な作りをしており、施文はみられない。「つくり」については型紙などによって大まかな型を取り、その後には鑿などといった鋭い刃物によって打ち抜き、やすりなどで磨かれたと思われる。また轂の部分に約3.5mm四方の金箔の残欠が見られることから、部分的に金メッキが施されていたと考えられる。外観すると、腐食して緑青が全体に吹き出している。

出土状況は、内4点については母屋四隅の礎石下（縁石から地下約70cm）に配置され、もう1点は北西と南西の輪宝の間、礎石上辺りにもう一つが配置されていたが、これは後に移植された木の成長のためなどによって動かされたものであり、当初は中央に配置されていたものと考えられる。そして、4点が礎石下から検出されたことから、建造物が造られる前に置かれたものと考えられる。また微量ではあるが、粃穀の炭化物が付着していたことから、土地神に対して五穀の粥を捧げた痕跡と思われる。この他に賢瓶・楯などの共伴遺物はみられなかったが、楯は木製のものを使用している事例も多いことから、残り難く残存しなかった可能性も高い。

八鋒輪宝という形式のものを使用していること、上から強い衝撃を加えられたような穴の痕、粃穀の付着、そして遺構面・石垣・礎石等の周辺の状況から判断すると築城期の天正～慶長年間に行われた、台密（天台宗）系の地鎮の跡と考えられる。

地鎮などに伴う遺構・遺物は地を鎮めるといって、明確な意味や目的を持ち、意図的に埋納されるものである。そして、その対象が建造物などの一部の遺構周辺だけでなく、それを含むより大きな範囲のなかでどのような位置において行うのか、表鬼門（北東）・裏鬼門（南西）・中央などのどこで行うのかといったことも非常に重んじている。このようなことから、稻荷櫓台は内城全体からみて表鬼門の方角にあたっているために、このような丁寧な地鎮が行われ、また縄張りの段階から意識し、そして重要視していたものと考えられる。一方では本丸や天守台などにおいても関連するような儀式等が行われた可能性も十分考えられるが、城域全体にわたって後世多くの改変がなされたこともあって、調査を既に実施している、天守台・本丸・数寄屋曲輪・天守曲輪・鍛冶曲輪などではその痕跡を確認することができなかった。

他の城館跡での例としては、和歌山城・江戸城・大坂城・名古屋城・一乗谷朝倉氏遺跡などがある。また、県内での地鎮関連の事例として、17世紀半ばのものとしては甲府市の国史跡武田氏館跡内にある隠居曲輪の北で、伏せられたかわらけ2点と水晶、木札の入った箱などが出土している。17世紀後半のものとしては下部町湯之奥にある重要文化財門西家住宅の修復工事の際に四隅の礎石の下からかわらけと古伊万里の瓶子と鉄釉灯明皿などが出土している。18世紀のものとしては山梨市にある県指定遺跡連方屋敷跡から灯明皿や呪符、水晶などが出土している。



第39图 轮宝实测图

第7章 石垣調査検討会

1 前年度までの経過

石垣解体調査は本年度で7年目である。報告書6で述べたように、石垣調査の方法については、明確な手法が存在していないため、関係者が一堂に会して検討を進める必要がある。そのため、昨年度に東日本の事例を中心に第1回石垣調査検討会を開催した。内容は、

- 1) 盛岡城の調査を進めている盛岡市教育委員会の室野香文さんに、盛岡城の石垣修復工事に伴う調査で、石垣の裏栗石を押さえる簡単な石積みが盛土との境にあることが確認されたことを発表していただいた。この調査は、石垣解体工事と並行して裏盛土中の発掘調査の必要性を示すこととなった。
- 2) 太田金山城の発掘調査を担当している太田市教育委員会の宮田毅さんに、戦国時代の山城である太田金山城の石垣の根石が石垣面より外側に据えられていることと、石垣に裏栗石がなく、代わりに粘土質と小石の突き固めたものが石垣の裏側に存在する戦国時代の石垣について発表していただいた。この発表で石垣には戦国時代と近世とでは構造が異なることと、根石の地盤確認調査の必要性もあることが明らかになった。
- 3) 八王子城の発掘調査を担当された八王子市教育委員会の進藤康夫さんに、大正18年に落城した国史跡八王子城の整備事業に伴う発掘調査で、高さ3 m前後の石垣が3段に積まれていることと裏栗石がなく太田金山城の石垣の裏構造と同様であることを発表していただいた。このことから、東国の戦国時代末期の石垣構造をある程度推定することができた。
- 4) 松代城の調査担当である長野市教育委員会の前島卓さんに、甲府城と同時期に築かれた近世城郭である松代城の整備事業に伴う発掘調査の成果と石垣の特徴について発表していただいた。この発表では、本丸以外の遺構の様子や、気象条件による石垣破損の進み具合が指摘された。
- 5) 甲府城では、裏石垣は石垣を積む作業が盛土作業より先行した場合に構築されるものであろうこと、また地中石垣は盛土作業の工法の一つか作業範囲の仕切りであろうことを、本丸と天守曲輪の事例を通して発表した。また、整備事業と発掘調査との連携の実態について、また調査検討委員会の必要性も併せて説明した。

2 今年度の概要

このような成果を踏まえ、今年度は石垣調査方法及び城郭整備事業の問題点について関係者に発表していただいた。

- 1) 佐賀県教育委員会から特別史跡肥前名護屋城の調査と整備を担当している宮武さんに「肥前名護屋城及び北九州地方の城郭石垣」について、その分析方法まで発表していただいた。この中で石材調査データ（控えと面の大きさ）とをグラフに表すことで、各石垣面の特徴の把握する方法を説明していただいた。また、城郭における石垣の使用は、曲輪の重要性などにより石垣を全体に設ける場合とそうでない場合があること、在地の石垣構築技術も存在していたこと、また周辺地域の城郭石垣についても比較材料として調査を進める必要性を述べていただいた。
- 2) 吉川氏館跡を中心に広島県の石垣を考古学と文献から研究を進めている広島県教育委員会の木村さんは「穴太積み」あるいは「穴太衆」の呼称は「近江の穴太と限定された固有名詞ではなく、中世の石工を穴太と呼んだのであり、穴太という地名は各地にある」と述べ、従来の城石垣技術の発展説に異説をとる発表をしていただいた。在地の石積技術は中世を通じて存在していたことを明らかにした点は注目すべきで、宮武氏の在地技術及び周辺城郭石垣の調査の必要性と関連する指摘である。
- 3) 月山富田城の整備と調査を担当している鳥取県広瀬町の竹中氏には、山城の石垣調査及び整備の問題点について発表していただいた。尼子氏の場合は、盛土より地山の削り出しによって曲輪を構築する機会が多いこと、発掘調査及び完全復元は地形に制約される事の多い山城では、著しく困難であり、歴史景観の復元には安全性と利便性も忘れてはならない問題であることを確認できた。

北部九州の近世初期城郭石垣をめぐる諸問題

— 肥前名護屋城跡を中心に —

佐賀県立名護屋城博物館 宮 武 正 登

1. 問題の所在

(1) 城郭石垣に関する研究動向

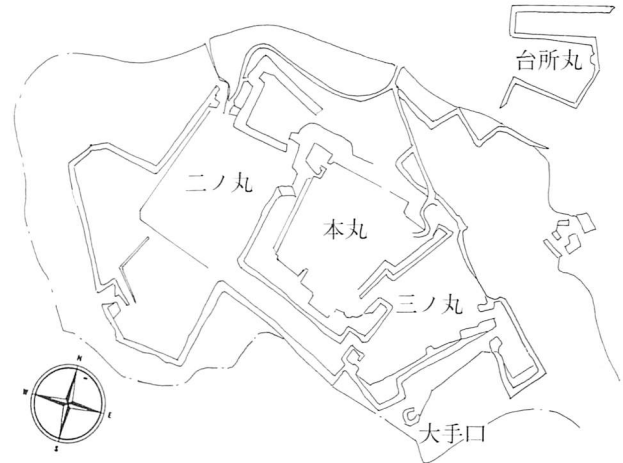
- ①石垣形状分析・構造論
 - ・・・石垣構造技法の追求と類型化
- ②石垣機能論
 - ・・・石垣使用法の追求と築城主体の意図の考察
- ③その他
 - ・・・石垣技術系譜論（石工集団の動向と存在形態）

(2) 名護屋城石垣の素材として

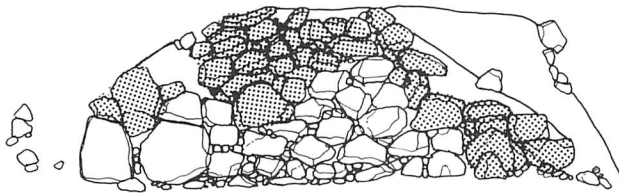
- ①の視点より→工法の具体的内容の追求
 - ・使用石材の規格化の問題
 - ・土木工法上の特性（曲輪造成工法上の特性）
- ②の視点より→城郭部位での使用形態
 - ・意匠的要素の発生と定着
 - ・構成石材の加工度の偏差、巨石の使用
 - ・石垣構築箇所の遍在性の意味

2. 中世城郭から近世城郭への変化の中での石垣の使用形態

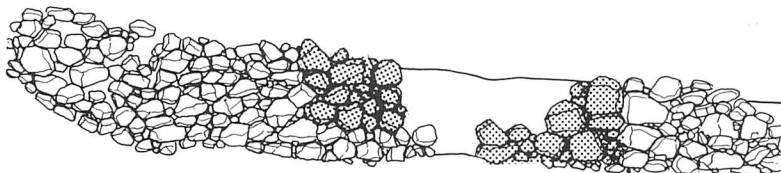
- (1) 原城・・・本丸のみ総石垣（文禄～慶長年間前半か）
- (2) 梶谷城・・・本丸のみ総石垣（文禄～慶長初頭か）
在地系技法の石垣と近畿系技法の石垣が混在
- (3) 清水山城・・・二ノ丸、三ノ丸南東端での近畿系石積み技法（文禄年間）の駆使（本丸未改修）
- (4) 角牟礼城・・・大手方向外縁部での近畿系技法の多用（慶長年間初頭か）。
本丸での石垣使用箇所の遍在性
【主郭部改造型（①、②）と城郭外縁改造型（③）】



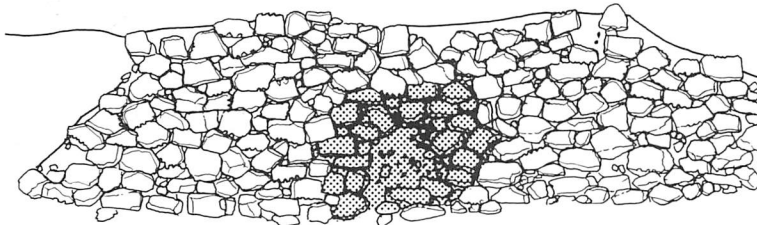
第40図 名護屋城平面図



①名護屋城跡三ノ丸南西隅櫓台・北面石垣立面図



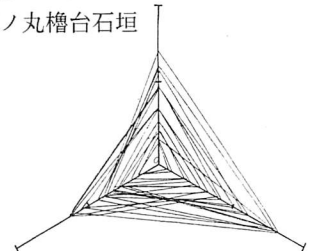
②名護屋城跡搦手口外 腰曲輪石垣立面図



③名護屋城跡遊撃丸北辺石垣立面図

石垣構成石材寸法データ

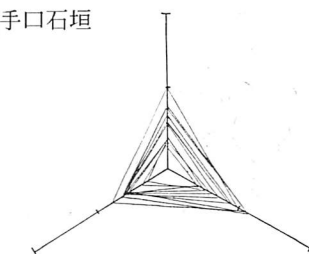
1. 三ノ丸櫓台石垣



2. 遊撃丸石垣



3. 搦手口石垣



第41図 石垣立面図・石材寸法データ

広島県山県郡東部地域の石垣について

広島県教育委員会文化課中世遺跡調査班 木村 信 幸

1 中世遺跡保存整備事業

(1) 事業対象史跡 (第1期)

	発掘調査	環境整備
・万徳院跡…山県郡千代田町	1991～1993	1994～実施中
・吉川元春館跡…山県郡豊平町	1994～1998	整備事業計画策定中
・小倉山城跡…山県郡大朝町	1999～2000	
・郡山城跡…高田郡吉田町	2001～	

(2) 県と町との役割分担

- ・県…保存整備基本計画策定、発掘調査、研究
- ・町…保存管理計画策定、土地公有化、整備計画策定、環境整備、維持管理

2 石垣の調査方法

(1) 実測平面・立面図作成→立面形状の把握

- ①万徳院跡…業者委託(モザイク写真も作成)【文献Ⅰ】⑥
- ②吉川元春館跡…業者委託、現在作成中(⑤)
- ③周辺遺跡…松木屋敷跡のみ実施、直営

(2) 発掘調査(背後にトレンチ設定)→構築法(裏構造)の把握

- ①万徳院跡…断面台形状の石垣の築造と境内地の造成は同時並行【文献Ⅰ】⑥⑦
- ②吉川元春館跡…南端土塁の構築と館内地の造成は同時並行【文献Ⅲ】⑧～⑩

(3) 石質調査→石材と採石地の把握

- ①万徳院跡…花崗岩、造成地内と周辺隣接地【文献Ⅰ】
- ②吉川元春館跡…花崗岩、造成地内と周辺隣接地(未発表)

(4) 周辺遺跡石垣分布調査等→歴史的・地理的位置付け

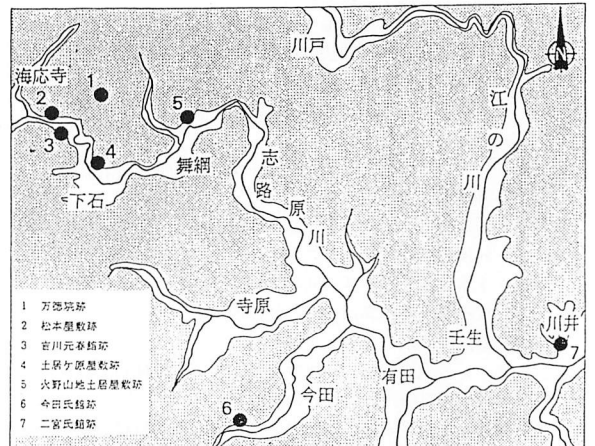
- 【文献Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ】②～⑥⑪
- ①分布調査…同一の立面形状の石垣を7遺跡で確認
 - ②史料調査…7石垣の築造時期は16世紀後半と推定
- 石垣職人の存在推定
中世史料に見られる「石つき之もの共」

3 石垣の復元方法【文献Ⅴ】

- (1) 現在整備中の史跡…万徳院跡
- (2) 環境整備の事業主体…千代田町
- (3) 基本的な整備方法
 - ・全面的な積み直しはしない。
 - ・目地詰めやかませ石によって補強する

4 成果・報告書等

- 広島県教育委員会編『史跡吉川氏城館跡、万徳院跡—第2次発掘調査概要—』
- 木村信幸「石垣築造のプロフェッショナル『石つき之もの共』の活躍」広島県教育委員会編『いぶき—ひろしまの中世遺跡—』No.7 1994年
- 広島県教育委員会編『史跡吉川城館跡 吉川元春館跡—第1次発掘調査概要—』1996年
- 木村信幸『「石つき之もの共」について』『織豊城郭』No.3 1996年
- 千代田町教育委員会『史跡吉川氏城館跡(万徳院跡) 整備基本設計報告書』1997年予定



②特徴的な石垣を持つ遺跡の分布状況

遺跡名	長さ(m)				高さ(m)	館主等の伝承	推定年代
	左側	門	右側	全長			
①万徳院跡	34.6	4.2	17.8	56.6	2	吉川元長	1574～1600
②松木屋敷跡	30.8	6.0	30.7	67.5	2	吉川元春妻	16世紀後半
③吉川元春館跡	22	7.6	51	80.6	3	吉川元春	16世紀後半
④土居ヶ原屋敷跡	32	8	36	76	1.5	?	?
⑤火野山地土居屋敷跡	28	2	28	58	1	石井木工允?	?
⑥今田氏館跡	16	4	42	62	2.5	今田中務経忠	16世紀後半
⑦二宮氏館跡	26	3.8	26	55.8	2	二宮太郎左衛門	16世紀後半

③遺跡の一覧



- ① 大朝町
- ② 千代田町
- ③ 豊平町
- ④ 吉田町

① 六七四 吉川廣家自筆書状(可長) (吉川家文書別集)
堀川普請無緩申付過半相調之由肝要候弥肝煎專一候、各辛勞之通可申聞候。
一殿鳩石垣事、年内御分別候様奉行衆へ可申分候、突中ご申、打續候て成間敷存候間、石つき之もの共可下之由申付候へ共、先々相延候能々可申分事專要迄候、渡飛兒若へ如此申遺候謹言。
十二月五日 (花押)

第42図 石垣を持つ遺跡の分布と吉川家文書

史跡富田城跡歴史概要

島根県広瀬町教育委員会 竹中 哲

富田城跡は、島根県東部広瀬町に残る広大な中世山城跡である。

富田城跡は、日本海側の平野が中国山脈へ向かい、急峻な山に接する最奥部、逆に平野を見下ろすように突き出た月山と呼ばれる山を急峻な中心に縄張りされた城跡である。城跡は独立峰的な月山を主郭として、その周囲に広がる尾根と谷を利用した山城である。また前面には中海に注ぐ飯梨川（富田川）が横たわり、自然の要害となっている。範囲は南北1km四方とも思われる。

富田城の地に城を構えたのには諸説があり、12世紀の中頃平宗清、平景清によるとの説、また12世紀の後半、守護佐々木氏の居館に始まる説がある。

佐々木氏は源頼朝が出雲守護近江源氏佐々木吉清を任命したことから、この富田城の地を選んで居を構えたと伝えられている。どちらにしろ、12世紀後半には、現在富田城の地に何らかの城館が造られていたのは確かである。これ以後、江戸時代の初期まで400年以上の間富田城は幾多の変遷をする。

出雲の守護佐々木氏の4代目頼泰は、居城を塩谷（出雲市）の大廻城に移し、以後塩谷氏と称し、富田城には守護代を置いた。しかし、6代目の守護高貞の時、因幡伯耆の守護、山名氏時代に滅ぼされた。將軍足利尊氏は、佐々木高氏（道譽）を出雲の守護に任命し、守護代に吉田秀伸を富田城に置く。しかし、領地拡大を目指す山名氏は天正7年（1352）佐々木氏に背き、守護代吉田氏を追放し、出雲の支配を固め、富田城に守護代として塩谷秀貞を置く。しかし、全国の6分の1、11カ所を支配した山名氏も、内部から崩壊し、出雲の支配も続かない。元中8年（1391）明徳の乱以後は、將軍足利義満より出雲の国守護に京極佐々木氏が、富田城にはその一族、尼子持久を守護代として置いた。尼子は守護代になると周辺の山名氏に属していた地方豪族を討ち、領地を広げ支配を強固にした。その結果持久から3代目、経久の時、（1484）に守護京極佐々木氏から追放される結果となる。一時塩谷掃部介が守護代として任命されるが、2年後経久が富田城を攻め奪回し、各豪族とともに富田城の城主とし独立し、戦国大名への基礎を築くことになる。以後約80年間戦国大名尼子氏の居城として、城地支配の中心となる。尼子氏は、経久、晴久、義久と続くが城地は因幡、石見、備後など11カ国に及んだと伝えられる。また外には大内氏、陶氏、毛利氏との戦いの幾度かが繰り返されている。しかし尼子氏も永祿9年（1566）1年半にも及ぶ籠城から毛利氏に降り、富田城も毛利氏の管理することになる。その後有名な尼子氏の武将山中鹿ノ介が奪回を試みるが失敗し、尼子氏は滅亡する。毛利氏は城代として天野隆康、ついで毛利元就、元康さらに吉川元春、広家らを置いた。

関が原で敗れた毛利氏は富田城を追われ、代わって徳川家康は遠江浜松から堀尾吉晴を富田城に配置する。堀尾氏は富田城の位置が出雲支配にとって山側に片寄り過ぎていたため、新たに松江に近世城郭、現在の松江城を築く。慶長16年（1611）松江城の完成を待って中心を富田城から松江城に移した。富田城は以後廃城となり二度と城として使われることなく現在に至っている。富田城跡は全国的にも中世を代表する城跡として国の史跡指定を受けその保護の対象とされている。山の尾根に縄張りされた曲輪跡や、いくつもの谷を含む城域跡に残る石垣や土塁など当時の城構えの痕跡をよく残す中世山城跡として有名である。

富田城の時代と城主変遷

時代	1200 (13世紀)	1300	1400 (14世紀)	1500 (15世紀)	1600 (16世紀)	1700 (17世紀)			
年号	西暦	弘安1 (78)	貞享2 (43) 正平7 (52) 興国2 (43)	元中8 (80) 歴磨2 (91)	文文明明1618 (84-85)	永祿九 (66) 慶長五 (100) 慶長六 (11)	寛文六 (66)		
守護	佐々木氏	塩谷氏	佐々木氏	山名氏	佐々木氏	尼子	毛利氏	堀尾氏	
城主		守護代	吉田秀伸	塩谷秀貞	尼子氏	塩谷掃部介	経久 晴久 義久	天野隆重 天野隆康 吉川元就 吉川元春 吉川元康	堀尾氏
主なできごと	近江源氏佐々木吉清に任せられ富田に居を構える 源頼朝鎌倉幕府を起す	四代目頼泰の時 塩谷の大廻城に居を移し 富田には守護代を置く	足利尊氏征夷大將軍になる 建武の新政 塩谷氏山名氏に滅される 佐々木守護 吉田秀伸を守護代とする	富田庄で合戦があり岩倉寺焼失 山名氏佐々木氏により出雲を奪う 守護代に塩谷秀貞を置く	源義満 南北朝を統一する 明徳の乱 放逐され京極佐々木氏守護 尼子持久を守護代とする	尼子経久 富田城を奪回し出雲を支配する 尼子経久守護代を放逐される 応仁の乱始まる	天正11年(1584) 大内氏出雲に進攻する 永祿8年(1565) 毛利元就富田城を圍む 堀尾氏一年に及びついに開城する 堀尾氏吉田氏を統一する 堀尾氏吉田氏を統一する 堀尾氏吉田氏を統一する	松江城の成立 富田川の洪水により町並が埋まる 松江移城	

第44図 富田城と城主変遷

【時期】

・検出石垣花ノ壇、二ノ丸、三ノ丸で検出した石垣は現存する石垣（堀尾氏時代）より古く、それ以前の石垣と考えられる。

【特徴】

・石積は自然石に近い大小の割石を使っている。検出される石垣からは石材を割り込む時の矢跡は見受けられない。

・角石は算木積みにはなっていない。

・二ノ丸、三ノ丸での検出石垣は山中御殿とは異なり、曲輪平場の周囲に2～3段の石垣を積み、曲輪を形造る石垣の大規模化へは至っていない。また、その周辺石垣により形成された腰曲輪通路から直接入るような虎口、階段を有している。

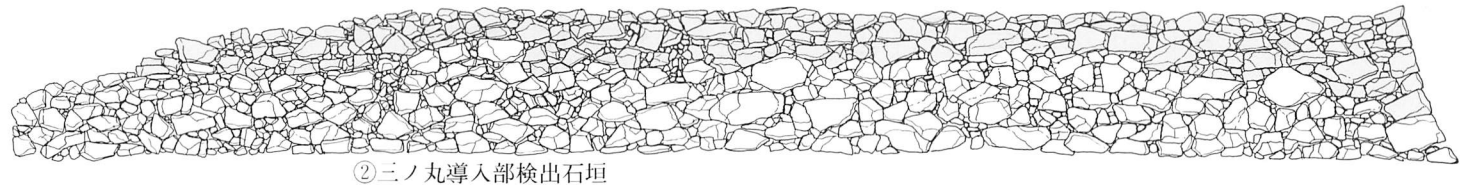
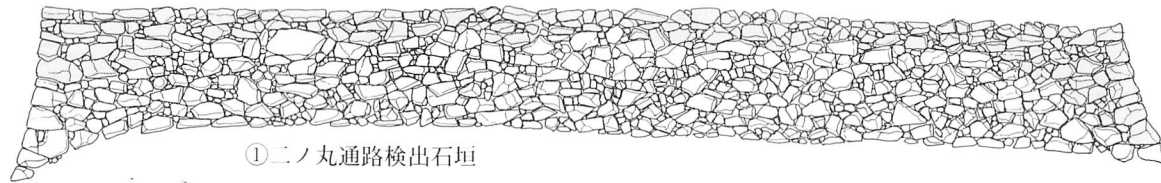
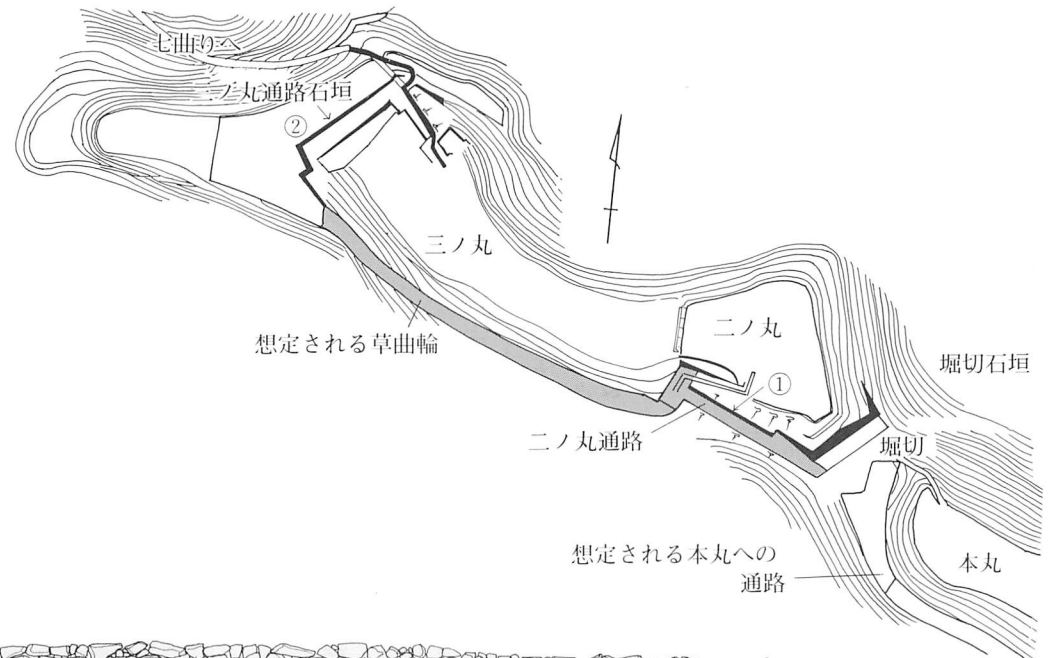
【検討事項】

・石垣の斜面崩落に伴う石垣破損が著しいための保護対策の検討。

・三ノ丸から本丸曲輪周囲を囲む2～3段で築造する石垣は現在山頂部にしかみられない。

・出土遺物は現在整理中のため、明確な時期は分らないが、吉川（毛利）時代に溯ると考えられる。

・今後は腰曲輪、通路石垣等をより詳細に調査することにより、曲輪への導入方法、虎口の明確化を図り各曲輪自体の利用方法、特徴を明確にする。



第45図 富田城跡要害部検出石垣平面図・石垣立面図

『山梨県指定史跡甲府城跡Ⅶ』概要

フリガナ	ヤマナシケンシテイシセキコウフジョウアトⅦ	
書名	山梨県指定史跡甲府城跡Ⅶ	
執筆者	八巻與志夫・崎田 哲・柏木まつ江・降矢 哲男	
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	東八代郡中道町下曾根923 ☎0552-66-3016	
印刷所	山梨県甲府市丸の内1丁目14-6 株式会社ヨネヤ	
印刷・発行日	1996年3月25日・1997年3月31日	
所在地	甲府市丸の内1丁目5番地内	
25000分の1 地図名	甲府南部 北緯 35° 39' 40" 東経 138° 34' 27" 標高 304.220m	
概要	主な時代	戦国時代～江戸時代
	主な遺構	近世初頭の城郭石垣
	主な遺物	近世瓦・戦国末の石造物
	特殊遺物	輪宝
	調査期間	1996年4月～1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第155集

1997年3月25日 印刷

1997年3月31日 発行

甲 府 城 跡 Ⅶ

発行 山梨県教育委員会
山梨県土木部

印刷 株式会社ヨネヤ

